

〔表紙〕

忠義公史料

文久三年 自十一月  
至十二月

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

一三五 〔谷村昌武建白〕

猶亦退テ愚考反復仕候処、一先西郷・大久保銘々御前へ被 仰出、各存慮十分篤ト 御聞得之上、御深考御賢慮アソバサレ候上、御重役一統被召出、御趣意之旨 仰出ニ相成候御手続ニ被遊御座、〔筋也〕敷僅右両三士之処ハ、三ヶ国之御浮沈ニ関係イタシ、其関係皇国之御興廢ニ相ヲヨホシ可申間、能々 御心配被為在度奉存上候、毎々大事件ヲモカエリミス、其罪唯恐縮之外無之候得共、今日之上実ニ不得止事、重テ奉建

白候、謹言、

十一月朔日

谷村小吉〔昌武〕

御病床ヲモカエリミス、再三罷出、申上候モ恐多被存候間、書取ヲ以奉申上候、

一三六 〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

吳々御手輕ク〜希度、御手重クハ御断申度存候事、弥御勇健珍重之至ニ存候、抑明烏は相願休日ニ相成事故、未刻頃ニ一寸々々其御方へ兩人推參仕候、併誠之微行、今出川通穴門より步行ニテ人少ニテ可參入候、側之者四五輩計残し置、其余ハ供婦リニ致候積りニ候、決て〜御手輕ク御扱御頼申度候、御手重ク御取扱ニてハ、甚々迷惑之事ニ候、吳々臨期之事故、決て〜御手輕ク御扱御頼申入度候、吳々御手重キ御扱ハ、分て〜御断申度候、何も右而已一寸々々申入度、如此候也、

霜月五日

忠熙

鳴津三郎殿

御下

忠房

〔島津忠家氏所蔵本にて校訂〕

一三七 (生野一件ニツキ木場傳内ヨリ得能良助

〈報告〉

癸亥  
但州一揆

一三七ノ一

別紙播州幾野江浪士共致乱妨候始末ニテ、

公辺江御届書ノ写ト申事ニ御座候間差上申候、御披露

可被下候、以上、

大坂

十一月七日

木場傳内

得能良助殿

一三七ノ二

兼テ御届申上候但馬国生野御陣屋江、讃岐守人数追々

押寄、去ル十五日昼後御陣屋地内江入込、不取敢取調

候処故、澤主水正始浪士共何レ江致散乱致シ候ニ相違

無之ニ付、日々致吟味、追兵差出召捕方致手配、川上

猪太郎様ニハ未御帰陣無之、猶更御陣屋嚴重ニ取固罷

在候、尤浪士共逗留中運上蔵江押入、金千三百兩并於

市中モ金子奪取候趣、其外取調中ニ付、追々可申上候、

何分御陣屋地内ノ人氣不穩成浪士一時ノ動揺而已ニモ

無之、邪正混雜、跡々鎮静方甚以心配仕候儀ニ御座候、

人数ノ義ハ御陣屋地内寺院ニ宿陣仕、諸方手配罷在候、

一 農民共生捕候浪士共并武器類拾取候由ニテ、人数押行

候途中江別紙ノ通持參候ニ付、其俥人数ノ内へ召連、

御陣屋役人江引渡候処、生捕ノ者ハ御陣屋手薄ノ由ニ

テ、人数御預ケ候由、早速在所江引取入牢番人附置申

候、

但右ノ外人数押行候途中江農民共首級差出候得共、

首級耽卜分兼候付、猶取調ノ上御届可仕候、

一去ル十四日、生野丸山辺觀音山ニテ致自殺候浪士、別

紙ノ通御座候、

竹田町

六右衛門

市右衛門

右去ル十三日、人数押行候途中江、澤主水正使者為名

代在所表江罷越候趣、生野役人共ヨリ申付候旨申聞、

別紙ノ通口上書所持罷在候ニ付、其俥取上ケ兩人ハ召

捕、在所江遣入牢為致置候、

一 生野近郷人氣騒立、強訴体ノ趣相聞候ニ付、人数差向

候処、先追々鎮静ニ趣候様子ニ御座候、右ハ生野地内

近辺共人氣不穩候ニ付、所々手配罷在取調方行届兼候

得共、荒増注進在所表ヨリ申越候ニ付、此段御届申上

候、以上、

十月廿日

仙石久利、出石藩主讓岐守家来

麻見四郎兵衛

別紙  
三七ノ三

但州生野御陣屋江十月十一日夜乱入、十三日夜ヨリ

十四日曉七ツ時比迄ニ退去、

一但州朝來郡山口村地内妙見山下ニオヒテ、十月十四日

自殺イタシ候十三人名前左ニ、

秋月

戸原卯橋

長州

南八郎

長野衛助

下瀬猛彦

小田村信一

伊藤三郎

白石廉作

河内

肥田左衛門

長州

井關英太郎

久留新三郎

和田小傳次

西村精太郎

右十二人連名書在之

外ニ名前不分

屯人

南八郎下部

十月十四日生捕

徳藏  
十九才

同州同郡網座村ニオヒテ、御代官手ニオヒテ十月

十四日生捕左ニ、

長州

大村辰之助

丹州龜山

木村愛之助

水戸

川又左一郎

前同断同日自殺

大川 藤 藏

逃去

城 六 郎

播州多可郡猪篠村ニオヒテ、御代官手ニテ同日鉄砲ニテ討取、

此モノ前出與一郎申口上ニテ相分ル、  
播州神西郡新町宿ニテ姫路人数ニテ十四日召捕、

阿州

本田小太郎卜名乗

長曾我部左七郎

普化僧

出石

素行

中原 右 京

此兩人懷中物ニテ名前相知候、

同郡森垣村角屋平右衛門方ニ止宿、姫路人数ニテ十五日於延應寺召捕、

羽田十左衛門・川上猪太郎両支配所播州宍粟郡三方谷

尾州海西郡西條村

村百姓共、鉄砲・竹槍ニテ森伊豆守領分同郡木ノ谷村

郷士江上庄兵衛悴

ニオヒテ、十月十四日、

三 牧 庄 藏

薩州

右ノモノ党ニ加里候得共、病氣ニ付乱入不致事、

討取

美 玉 三 平

京極飛驒守人数繰出シ候途中、但州網場村ニオヒテ十

中嶋太郎兵衛卜名乗

五日生捕候モノ左ニ、

自害

高田村ノ庄屋

竹 島 直 記

太郎兵衛

東 久 太 郎

黒田與一郎卜名乗

飛驒守殿家来木下八郎大夫江様子承リ候処、直記卜

生捕

右太郎兵衛弟

申ハ平野次郎ニ相違無之、見知り人有之候得共、未

喜八郎

タ本名不申立旨申聞候、

外ニ

同十二日、浪士ヨリ仙石讃岐守殿人数出張先但州養父

郡市場村江使ニ罷越候モノ、

竹田町取立役

六右衛門

市左衛門

竹田町

上布土屋

次兵衛

彌七郎

右兩人仙石殿手江召捕

逃去候モノ左二

澤主水正

宮本近江悴  
采女

出石

多田彌太郎

銀山廻ノ内  
井筒や

高橋幸太郎

彌一兵衛

肥後藤崎左馬藏事

朝日健

水戸

關口泰次郎

養父郡能座村

晋太郎

朝東郡大目村

六左衛門

矢石瀨村

元良

三三ノ四  
別紙二

十月十日、浪士体ノ者凡三十人計、播州神東郡溝口村  
ニテ晒木綿五六反買取用意ノ上、其夜同郡屋形村一夜  
ノ由、

十一日、同郡森垣村真言宗延應寺へ着ノ上、浪士ノ内ヨリ三人御役所江申出候趣ニハ、今朝我々トモ姉小路様供奉イタシ、当表江罷来候、

天朝江内願ノ筋有之御使者差立候付、御下知有之候迄逗留イタシ度候ニ付、御聞届御座候様申立候処、元ノ手代武井正三郎殿御答ノ趣ニハ、此度御代官川上猪太郎様備中御代検見中、殊ニ銀山御関所内逗留不相成段、再応御断被成候、其夜不意ニ丑刻比拔身ノ鎗劍ヲ以、御陣屋表御門ヨリ乱入、御玄関ヨリ御広間江通り罷在、兼テノ申合モ有之候事歟、但州竹田村其外所々江使者相立、百姓一統呼寄候処、兼テ銀山御役所ヨリ非常手当ノ儀被仰付有之候付、百姓共ニオイテハ、当御役所御用ニ被召候事ト相心得、数百人ノ百姓、竹槍或ハ手比ノ道具取携駈来候処、御陣内御広庭江呼入、浪士ノ者申渡候趣ニテ、此度我々存寄ノ義有之間、百姓一同味方可致、事成就ノ上ハ惣テ取箇向半減可申付旨申渡、為合紋纏ノ猩々緋ノキレ遣シ候杯イタシ候由、十二日、十三日、銀山町江申付兼御紋付紫縮緬幕、又ハ高張提灯其外竹槍・米穀・塩・噌(味脱カ)ニ至迄数多用意イタシ候由、然処酒井雅楽頭様御軍勢凡五百人ト申事、

銀山南入口森垣ムラ御出陣有之、仙石讚岐守様御軍勢五百人ト申事、銀山御出陣、京極飛驒守様御軍勢御人數不相分、但州竹田村迄御出陣ノ由、

一十四日、浪士ノモノ共前回諸藩ノ御出陣ト聞入驚候体ニテ、夜中悉逃去、但州山口村妙見山江籠居候処、御役所ヨリノ御下知ヲ以百姓数多相寄、狩人鉄砲ニテ搦候処、浪士ヨリ百姓ノ内一人殺害イタシ候付、百姓一同人氣相立、既ニ玉込可致候処、浪士ノ銘々不残自殺、就中二十二才南八郎ト申モノ尤豪勇、九人ノ首介錯ノ上、自分切腹致候由、右ノ外狩人鉄砲ニテ被討取、又ハ生捕相成候者共、左ノ通り、

南 八 郎 和田小傳次 白石廉藏(佐)

井關秀太郎 久留新三郎 西村清太郎

戸原卯橘 小田村信一 肥田左衛門

伊藤三郎 下瀬猛彦藏方 長乃清助

外ニ一人名前不知

右十三人ノ者、但州山口村ニテ自殺ノ事、

南八郎下部

徳藏

此モノ同所ニテ生捕、

川 又 (左一郎)  
郎

中 原 太 郎

木 村 愛 之 助

右二人ハ播州三月月領内來ノ原村マテ逃去候ヲ、

大 牧 辰 之 助

宍粟郡三方谷村百姓共追懸ケ、鉄砲ニテ打取候事、

右三人但州能座村ニテ百姓相集生捕ノ事、

黒 田 與 七 郎

大 川 藤 藏

此モノハ右二人同道逃去候ヲ、同所ニテ生捕、

右老人ハ同所ニテ自殺ノ事、

三 牧 藤 藏

長曾我部左七郎 (太)

此モノ森垣村延應寺ニテ姫路ヨリ生捕、尤右藤藏

中 條 右 京

事ハ病氣付、銀山江不立入、

右二人ハ播州猪笹村ニテ、狩人鉄砲ニテ討取候事、

右自殺ノ者トモ首討取、御領主ヨリ銀山御役所江

本多小三郎(太)卜名乘

御差出相成候由、

明闇寺役者

生捕ノ分、播州ハ姫路、但州ハ豊岡・出石江御預

普化僧

ケ相成候由、

素 行

右二十七人ノ外行衛不相分由、

右ノ者、酒井雅楽頭様御討手播州新町ニテ生捕ノ

浪士捨置候武器類、銀山御役所江御差上ニ相成候

事、

由、御陣内生野人別共、一人モ怪敷無之事、

平 野 次 郎

右ノ外品々取沙汰有之候得共、不取止義ニ付相略

外ニ老人

シ申事、

右二人、播州網場村ニテ京極飛驒守様討手生捕ノ

右ノ通り、生野ヨリ申来候文意ノ内、書抜ク、

事、

美 玉 三 平

一三七ノ五  
美玉三平御尋方被仰付承得候次第左ニ申上候、

一但州湯島宿屋鯛屋善左衛門方江、当四月廿日ヨリ同五月廿三日迄、九州者ノ由ニテ入湯トシテ致滞在、夫ヨリ因州ノ様出立、同八月廿四日ヨリ九月三日迄、又候右鯛屋方江入湯トシテ致滞在、其節ハ兩掛一荷、美玉三平ト名前書付、外ニ手鎗一本致所持、同四日養父郡ノ様出立ノ由、

但其節ハ惣髮ニテ參候由、

一生涯銀山御陣屋江浪人数十人押入候由承得候ニ付、豊岡京極飛驒守様御城下江差越、尚又承合候処、彼ノ御方ニ浪人兩人被召捕、内一人惣髮ノ者ニテ三平江似寄候ニ付、役々江引合相調申候処、平野次郎ト申者ニ御座候、夫ヨリ養父郡江差越、尚又細々承合候処、三平事高田村庄屋太郎兵衛方江始終止宿ニテ、俱ニ列立銀山ノ方江差越、右浪人ノ内江相加、先月十一日夜中右御陣屋江押入、尤其砌ハ御代官旅行ノ留守ニテ候由御座候、同十三日比近国ノ諸大名方御張出ノ由候付、浪人共同十四日朝、御陣屋ヨリ方々江逃去、三平儀播州ノ方江逃去候折、同日夕方森伊豆守様御領穴草村ニテ百姓共多人數相集、鉄砲ニテ打留死体御陣屋ノ様差送相成候由承候付、差越是非三平死体実正見届申度、吟

味仕候得共、右御陣屋并諸方江諸大名様方御堅メ嚴重ニテ、差越儀モ不相叶承候付、無抛手筈等ヲ以再三人遣御陣屋承合申候処、弥以穴粟村ニテ、百姓共鉄砲ニテ打留候由人毎ニ承申候、尤穴粟村ハ御陣屋ヨリ道法五里程藩州路ノ方ニ御座候、右場所江差越実正承申度、吟味仕候得共、百姓共江鉄砲被相渡、逃去候浪人体見付次第打掛候付、是以差越儀不相叶旨役人共ヨリ差留候付、無抛高田村江引取申候、

一高田村庄屋太郎兵衛事モ、穴粟村ニテ鉄砲ニ打レ歩行不叶故、太郎兵衛弟黒田與市ト申者介錯イタシ、然ル処右與市事モ無程被相捕、太郎兵衛死体三平同様御陣屋江差送候由承申候、

一情眼事兩掛一荷為持藩州ノ方江差越候折、姫路ノ人数ヨリ召捕相成、当分入牢ノ由承申候、尤御陣屋格護ノ金子千八百兩致紛失、右金子ニテモ御座候哉、兩掛ニ七百兩余所持ノ由、太郎兵衛ニモ百五十兩余所持ノ由承申候、

一三平事高田村ヨリ養父郡又ハ豊岡ノ方江、京都学講所御用ノ筋ニテ始終致往来、其節ハ兩掛又ハ手鎗杯為持往来ノ由承申候、



一南八郎卜申浪人、銀山江二里計ノ所妙見山江隨身者拾  
 二人召列楯籠候処、百姓共數十人竹鎗・鉄砲等ニテ取  
 圍候処、百姓共江被殺候テハ甚殘念ノ事ト、隨身ノ者  
 江申聞、十二人江不殘介錯イタシ、其身致切腹候由、  
 何方浪人トモ不相知候由御座候由、

一平野次郎事外ニ一人、銀山ヨリ豊岡ノ方江逃去候処、  
 豊岡堅メノ手ニ被召捕、当分入牢ノ由御座候、

一銀山御陣屋江首數十六計、塩漬ニテ格護相成居候由、  
 一浪人モ十人計逃去、行衛不相分候由御座候、

右ノ通承得候成行御座候間、此段申上候、以上、

御兵具方肝煎勤

亥十一月四日

堀口吉兵衛

一三八 (土持平八ヨリ大久保利通へ報告)

正親町殿事先達テ申上置候通ニテ、三田尻ヨリ出帆ニ  
 テ兵庫へ着岸上坂有之、其後何方へ流浪候哉、行方綴  
 兼候処、又候長州へ来着有之哉ニ風説区々之形ニ付、  
 尚又致探索、其外動静旁段々承合候形行左ニ申上候、  
 一正親町殿事何方ヨリ乗船渡海相成候哉、旁之次第不相  
 分候得トモ、先月二十二三日頃、同人へ浪士六人ニテ

致扈從、上方ヨリ三田尻へ着岸有之、当分官市へ滞宿  
 之由取々風説有之、或ハ中山侍從ニテハ無之哉、而説  
 紛敷、併右侍從事ハ大和辺ヨリ浪士俱々致分散、其後  
 丹波国幾野<sup>(生)</sup>銀山へ潜居之哉ニモ申觸、左候ハ右三田尻  
 へ相渡候ハ、正親町殿ニテハ無之哉取沙汰有之、然処防  
 長路旅人取締追々厳格有之、当月二日長崎暗臺寺住持  
 御執印地住職ニ付、此節関東出府被 仰付、上下十人  
 小倉ヨリ下之關へ相涉、中国路通行之賦ニテ、吉田之  
 駅迄參懸候処、旅人改番所ヨリ相拒不差通、夫形空敷  
 曳返、同五目下之關ヨリ乗船ニテ致上坂候由、

一当月初比、官市ニヲイテ浪士四人致殺害、途中へ鼻首  
 有之、右ハ水戸・筑前之藩中ニテハ無之哉風説等有之、  
 何方者候哉、名分等実正之義ハ不相分候へ共、幕役等之  
 廻者ニテ、浪士ニ党ヲ結候不審相掛、右時機相及候カ  
 ニモ致取沙汰、然ルニ右一人ハ大里へ相渡賦ニテ下之  
 關マテ差越候処、追手相掛召捕相成、官市ニヲイテ逢  
 殺害、付テハ此内ヨリ右体之者段々相見得候由、当夏  
 一時分、中山侍從へ付越候浪士御旗本土赤根武人ハ、會津  
 肥後之産南八郎等変名ヲ以浪士ニ紛入  
 公儀廻者ニテ、当九月比ヨリ退散、行方不相分哉ニモ

内評相洩候、勿論小倉へハ幕役ヨリ之手先追々参リ、  
専ラ防長等之動静致探索候形ニ相見得候、然ルニ此表  
浪士異様之為体ニテ、隣国自匠ニ致経廻候処ヨリ、此  
節旅人取締之義

公儀ヨリ被 仰渡、小倉領境目ハ勿論、城下町往還へ  
旅人改番所取建、往来之者銘々困生証文往来見届、不  
審等敷者ハ一切不差通、是迄之風格致一新、至極嚴格  
之形ニ相見得申候、

一先月二十二日夜、筑前秋月領四三島村岡部廣吉方へ浪

士六人差越、右ハ京都ヨリ大和辺へ致流浪候者共ニテ、  
金千両無心中掛、相答候ハ、右体之義ハ代官役所へ遂  
披露、夫々差図ヲ受ケ、何レ之筋其意ニ可応旨致返答  
候処、同夜空敷曳返、筑後乙熊村茶屋へ立寄、廣吉不  
承知之致申分候ニ付、右返答追テ可承旨、茶屋亭主ヨ  
リ伝言可呉段頼捨、直様上方地へ向致出立候由、右一  
卷ニ付筑前・筑後諸所日田ヨリ鶴崎辺へ、浪士多人數  
致狼藉候段、肥後諸所ニヲイテ風評等有之、肥後南之  
關役人猿渡榮七、右為聞合豊・筑前後諸所致手付候処、  
前条通ニテ外ニ何ソ相変承得候義無之段、当七日御本  
陣村上銀右衛門方へ差越、前段形相洩シ、左候テ已

後右体之者若又致通行候節、不差置致注進具候様、細  
々銀右衛門へ頼置、翌日致出立候由、

一御手船蒸氣、久留米様御借入相成、家老有馬監物上下  
二十八人為乗付御船上乗、大山彦助・廻源左衛門其外  
船頭水主三十人乗組、兵庫ヨリ出帆、先月二十七日田  
ノ浦へ着岸、長府領本山岬へ乗掛候処、諸所台場等ヨ  
リ相凶之致砲発、下之關出張之人数毎之通、非常之着  
服拔身等携追々馳集、俄ニ及騒動、左候テ對州藩中三  
十人余、其節下之關へ致逗留候者共右一列ニ相加、同  
様之支度ニテ海岸へ出張候、当分ハ長州へ交ヲ結候形  
ニ相見へ、前条時機合ニ付、小倉辺之取沙汰ニハ、下  
之關湊内不差通様相拒、無致方田ノ浦へ致碇船候哉ニ  
モ申触、直様大山彦介へ致御用談、細々承合候処、全  
意味違ニテ左様之訳無之、最初ヨリ田ノ浦迄可送越約  
諾之上乗廻相成、勿論湊口へ乗掛候節、久留米役人端  
舟ヨリ致上陸、形行致応接出張之人数無異義曳取候次  
第二テ、跡以台場堅之者兩人田之浦へ相涉、右帆印等  
不相分候ニ付、相凶之致砲発候段挨拶等有之、然ハ最  
初之風説致齟齬、何ソ子細無之、左候テ有馬様御事当  
八日御国元御出立ニテ、田之浦ヨリ右へ御乗船之御賦

之由候処、御家中松崎誠藏・戸田健次郎・永田泰平等御使ニテ当八日田ノ浦迄差越、近頃ヨリ豊後日田辺へ浪士等入込一揆相起、右旁ニテ此節御上京御断之御願立有之、適々御借入之事候得共、右無御抛御訳合ニテ御断之段申聞候由、先日廻源左衛門ヨリ承得申候、

一 肥後熊本飛脚林忠之丞事、当十一日小倉御本陣へ致着、同人へ承合候処、右日田之一巻突留候義不相分、併豊後・筑後辺へ相掛、浪士七八人又八十人計モ致分散、

諸所へ相見得候風説等有之、熊本ヨリ取押之人数五六十人差向相成、御手当有之哉ニハ承候へ共、何ソ一揆ト申程之儀ニテモ有之間敷哉相断、実正之義不相分、然ニ当月六日比於府中、生国肥後之産山田十郎上下三人之内兩人召捕、直様肥後へ差廻相成候由、

一 英彦山へ浪士二三十人相見得、将又彦山之執頭共近比ヨリ長州へ交ヲ結、浪士へ致一味、追々諸国致経廻候風説等有之、右実否糾明取押トシテ、小倉番頭二木飛馬・物頭二人・大砲組小队等上下凡三百人程、当十二日英彦山へ差向相成候由、

右通御座候、以上、

長州下ノ關詰

唐物締横目

亥十一月十四日

土持平八

大久保一蔵殿

一三九〔近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

御書中何も忝候、追日寒威増長、一兩日は別て難凌候、愈御平安珍重存候、誠ニ一昨鳥は御出給、御談話申承忝存候、今朝ハ猪太郎江御伝言何も御尤ニ承候、扱極密之

宸翰御請書御草稿御出来ニ付、密ニ為見給篤ト拜見候、逐一御尤ニ存候事、尤何之所存も無之候、御闕字等之処も是ニテ至極ニ存候、尚御請書御献上之様ニと存候、勅門一条も御認至極ノニ存候、其内熟考ニテ御請可申上候、昨日言上致置候俟、御安心之様存候、何モ御報迄荒々申入候也、

十一月十七日夜詔

寒氣御自愛之様存候也、

内々御報

三郎殿

御下

忠熙

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

附紙

文久三年癸亥十一月

宸翰御請書

一四〇〔近衛忠房忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

実々死人怪我人在之由、甚々懸念々々之事ニ存候也、  
今日も寒冷殊更ニ覚候、弥御勇猛珍重尚承度存候、抑  
昨鳥は俄ニ推参、誠ニ面白々々事深々喜悅候、昨夜も  
大長座大沈酔く、其許ニは嘸々御草臥之事と察し入  
候、扱閑東本丸焼失之由、飛脚屋より申来候、誠ニ風  
聞故不慥候、定て実否慥ニ御承知ニ相成候事と存候間、  
承度存候、実ニ焼失抔ニテハ又々上洛之障ニも可相成、  
深々懸念之事ニ候、御承知ニも候ハ、巨細承度存候、  
右已荒々如此候也、

十一月十九日夜

忠熙

大乱書御免

嶋津三郎殿

御下

忠房

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一四一〔近衛忠熙ヨリ島津久光へ書翰〕

日々寒威甚候、弥以御安康珍重存候、過日来少々御風

邪之旨、寒氣之時分專御保養之様存候、抑過日之

御内勅御請之儀、御風邪ニテ少々延日之儀御断申上置

候得は、何も被

聞食候、御快方ニ候ハ、

御待被遊候旨

御沙汰ニ候、右之段一寸申入置候、何も荒々如此候也、

霜月廿三日

内密  
三郎殿  
御下

忠熙

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一四二〔島津久壽ヨリ伊集院平治大久保利通へ

書翰〕

乍恐親

御機嫌等之儀共宜敷様奉頼候、以上、

嶋津主殿  
〔久壽〕

十二月五日

伊集院平治様

〔久憲〕

大久保一蔵様

〔利通〕

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一四三〔島津久壽ヨリ大久保利通へ書翰〕

去月廿八日

御書幸領ニて被差立候江夏喜蔵、昨夕方下着いたし、御書差出、慥ニ御請取申上候、且御問合加之喜蔵江御舎之趣も委細致承知候、

三郎様益御機嫌克被為在御座、恐悅御同意奉存候、借此許之形勢別て能模様ニて、先町飛脚便を以申上置候通、弥何も相変儀無御座、

大樹公断然御決定之所より、惣裁職板倉侯・酒井侯其外之所も最ハ大丈夫ニ御座候、左候て御書之儀、今朝持参いたし可然欵と吟味も有之候得共、何分御登城前ハ毎も暫之御逢ニて、何も事件具ニ申述候儀ハ尽兼候次第も御座候付、延引之儀とハ奉存候得共、今日七ツ時分より喜蔵同伴いたし

御書持参仕、拜謁之儀奉願候処、未御退城無之、然処六ツ過御退城ニ相成、段々外ニも拜謁願人も有之様ニ相見得、暫有之候て罷出候様御案内有之、喜蔵一同ニ毎之通罷通候て同人被差越候儀共申上、御書小子ヨリ御直々差上候処、即御開封ニて篤と御覽

被為在、誠ニ

三郎様御趣意之程猶又親敷御承知被成、実ニ御尤至極被思召、何れ

三郎様御趣意之様ニ無之候ては不相濟事ニ候段、丁度先日小子江被仰聞候通之事候間、猶亦

御書之趣、大和守様其外御同席中様江被仰談、弥一日片時も御早く

御発途被遊候処、精々御尽力可被成との段承知仕候得共、猶又重て丁度

御趣意之御旨小生ニも申上、喜蔵よりも彼是巨細ニ申上候趣も御座候処、一々時機至当公平之論、弥此節柄、断然

御決定之儀ハ、先日より小生江も度々被仰聞通無疑、来十七日ヨリ廿日比ニハ無相違

御発途ニ相成賦ニて、一杯ニ相働候間、少シも無疑様相心得、其趣能々御取被為

在候様ニ申上候との御事ニ御座候、若其時分迄御船不相揃候ハ、

御召船等之所さへ四五艘有之候得は、外ハ無御構御発し之御賦ニ御座候由、御供方等之所ハ、とても考通ニ

參兼候間、是ハ何れ近日之内より陸行之筈ニ有之段、

御沙汰ニ御座候、隨て御返書之儀は、乍恐如何可被成下候哉と相窺、私共ニも明後七日ニハ出立之心組ニ御座候段小生申上候処、とふも其内ニハ御返書も不被為整、何れ同席中相談いたし候て、七日八日之間ニ、其方共江此方より申遣候間、忝人ニても宜敷參候様いたし度、とふそ夫迄ハ相待呉候様ニ御懇ニ御沙汰承知仕候間、御受仕置、左候て度々申上事ニ候得共、

御上洛御日限之所、一日も早不被仰出候ては、上下之人心安堵居合も付不申候間、利害得失弁解仕候処、七日八日ニ返書被差出候、其内何れ御日限も被仰出ニて可有之、内実ハ御究ニ相成居候得共、とふも今晚其処被為申聞度被思召候得共、其儀ハ勘弁いたし呉と、別て御丁寧ニ御沙汰有之、恐入申候、尤此方共迄早其段承知仕度と申上候儀ニハ聊無之、誠ニ旁難有次第ニて、最ハ弥無相違御事と奉存候、乍恐御口氣ニも、廿日過猶弥何も大丈夫ニて候と度々相窺申候間、其時分ニても可被為在欵と奉恐察候、右様之次第ニて、格別六ヶ敷撰立申上候儀も無之、左候ハ、御返書御下迄ハ罷居可申旨申上候て、御暇仕候折ニ、自分

御上洛之上も何角

三郎様御頼被成度と思召様之御沙汰、能程合ニ被仰聞申候、左右して又近日參夕時咄事も有之との趣も御沙汰御座候、何そ思召も有之欵と奉察候、右様之時機合ニ付、何れ御返簡御渡ニ御呼出之節迄ハ、兩人共ニ罷出候て、承知不仕候て相濟間敷事と申礼申候間、右廉之場合も、宜敷様ニ被仰上置可被下候、

御書御渡被下次第、直ニ出立いたし候様之旨ニ御座候、御直ニ御渡被成様な御模様ニ御座候、將亦昨夜出帆相成候蒸氣船よりも申上越候、先日勝麟太郎方江差越、御船之御都合ハ如何之段細々承申候処、廿日比迄ハ大丈夫之段、安心いたして被居申候、五六艘參候得共可也ニ御用途相成よし、段々考合見又承候処、公義船横濱江式艘長崎より壹艘參様な向き、越前船・長崎船御回船、筑前船・肥前之船も、決て參ふうな模様ニ御窺申候、御船之ことハ、此方が御請之賦ちやと笑て被居申候、先々別条無之相心得居申候、永井主水正殿江も中介同伴昨日差越候処、折悪く留守逢取不申候、越前之島田近江ハ今朝出立いたし候、格別急ぎ之様ニも被聞不申、十日計ニて上着之賦と咄ニ御座候、右件々喜

蔵よりも可申上候間、彼是能々御勘考を以

御前宜敷様被仰上可被下候、先は此段、公私之交用御  
海容可被下候、敬白、

十二月五日

嶋津主殿

大久保一蔵様

追啓、帯刀殿江沓封同条差出度候得共、差急其儀不  
相調候間、乍恐宜敷様御申述被下度御頼申上候、

(島津家氏所蔵本にて校訂)

一四四 〔島津久壽ヨリ伊集院平治大久保利通へ〕

書翰)

昨四日夕刻江夏喜蔵到着いたし、板倉候江之御内用向  
被仰付越候趣相達候付、今朝直ニ

御書持参之含御座候得共、

御太鼓より 御出殿にて、朝之間は別て暫時之事にて、

毎も御繁用ニ候間、今夕刻喜蔵同伴

御書持参、板倉候江拜謁いたし、篤と

御趣意演説仕

御書差上候処、早速御披観相成、

三郎様御趣意至正至当之御義論にて、別て御尤ニ被思

召候旨致承知候付、御返翰之義奉乞候処、大和守様・

雅楽頭様江も御相談之上、可被差出候付、来ル七日八  
日比迄相待呉候様いたし度、且其期二いたり候ハ、

御発途御日限等も被 仰出、旁御沙汰之趣も可被為在  
候間、左様相含居候様にて之御事にて、別て深切御懇

意之御沙汰にて御座候、就ては、明後七日御当地出立

之含罷在候処、右之形行御座候間、いつれ御返翰被相  
渡次第、直ニ出立可致候条被達

御内聴候義共、宜御取計可給候、此段御内用を以申越

候、以上、

江戸

十二月五日

嶋津主殿

伊集院平治殿

大久保一蔵殿

(島津家氏所蔵本にて校訂)

一四五 〔松平容保廻状〕

一四五ノ一

一輪啓上仕候、寒威凜然ノ候御座候得共、益御安宇恭  
賀ノ至奉存候、然ハ松野州ヨリ別紙二通差越、異存モ  
無御座候ハ、御順達仕候様申越候間、一覽ノ上御廻  
申上候、次順江ハ夫ヨリ御廻達被下候様仕度奉存候、

草々、以上、

十二月九日

一四五之二

別紙相認御廻達得御添削可申等之処、素々差急候儀ニ候故、早く関東江遣し、跡より草稿御廻候ても可然、春嶽殿より御相談も御座候ニ付、略て直ニ差出候間、左様御承知被下度候、以上、

十二月十日

松平肥後守(谷保、会津藩主)

伊達伊豫守様(宗城、前子和島藩主)

松平下野守様(黒田長知、筑前藩世子)

稲葉長門守様(正邦、京都所司代、淀藩主)

嶋津三郎様(久光)

長岡澄之助様(護久、細川慶順弟)

長岡良之助様(護美、同上)

再伸、今日参

内差懸候間、乍略儀代筆を以申進候、

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

一四五之三

一筆致啓上候、甚寒之節ニ御座候処、

御所益御安全

公方様倍御機嫌能被遊御座、奉恐悦候、随て

各様御安健御奉仕可被成御座、珍重奉存候、扱去六日、

一橋公御始私共一同二條殿江被召呼、

尹宮・右府殿・近衛殿御父子・徳大寺内府殿御同座ニ

て

御上洛之儀、兩度迄被仰遣候得共、今以御様子不相分、

深御案事被

思召候、

大城焼失等無余儀訳合も有之候得共、此節速ニ御上洛

無之候ては、向後不容易形勢ニ可至被

思召候ニ付、御日限御取極、早々御発途被為在候様

御懇諭之

勅意御書面を以、尚又関東江被仰遣度被

思召候趣、左様篤と如何可有之哉御内談被仰聞候処、

一橋公始申上候様、右は至極難有

思召ニ御座候得共、已ニ再応被蒙

御沙汰、今又御懇諭被下候儀、於関東深被恐入候儀奉

存候、且は弥本月下旬

御発途之趣、年寄共より申越候ニ付、必相違有之間敷

候間、今一応御懇諭之儀は御見合被下候様、一同奉願

候、右御同座之方、御懇篤之儀は勿論



主上ニ於て

御上落御待兼被遊候程之御様子、委細奉伺、御一和之御都合、実以不堪感泣次第ニ御座候間、少も御早く御日限御取極被仰越、早々

御發途被遊候様仕度、一同屈指て奉待上候、委細之儀ハ、一橋公より御上書有之候間、定て各方様も御拜見可被成、右御合考御領掌宜敷御取計被下候様奉希候、先は右之趣早々申上度、如此ニ御座候、恐惶謹言、

十二月

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一四六 〔島津久壽ヨリ大久保利通へ書翰〕

炎上ニ付、窺御機嫌之儀は先便申上置候通ニ御座候、一寸御窺と御座候ても、中々御品々不日ニ相揃候丈ニ無之、来ル九日ニ取揃相成、被差出咎ニ御座候、御品立等は小生帰京之折可奉入

御覽候、大抵御例も御座候、左候て急便岩下より窺ニ相成候、

〔徳川家定夫人篤姫、奇形童女〕

天璋院様御手元より女中共江被下御用之金子八百兩余、折々御沙汰も被為 在、尤花川より此御品ハ如何様ニも御減少ハ不相成、勿論御反物杯之場ニ御目錄ニ

て被下候処ニ御取立ニ相成候得は、却て此御元様ニは御仕合之向きニ相見得申候間、何れ是丈ハ近々之内ニ御差出ニ相成候様、取計有之筈御座候間、窺ニハ相成候得共、其段ハ不都合不相成様御取成奉頼候、猶細事ハ小生御直ニ可申上候得共、此段吟味相変候訳ニ付申上度候、宜敷奉頼候、以上、

十二月五日

主殿

一藏様

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一四七 〔近衛忠房ヨリ島津久光へ口述〕

口述

弥御勇猛珍重ニ存候、抑過日は御入来賑々敷喜悅之事ニ候、扱今日ハ正親町三條〔実愛、謙差〕・阿野〔公誠、同上〕・久世復役被〔通照、同上〕 仰付、

六條議奏御役被 仰付候事ニ候、就てハ何か都合毛宜敷、旁勤修寺之事巨細ニ明朝猪太郎〔高崎五六〕・佐太郎〔高崎正風〕 兩人之内

ヲ以、内密正親町三條へ御申入ニ相成候様希入度候、左スレハ大ニ都合宜敷ト存候事ニ候、仍午夜中右申入候、乱書御推覧可給候也、

十二月廿七夜

三郎殿内々  
御下

忠房

〔島津忠承氏所蔵本にて校訂〕

一四八〔横濱鎖港談判使節〕

- 一番 フランス
- 二番 イギリス
- 三番 フロイセン
- 四番 スユツル
- 五番 ホルトカル
- 六番 ヲランダ
- 七番 オロシヤ
- 八番

アメリカ

○正使池田〔長崎、外国奉行〕筑後守

○副使河津〔萩、同上〕伊豆守

○準副使河田〔照、相模守、目付〕鑑之助

○御徒目付一人〔實〕

○外国奉行組頭一人

○調役

○定役

○同心

○黒鍛

右上下都合四十人余

極月二十三日、フランス舟ニテ出帆、長崎へ立寄、上

海へ廻り、是ニテ別舟〔矢張り〕フランス舟ニ乗替、香港ニテ薪水

積込、当月十五日池田氏ニテ振舞、

一四九〔土持平八報告〕

一四九ノ一

長崎製鉄所蒸氣船御借入相成、此節長崎表江御用荷積

入廻船ノ処、土官以下役人等都合六十八人乗組、豊州

小倉領白野江村青濱沖江致碇船候処、本船釜屋ヨリ火

起致焼失、乗組ノ者共追々諸所江游渡致助命、或ハ汐

ニ卷レ洋中江払出、溺死ノ者段々有之、右ニ付御用諸ノ儀有之、出会可致旨大原林左衛門ヨリ掛合ノ趣、当廿五日申刻時分相達、直様出立陸路ヨリ通行ノ処、五六里山坂ノ難場同夜田ノ浦迄差越、右林左衛門江曳合、猶又水夫等江其場ノ時機事情細々承合候形行、左ニ申上候、

一長崎製鉄所蒸氣船一隻

但碇二頭綱二房

大砲二挺

蒸氣廻鉄道具品々相添

御用荷

一繰綿六百本

一荏子ノ油拾挺

一唐ノ土二十二箱

一光明丹二箱

一御用金百五十兩余

但右御金ノ分揚荷

外ニ乗組人自物類品々不相分

右ハ長崎製鉄所御用船御借入相成、勿論古船ニテ此節修覆相成賦ニテ長崎江廻船ニ付、本行品物等積入、当

月廿二日兵庫出帆、同廿四日夜五ツ半時分、豊州小倉領田ノ浦江一旦乗掛候処、長府前田・壇ノ浦等、台場ヨリ三四発最初空砲致シ、乗合ノ者如何様相図ノ砲発軟ト差心得タル由候処、港口近寄候場合、諸所台場ヨリ相打続実丸致連発、二十五六発モ打懸候軟、船涯江追々実丸飛越ノ念遣ニ有之、無致方蒸氣ヲ早目巻里程跡へ乗返シ、小倉領白ノ江青濱沖江碇泊候処、無間モ船ノ釜屋ヨリ火起、尤モ風呂ノ下江繰綿底積有之、右江燃付夫ヨリ船張江燃上リ、船中ノ者共必死存詰、精々相働消方為致由候得共、何分北風烈敷、中々手ニ難及積荷等惣テ致焼失、御用金丈乍漸大原林左衛門外水夫供ニハツ平ヨリ取卸致格護置、又候右乗返シ助船トシテ乗出、且又同浦江肥後船頭儀七郎ニモ橋船ヨリ乘向候節、最早船上廻リ焼払、銘々海中江飛入、或ハ游渡候者モ有之、六十八人ノ乗合ノ内二十八人致致命、是迄死骸搜方等仕候得共、不相見得、右ノ内岩元市之助・役人奥州ノ産内田傳治死体流寄、其余ハ全不相分、然ハ汐早ノ場所、殊ニ時分柄ノ風烈ニ付、汐卷テ洋中払出候半軟、勿論右死体自然流寄候ハ、直様拙者ヨリ可相請取段、委曲田ノ浦代官・大庄屋・浦奉行等江曳

合置候、且又岩元市之助・内田傳治二人死体漸瀉へ流寄候ニ付、則相請取置大里御用達重松榮治郎・御国問屋等江相計、田ノ浦出張役々江案内ヲ受、同浦浄土宗ノ真楽寺地面借入致内葬、右次第付テハ士官ノ事付、他ノ見分等不相請候様、其段ハ最初ヨリ申分置候処、御国法通何様共可致旨承得、諸事不都合無之様取計置候、然ハ乗組ノ者二十八人無恙地方江游渡致助命、寒氣堪兼候半、依テ御本陣村上銀右衛門江取計、中古着綿入類四十枚致都合、銘々渡付置候、將又御船道具類取揚等就テハ、当日迄海荒候故搜方等不相調、其後天氣和候付、則御用達其外問屋共召列青濱江相渡、現場所細々見分仕候所、最初地方ヨリ八九丁モ有之哉ニ船中共申出候得共、当分ノ処ハ十五六町相隔、海底十五尋位モ可有之哉、只今帆柱卷丈計焼出、洋中江頭レ出、上革類惣テ焼失ノ形ニ相見得、然共碇二頭備付ノ大砲等相沈候半、依テ取揚方ノ手段仕候得共、迎モ一通ノ事ニテ容易ニ曳揚候儀、難相成形ニ浦人共申出候付、御用達ノ外問屋共江申渡、追テ其筋心得ノ者共江取揚形ノ手段細々評議相約、何分申出候様頼入置候付、追テ形行可申上候、

一蒸氣船焼失付、二十八人ノ者共陸地へ游渡候処、直様同所浦ノ出張役々ハ勿論、浦人共至極丁寧致シ、左候テ刃鄙ノ場所ニテ<sup>マ、(金銀カ)</sup>积会向等行届兼候付、御本陣村上銀右衛門方江転宿可致旨再三申承、翌廿六日昼時分、御本陣江差越候付テハ、中途六七里ノ場所ニテ、二十八人江銘々駕籠手当方代官ヨリ致都合、然ルニ当日御馳走役飯森辰藏御本陣江差越、大原林左衛門江面談見舞致シ、且又賄料ノ儀、全所仕出ヲ以一日三度ノ賄方罷定、無故長滞在仕候テハ、却テ御面倒相成候ニ付、昨廿八日ヨリ今日ニ相掛、水夫頭ヨリ以下ノ者共御国元江差下、右ノ内水夫頭和田覺左衛門・松元正助兩人ハ召留置申候、自然乗組ノ者、万一風波ニ依テ地方江相寄候欵モ難計、其時外ニ誰モ存知ノ者無之故、頼ニ相留置候、

(鷹類、久留米藩主)  
一有馬中務様御番頭渡瀬平大夫・大里在番津田廉平・高村権内当分大里江出張有之候処、前件変事聞伝、不捨置直様酒肴等致持參、御本陣江差越、右平大夫使ノ由ニテ津田廉平致見舞、且同廿五日夜白、田ノ浦迄私出張居候処、旅宿亭主ヲ以私江面会仕度段申承、則致応対候処、有馬様内田中伴助ヨリ申出候ハ、前条変事付

テハ取々風評有之、何レノ筋実正ノ処承度、且ハ右御見舞トシテ可差越段、役頭渡瀬平大夫ヨリ致承知罷出候段申承、右林左衛門其外水夫共ヨリ申承候形行ヲ以相答、尤遠方迄御見舞被下候段、厚一礼申述置候、

一御船焼失付テハ此表風説段々承合候処、最初田ノ浦江碇船ノ処、長府台場諸所ヨリ実丸・焼丸等数發打掛、右ノ内船屋形江一發、船ノ水涯江掛ニ發程打当、右次第小倉領田ノ浦ノ者共、見受候者有之哉ニテ、実ハ砲丸・焼玉ノ為ニ焼失致シ候儀共專申触、迺モ自火トハ不曳受、依テハ成程夜分ノ事ナカラ焼玉等打掛、旁次第外見モ有之、自火ノ筋風説難破、右ノ趣意猶又士官大原林左衛門其外水夫共江再三承合候処、自火相變無之段、一函ニ申募候得共、弥其筋共難見受様有之、何レ御評議可有御座哉奉存、為御見合申上候、

一長府ヨリ致暴發等候時機事情猶又探索仕候処、当分下ノ關萩城ハ惣頭福原越後元興、家老、長府ヨリ穴戸安房已下三百人、先兵ノ儀ハ六拾代ト角石ト申所江近比ヨリ陣屋出來、同所混ヨリ詰合、然ニ当月廿四日交代人数乗合、尤浪士百五六十人当日出張、凡五六百人重居候折柄、蒸氣船通船ノ相図等聞取、軍粧相整、鉄砲其外鎗・長

刀拔身ヲ携追々駈集、大砲等打掛、右スレソレ玉小倉領江モ追々飛越、且又蒸氣船側近ク、萩ノ商船石炭積入通船有之、右江ニ發打当、夫形乘沈、無間モ蒸氣船及燒亡候ト見、台場ヨリ勝土氣揚世、尤当晚ハ對陣ノ形ニテ出張、夜ヲ明シ、翌二十五日銘々曳取候節、於陣小屋ニ又候一同ニ凱歌揚、左候テ当日異船打沈候故、万々一異人・日本人死体流寄候共、一切手掛不致、洋中江突流候様下々江触渡相成、勿論此已來假令日本ノ帆船有之候共、蒸氣船打払候様申渡相成候由、

一当二十五日、田ノ浦江岩元半之丞死体流寄、右脇江ツテラツ平老船乗捨有之、如何様同人乗捨相果候欤否哉、助命ノ者共江承合候得共不相分、然ニ長州ハ小船ヨリ諸所乘廻致見分、右ハツ平船押取漕婦候風説有之、折角承合候折、小倉浦奉行脇田重太江右浦方一件ニ曳合候処、当人ハ前段バツ平押取候儀、無相違番所ヨリ届申出候形行、為心得致案内旨承得写取、別紙為御見合差上申候、

但右一件付テハ乘頭大原林左衛門、水夫頭上床仲之丞・川口熊助上京仕、右同船ヨリ葛城彦一儀モ同様上坂仕、勿論彦一事私江曳合御用筋儀有之滯泊

仕候折柄、前条異変致到来候付、右一卷等其外防  
長動静旁細々手ヲ付置、存知ノ訳合御座候間、猶  
又此節ノ儀モ委敷同人ヨリ御聞取被下可然哉、為  
念此段申上候、以上、

豊前小倉滞船

唐物締横目

(綱幸)  
土持平八

亥十二月晦日

奥掛

書役勤

長野彦七殿

岩切八兵衛殿

東郷源左衛門殿

一四九ノ二  
別紙

小倉浦田ノ浦大庄屋ヨリ届書ノ写

口上覚

今七ツ時分、長州藩中七人乗組船二艘当浦笠石江致渡  
海、今朝御届申上候バツタイラ漕帰候様子見受、番人  
ノ者ヨリ如何様ノ訳ニテ漕帰候哉ト相尋候処、今朝致  
見分置候間、漕帰候趣ニテ、荒々敷申聞候ニ付テハ、

名前番人ヨリ相尋候処、田邊啓右衛門ト申者ニ付、届  
申候処有之候ハ届可申旨相聞ケ、不取敢漕帰候様子番  
人ヨリ申出候間、早速罷越見申候処、最早洋中へ漕出  
居、何分手式ニ及不申候間、其尽仕置申候、右付テハ、  
自然何様ノ儀出来候モ難計御座候ニ付、流寄候死人外  
方江所替仕置候、仍此段御届申上候、以上、

田ノ浦庄屋

規久田源之助

御浦奉行

御役所

右ノ通写取差上申候、付テハ猶又段々承合候処、長州  
ヨリ漕帰候者ハ、前田・壇之浦出張ノ奇兵隊浪士共ノ  
由承得申候、此段申上候、以上、

十二月晦日

土持平八

長野彦七殿

岩田八兵衛殿

東郷源左衛門殿

一四九ノ三  
長崎製鉄所蒸気船乗組ノ内致助命候者共、左ノ通御座  
候、

士官

・大原林左衛門

水夫頭

上床仲之丞

川口熊助

益婦次兵衛

遠矢善けさ

中島半左衛門

福留祐右衛門

上木龜次郎

藤田十兵衛

高江源次郎

原田本右衛門

溝口友次郎

森船藏五郎

同才太郎

鬼塚徳次郎

田中仁次郎

宮内利介

林森之助

杉本次郎左衛門

井戸口庄けさ

池田仙介

川添伊八

山元源太郎

玄禮正太郎

北田覺左衛門

松元正助

中村彦助

賄夫

助次郎

政右衛門

利右衛門

龜太郎

小太郎

役人福昌寺

梅嶽

賄夫

熊次郎

牛之助

右乗組ノ内溺死左ノ通(朱)  
一文久三癸亥十二月廿四日ノ夜豊前小倉領  
内田ノ浦沖ニ於テ、長州軍ノ浦台砲撃ノ為  
メ沈没ノ際死亡人名左ノ如シ

役人  
けさ介  
甚四郎

濱崎 太平次  
正太郎  
休之丞

士官  
宇宿彦右衛門(行通)  
久保 十郎

兒玉勇之助  
大田小平治

向井仲右衛門  
坂元城左衛門

岩元市之助  
榊 十郎

鮫島 鐵哉

機関者

梅田市蔵

古田 嘉助  
松岡平右衛門  
上原市左衛門

大工  
二ノ方良右衛門

火焚

池上 庄八  
濱田 伊兵衛

西次郎左衛門  
前田 善助

賄夫差引

酒匂 藤次郎

役人奥州ノ産

内田 傳治

賄夫

為次郎

傳次郎

半 十

佐太郎

善四郎



平次郎  
助 熊

役人佐土原

亀 吉

合テ人数式拾八名

右之通御座候、以上、

亥十二月晦日

一五〇〔東郷伊八郎中島源左衛門ヨリ即宗院住

職へ書翰〕

としころ大 皇国のミいとおとろへ、夷らかためには  
つかしめを受給ふこと、天のしたの恨ミにて、そはみ  
ちにそむける司人のつミなる事いさしなけれハ、やか  
て

天津神のみこゝろもて、かれらがいのちをは、たゞせ  
給へり、されとその弊猶ざりはてねハ、とかく世の人  
こゝろおたやかならず、雲の上にもいたく

みこゝろをなやまし給ふよしきこへけれハ、我君おほし  
たつことありて、都へなんのほり給ひしを、そのみと  
もにつかへし人々の中に、いかゝおもひあやまりけん、

上にそむきみだりに事をおこす徒ありて、直になには  
の津より伏水の駅ニあつまりしハ、卯月の廿三日なり  
しこと、ゑさきたちて陽明殿のもの、給ひ事のよしを  
みかたとに聞へ上げ、ふかくハかり給ふ事おわしけれハ、  
みけしき斜ならず、やかて

みことのりありて、終にかのしれものともを討さため給  
ふことゝはなりぬ、さてことの討手にむかいし人々の  
中に、独道嶋正邦ぬしハかねて身にやまひありて、未  
手もあしもすこやかならぬに、人にさきたちてかの魁  
首の一人をきいて終に討死しける、その忠勇ことなる  
によりて、

君ふかくあはれみ給ひ、なきからをかくろふ山のふも  
とに葬ぬ、かつかの人々と同じく御感状褒祿などたま  
わりしハ、世にありかたき武門のめいふくにて、おや  
まてかくの心のうちハ、おしはかるにもあまりなるへ  
けれハ、数ならぬあたりまでそのよし一くたりをハも  
とめ給ふも、いとわりなきわさになむ、

きゝながら身のしら玉とかゝやけハ

これもいくたのもりのした露

知紀八田喜左衛門殿

おほ君のためにくたけし白玉の

光ハ千世にのこらさらめや

國安洪谷三之丞殿

さやかにものこれる玉のひ(き腕カ)こそ

砕けしのちの光りなりけれ

日下部金満

関山鬼敬太殿

みなと河遠きなかれをくみてこそ

きよきその名はあらわれにけり

平為徳時任武右衛門殿

うのはなの月もかひなきゆふやみに

すてゝも玉ハさやけかりけり

清秋田代九郎太殿

可憐氣力与精神 雪裡独魁天下春

只謂梅乎勿誇潔 世間有此節義人

柳温□□

男友廣書□□

正邦の健気さはいふも更なり、こゝろさしのいさきよ  
きみさをとなりし感する事のあるハ、其なをいたみ追  
福し奉りて、

藤原宣偉

ますら雄かおもひたちにし玉の緒ハ

みたれん世をやむすひとめけむ

果得人間臣子職 到今義唱神州

当年伏見両堂夢 打破南泉第一頭

紫溟居士題

□□

此ヨリ已下ハ白紙ヲ多ク残シテ、志人ノ追善ヲ乞

フモノナリ、張紙ヲイタシ置キ候、

覚

一碑銘并跋歌詩

一軸

但表粧白茶金欄象牙帛沙袷浅黄絹桐箱入、

一金子二百疋

但往年御取始末料、

右ハ親類亡道島五郎兵衛文久壬戌初夏、伏水ノ

難ニ死シ遺体ヲ貴寺埋葬シテ、碑ヲ墓ノ傍ニ建、

然トモ後世ニ文字霜苔ノ為ニ磨滅セン事ヲ憂

ヒ、碑銘ヲ写シ跋并詩歌ヲ寄テ一軸トシ、フカ

ク貴利ニ納ム、希クハ後年永ク伝ヘム事ヲ、仍

テ如件、

文久三年

癸亥十二月

東郷伊八郎

實之

中島源左衛門

利和

即宗院

御住職中

一五一〔徳川慶喜外七名連署建白〕

此節

尹宮之

御上ニヲイテ、種々浮説相起候趣承知仕、不堪驚愕之

至奉存候、素ヨリ

宮之

皇国之御為メニ 御心力ヲ被為 竭候御誠義ハ、一同

深ク奉感服依頼候義ニ御座候処、右様流言被行候儀ハ、

皇国一層之危殆ヲ添候義ニテ、何共戰兢恐懼之極地ト

奉存候、

聖明ニオカセラレ、夫等之迂策ニ

御動搖可被為

在御義トモ不奉存候得トモ、姦邪兇險之正議ヲ妨ケ、

骨肉ヲ傷害仕候ニ離間之策ヲ用ヒ候ハ、古今同轍之義

ニテ、昭然タル事ニハ御座候得トモ、其之策之成敗ニ

ヨツテ、

天下国家ノ安危存凶ヲ分チ候義、和漢共其証跡分明之

事候ヘハ、縦令

聖明ニオカセラレ

御嫌疑之

叡念不被為

在候共、銷骨鑠金之姦計

朝野ヲ煽惑スルニ至候テハ、以之外ナル御大事ニテ、

御間柄ニヲイテ御覺隙一度相啓候テハ、

皇国之綱維御挽回之期ハ絶果候事ト相成、臣等乍不及

抛身命尽力仕候所、詮モ無之誠亦空敷纒間ノ為ニ挫折

仕候テハ、実ニ不堪飲泣之至候ヘハ、此時ニ当テ

宮之日月ヲ被為貫候 御高義御忠誠ハ、臣等社稷ニ換

死ヲ誓テ奉

奏上候間、仰冀確乎タル

聖徳愈泰山之不動ニ比セラレ、

皇国万安之御鴻基ヲ被為建候様、臣等叩頭泣血

闕下ニ伏シテ奉企望懇願候、誠恐誠惶頓首、

一橋中納言

松平春嶽

松平肥後守

伊達伊豫守

松平下野守

島津三郎

長岡澄之助

長岡良之助

一五二〔土持平八ヨリ琉球産物方掛へ報告〕

当不容易砌柄、世評ニ難聞捨儀、何事ニ不審諸国ノ風評等細々致聞合申上候様致承知、大口筋上陸致通行、肥後水俣江差入、熊本城下町ヨリ肥前島原迄ノ間、諸所取沙汰承得候形行、左ノ通御座候、

一 江州彦根藩中、致浪人三百人又ハ五百人位肥前島原江致滞在候取沙汰有之、肥後水俣江差入、於諸所承合候処突留慥成儀不相分、同国八代ヨリ川尻町辺ニテ承得候得ハ、当五六月比ヨリ島原江段々相見得候風説有之、差懸衷正成儀分明不致候付、直様同所高橋ヨリ雇船ニ

テ、夜白島原江相涉、綿密手ヲ付細々承合候処、島原領先松平主殿病死ニ付、水戸古先中納言殿(忠實)末子養子ニ被為濟、当三月十五日国元江初入部有之、同月二十三日ヨリ長崎出張有之、五月初頃帰城ノ由、然ニ本国ヨリ近習役名前等不相分候得共、兩人被列越代々居付相成、其外供廻ニモ段々罷越候者有之、右ハ先月中旬比致帰国、左候テ右外ニ生国譜代新古ノ訳不相分候得共、当主人江江戸表ヨリ定府五六十人程附添相下リ、右ノ内二十人計、先月初比又候一旦江戸江相登、凡百人以上島原江居付相成賦ニテ、城内目付内手狭ニテ外屋敷迄取広、定府居ヤシキ当分太粧ノ普請等有之、然ハ此内ヨリ専彦根浪人罷居候哉ニ申触候ハ、畢竟右体紛々ノ雜説ト相見得、無形事ニテハ無之候得共、全ク虚説ニ別条無御座候、

一 御国江英国人来船、御掃攘ニ付テハ上町津端市中惣テ御焼払被成、異人火矢ノ為ニ焼失ノ方ニハ取沙汰不致、尤今ニ至リ追々下町家遠在ニ御曳払ノ御手段ニ及ヒ、若モ再ヒ軍艦致入港時機モ候ハ上陸御待レ、御必戦ノ御勇決ニテ、弥嚴格御手当有之、且兩度ノ御打合終リノ戦争ニハ、英人蒸氣船二艘炮丸ニ相当リ痛ラレ、壹

船ハ覆候付、外五船共夫成空敷致退帆、其後英人死体追々流寄、一々御城下ニオヒテ御仕置被仰付、右ニ付テハ当春時分、異船既御拒絶ノ

御勅定被仰發候砌ヨリ、諸国ヨリモ御国ヲ目当イタシ、既兵端開ク期ニ至リテハ、先御国ノ御一戰次第ニ本朝ノ機會可相分ト、一同相窺被居タルトノ風説モ有之、且又長州江異船入港ノ節、萩家臣炮台ヲ捨逃去手後ノ儀有之処ヨリ、畢竟異賊共見侮戰爭再度ニ及ヒ候得共、御国ノ儀ハ兼テ御軍備被為整、尤段々人傑ノ者多ク、必死存詰致戰爭、殊ニ異船一艘ハ空敷相沈候故、英國人六百人余又ハ六十人<sup>マ、ノ内カ</sup>生捕相成、夫々才領付ヲ以近々

京都江被差登杯申触、此節ノ一卷ニ付テハ、別テ取沙汰宜敷、御国ノ御武威近国江被為御輝候形ニ相見得申候、

一肥後熊本藩中兩人先月末ヨリ当月初比、下・西田町会所江罷越候ハ、段々ノ為聞合被差越形ニ相見得、右ノ者共滞在中英國人御掃攘相成候、当朝馳帰リ出水筋夜白致通行、水俣迄差越、夫ヨリ乗船ニテ、松葉瀬江着岸イタシ、城下江形行申出、直様御援兵被差越賦ニテ、

上下千五百人又ハ老万人共申触手当相成、八代郡代所江陣小屋取構、人馬并渡海船ノ用意有之、水俣ヨリ乗船ニテ川内川口、又ハ市來辺ヘ相渉、夫ヨリ上陸ノ手筈ニテ、勿論町家ノ者迄モ段々家來格身分ノ者共有之、罷越筋ニテ夫々手当相成候処、異船退帆ノ一左右ニテ取止被成候由、

一此節肥後江越前候ヨリ使者、家老并大目付用人近々罷越候取沙汰有之、主用何事候哉承合候得共、差当相分不申候、

一島原湊江差入候処、自他国船ニ水手共ヨリ承実正ノ儀ハ不相分候得共、此節

勅使九州下向有之、長州萩并肥前・佐嘉・筑後・筑前・久留米迄御下向ノ賦ニテ、右御先乘尾張侯、跡仰安房侯、御供水戸殿外ニ三方ノ大小名不相分候得共、既近々、京都御宵発有之哉ニ取沙汰承得申候、

一御国江英人軍艦追テ差向模様候哉、旁ノ訳長崎表ノ風評等段々承合候処、此度御打払ノ夷船ハ、惣テ東ヲ乘廻リ候故、決テ江戸表江乘廻シ候半、又ハ軍船痛ラレ、外船共ヨリ申分無之、外国江着岸モ難計、左候テ右ノ内志艘ハ長崎江着船ニテ、修甫取加候哉ニモ風評有之

候得共、取々ノ申口実否相分不申候、右通ニテ、此節  
大口筋ヨリ肥後水俣江通行ノ処、此表連日ノ雨天ニテ  
諸所川支相成、滞宿ノ場所モ有之候得共、可成差急夜  
白島原江相涉候、洋中ニオヒテ逆風ニ逢、詰所江致汐  
繫、乍漸昨夜致着岸候ニ付、明日順風次第、筑後又ハ  
肥後高瀬江罷越賦御座候間、猶又諸国ノ風評等致聞合、  
承得候形行自然詰場所差入ノ上可申上候間、先此段申  
上候、以上、

下ノ關唐物締

肥前島原滞在

横目

土持平八

琉球産物方掛

御裁許掛衆

元治元年 (1864)

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
元治元年一月ノ一

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数六二枚)の記載あり〕

## 目録

- 馬關ニ於テ汽船焼亡ニ就キ届書
- 全上ニ就キ長州藩ヨリ届書
- 全上ニ就キ肥後国大麻丸船頭ヨリ言上書
- 奈良原高崎長州へ汽船焼亡談判使命セララル
- 山階宮御文
- 山階宮御還俗ニ就テ
- 本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 安田助左衛門日記抄

馬關ニ於テ蒸氣船焼亡ノ概況喜入攝津報知書

高崎猪太郎書ヲ伊達公ニ呈ス

小松帯刀家内へ書翰

禁中聞書

汽船安行丸買入達書

英夷ト和睦及扶助金ヲ与フ

全上

久光公建言

喜入攝津ヨリ在京小松帯刀へ報告

汽船焼亡ノ顛末問答ノ概要

折田要蔵建言

九州各所視察ノ事実報告書

道嶋正亮紀事抄

全上ニ対シ返書

元治元年甲子 清暦同治三年  
西暦千八百六十四年

神武天皇御即位紀元二千五百二十八年 (ママ)

孝明天皇 統仁第百二十代 御即位弘化四年十八年 御宝算  
丁未十月三十二

將軍家茂 第十襲職  
安政五年 七年 十二

藩主忠義公 第二十九世、當時  
修理大夫ト称ス 知政 安政五年  
戊午十月 七年 年  
癸午 十四

藩祖忠久公薩・隅・日三州及琉球國受封（人皇八十二代）  
後鳥羽天皇壽永五年（即于文治二年）六百七十七年

関白左大臣二條齊敬公

右大臣徳大寺公純公

内大臣近衛忠房公

政事総裁松平直克（六月罷免）

老中 本多美濃守忠民

水野和泉守忠精

板倉周防守勝静（六月罷免）

井上河内守正直（七月罷免）

酒井雅楽頭忠績（六月罷免）

有馬遠江守道純（四月罷免）

牧野備前守忠恭

稻葉美濃守正邦

阿部豊後守正外

諏訪因幡守忠誠

松前伊豆守崇廣（慶應元年十月罷免）

松平伯耆守宗秀

若年寄

田沼玄蕃頭意尊

館山藩主 稻葉兵部少輔正巳

諏訪因幡守忠誠（六月老中格へ転ス）

大給縫殿頭乘謨（六月罷免）

立花出雲守種恭

本多能登守忠紀

酒井飛騨守忠毗

土岐山城守頼之

遠山信濃守友詳

所司代

松平越中守定敬

京都町奉行

瀧川播磨守具知

永井主水正尚志

小栗下総守政寧

菊地伊豫守隆吉

瀧川讃岐守元以

伏見奉行

林肥後守忠交

国老

島津豊後久寶



川上筑後久封

樺山主計久要

喜入攝津久高

島津左衛門久微

川上式部久美

川上但馬久運

小松帶刀清廉

桂右衛門久武

町田内膳久憲

岩下佐次右衛門方平

諏訪伊勢武盛一時島津ノ  
新号ヲ許ス

新納刑部久脩

川上龍衛久齡

以上十四名前代ヨリ勳  
統ノモノハ○印ヲ付ス(○印なし)

一五三 馬關ニ於テ汽船焼亡ニ就キ届書

(京都二本松邸ニ於テ)

長崎製鉄所拜借蒸氣船為修覆長崎へ差越度、旧臘廿三日兵庫致出帆、同廿四日夜五ツ過小倉領田ノ浦へ致碇泊候処、長府台場ヨリ致發砲候ニ付、如何異国船共見

違候哉、兼テ夜中ニハ帆柱毎ニ燈籠ヲ掛ケ、見印ト致

シ候段、前以条約致候ニ付、猶又為念燈籠差出シ候得

共、無体ニ打掛ケ候ニ付、早々同領白ノ江村青濱へ引

返候処、無程船中致發火不残焼失ニ及候段申越候、此

段御届申上候、以上、

但乘人数ノ内士官九人・機官士以下十九人行衛相知

レ不申候、

子正月二日

松平修理大夫内

内田仲之助(政風)

一五四 全上ニ就キ長州藩ヨリ届書

去月廿四日夕七ツ時、長門国豊浦郡府中沖合ニ異船一

艘上筋ヨリ乘来候ニ付、赤馬關砲台ニテ相凶両度打揚

候処、右無沙汰ニテ、夜ニ入五ツ時比押テ台場前面へ

乘来候ニ付、急襲ト心得及砲發候、然ル処右船上筋へ

乘去候段、出張ノ家来ヨリ遂注進候、此段不取敢御届

申上候様、大膳大夫ヨリ申付越候ニ付申上候、以上、

子正月二日

松平大膳大夫内(毛利慶親)

乃美織衛(宣)

此ノ届書ニ就テ其趣旨市來(広貫)・土持馬關(編考)ニ於テ長州吏員ト談判書ニ参照シテ事情知ルニ足ル、

文久四子年正月

大麻丸船頭

村上新兵衛

一五五 全上ニ就キ肥後国大麻丸船頭ヨリ言上書

一五六 奈良原高崎長州へ汽船焼亡談判使命

セラレ

帯刀殿ヨリ被相渡候御書付之写

奈良原喜左衛門(譜)

高崎 佐 太 郎正風 旧名

私共船当十二月廿四日夜豊前国嶋崎へ碇泊仕候処、同夜五ツ時前蒸気船一艘田ノ浦(福岡県)ニ碇泊仕候処、無間モ長州路ヨリ砲発ニ及候ニ付、右蒸気船ヨリ相凶ニ帆柱へ燈籠揚ケ下ケ六度ニモ及候ヘトモ(事実)、猶々砲発烈敷相成候間、田ノ浦江引退キ島崎へ参リ、又モ碇泊仕候節、時々橋船ヲ以私共船へ乗掛、助船早々差出呉候様承リ候ニ付、船中一同恐怖罷在候ヘトモ、薩州様御手船ト名乗り候故、即時ニ板舟ニ仕立、右蒸気船へ乗付候ヘトモ、既ニ一団ノ火ト相成候故、近寄行候ヘトモ、御乗組人数目当次第御助ケ申上候御人数都合三十人、且又其余淡路守様へ右同様ニ都合御乗付、総人数四十人御上陸有之候ヘトモ、寒氣中ノ事故、粥其外衣類等旁御介抱仕候テ御存命ニ相成、然ルニ総御乗組六十九人ノ内右四十人ハ御存命、残り廿九人御行衛分(編考) 死人名後ニ記スリ不申候、此段奉申上候、以上、

右ハ長州へ御使トシテ被差越候旨被仰付置候得共、従公義被仰渡趣有之候付、此節被差立候儀ハ、見合候様被仰付候条可申渡候、

正月三日

帯刀小松

一五七 山階宮御文

高崎正風ナルモノハ慷慨雄略ノヒトニシテ、胡人吹笛ノ形勢ヲ憂ヒ、飄然トシテ弊廬ヲ訪ヒケルニ、  
かゝる世をいかになかめていますそと  
とはれてしほるすみそめの袖

トカタラヒシニ、カヘシ、

小野山のふかきころはなけれども

ゆきふみわけて君をこそとへ

トアリタレバ、

とひくるもとはるゝ我ももるともに

みくにをおもふころなりけり

釈門ニ生長セシ身ナレハ、国歌ノ事ヲ知ヘキニモアラス、

只管ニヨモヒニ任セテ谷鳥ノ囀ヲマナベルハ、誰ゾ勸修(京都市)

寺ノ山辺ニスメル嘯月トイヘル翁ニテアリケル、

一五八 山階宮御還俗ニ就テ

一五八ノ一(光親王)

山階宮御還俗あらせ玉ひし時、

正風

去年の冬比よりおもふよしありて、しばし山科

なる勸修寺の御坊をとふらひ奉りけるに、ある日、

すみそめのころものうらのしら玉も

あらはれぬへし御代の光に

又た雪のあした歌の中山をこゆとて、

をの山のかき心はなけれども

雪ふみわけて君をこそとへ

なとひとりこちておほけなれ、跡にさへひそかに

なすらへつゝはかりこちける事のありしに、今年

文久四年の春風に、殿の名の氷室の戸をし、なご

りなく、こちひらけてけふしもミヤこに入らせ玉

ふ御供たまはりたるうれしなとはおろかにて、さ

らにうつともおぼへず、

まことに夢かとおもふ志ら雪の

ふりしたためしもあらはこそあらめ

一五八ノ二

高崎佐太郎

此度出格之被為蒙

朝恩候義ニ付テハ、内外厚尽力周旋被成上、深御満足

ニ思召候、依之別紙目録之通、甚御見苦敷御品ニ被為

在候得共、御挨拶之験迄ニ被下候事、

目録

一御文箱 一合

一御文台 一脚

以上

右正月

御使者國分主殿ヲ以所賜也、

一五九 本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

(汽船焼亡云々)

新年之佳儀千里同風愛度申納候、其御地

上様益御機嫌能被遊 御座、恐悅御同然奉存候、

貴所様弥御安康大慶奉存候、二二三小生無異加年仕候間、

乍憚御放意可被下候、年首御祝儀申上度如是御座候、

恐惶謹言、

甲子正月三日

本田彌右衛門

親雄



大久保一蔵様

参人々御中

再白、其御地何様之形勢御座候や、

大樹御上落も疾く御着候半、御会同之諸侯如何御一

決有之哉と、日々御左右伺度奉存上候、乍恐

朝議朝麥暮革ハ先相止申候半、実ニ不容易事会御配

慮奉遙察候、扱旧臘廿四日夜、製鉄所蒸氣船豊前小

倉領田之浦へ碇泊いたし候処、長州より砲発故乗返

し、同領白之江村青濱へ碇泊之処、失火にて御舟焼

失、士官始乗組之者共二十八人沈没、行衛不相知候

段同晦日飛脚到来、何分其翌日之届書にて、其場之

次第いまた不分明之事情も有之候、其段ハ早速其御

地江も御問合越相成候様、御勝手方等へ相付申出、何

分早々誰そ同所へ差引之上、被遣候様申出候処、山口

七之助同夜被差出候由、晦日着之飛脚ハ御船手之益

滿次兵衛と申者にて、右を呼出相糺候処、自火二ハ

無相違形ニ被聞候得共、此前越前船通行長崎行之節、

宇宿彦右衛門(行衛)より長崎江ハ引合置、以来目印之旗を

指し、夜ハ同しく燈を掛可申旨云入置候処、右様砲発

之次第何共不審之至、右ニ付ハ去ル二日、園田彦左衛

門長州へ為尋問被差出候由、自火にて焼失とハ乍申、

此末之処砲発之主意不相分候ては、落着も不相成訳、

実以不容易事体ニ関係いたす事柄にて、自然向々よ

り其御地江、御問合越ニは相成たる筈奉存候得共、

形行一左右申上候、此上非常之難事到来候てハ、誠

ニ恐入候訳にて、追々

御帰国も被為在候節、御迎之御船も御手当等何様

御座候哉、幕府蒸氣船又々御借入ニても候哉、右等

之次第当地何方も尋候ても相分り不申候、唯々案煩

仕候間、乍御繁務中一筆御知らせ被下候様奉願候、

蒸氣船方御座立被仰出罷勉候得共、一向右式相分り  
不申次第、如何と考居候迄ニ御座候、  
(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

一六〇 参考 安田助左衛門日記抄

正月三日、於敷舞台御太刀進上、御祝儀申上御流頂戴  
被仰付候、

正月十四日、伊集院十右衛門取次ヲ以テ明十五日、御  
用被仰渡、

正月十九日、式部殿ヨリ奥掛書役勤岩切八兵衛ヲ以承  
知イタシ候ハ、馬關田地頭飯屋手狭ニテ、其上所役共  
(官論果えひの市)

日勤ノ場所無之、郡奉行ヨリ造立ノ儀申出、且加久藤  
御飯屋引直ノ儀モ申出候へ共、加久藤ハ大郷、馬關田  
(同上)

ハ小郷ニテ、其通ニテハ加久藤ノ者共氣請モ不宜筈候  
間、居地頭職ノ儀ハ当分ノ通ニテ罷居候儀ハ、兼郷ノ  
事故加久藤へ罷居候テモ差支無之候間、両方イツレ成

共勝手ニ罷居候様承知イタシ候事、  
(慶應元年志)

正月廿九日、右松十郎太祐長へ甲州流兵学奥儀致皆伝  
候、右ニ付証書左ノ通遣候、

一空翁以来代々甲州流兵学御師範被成来候処、貴公御  
幼稚ノ折御父祐賢丈御死去ニ付、流儀後見私へ被仰付

置候、然処其後子細有之、御伝来ノ書籍ハ勿論、流儀  
迄モ門人中ヨリ願ノ上官府へ差上候へ共、貴公深御懐  
慨、積年兵学御執行故切磋ノ功歴然相見得、実以不堪  
感歎候、依之祐賢丈并杉山八藏憲履ヨリ私相伝仕置候  
甲州流押太鼓、短時大星奥秘口訳一字一点モ不残此節  
致御伝授候間、向後猶又御勉勵御先祖へ不愧様御教導、  
一廉ノ大用御勤可被成候、為後証如件、

元治二年乙丑正月廿九日

安田助右衛門  
(左)

寛濟印

右松十郎太殿

(編集述いカ、石室致稱所収安田助左衛門日記、国立国会図書館所蔵)にて校訂  
本書ハ過去ノ事柄アルモ、取捨セス抄写シテ参考ニ供ス、

一六一 馬關ニ於テ蒸氣船焼亡ノ概況喜入攝津報

知書

一昨元日文久四年正月、町便を以申上越候通、長崎製鉄所御預  
受之蒸氣船、小倉領青濱沖ニ於て、釜屋より火起り焼  
失いたし、苦々敷次第御座候、御船ハ兎も角も、宇宿  
通唱彦始式拾七人致溺死候半不相分由、右之内兩人は死  
体上り候由、寔以不便之至御座候、則横目山口七之助

為差引用心金等為持差出置申候、右七之助江も長藩等之儀承合、其御許江も申上候様申付置候、然処下之關詰横目土持平八より成行中届申越候間、定て其御許江も為申上筈と存候得共、右之書附も差越申候、天災とハ乍申実ニ残念御座候、初發田之浦江乘向候節空砲打出し、湊近く乘入候処、下之關・壇之浦等之台場より実丸數發打懸候付、懸念之処より小倉領青濱沖へ碇泊候処、無間も火発右時宜ニ及候由、下之關ニても色々取沙汰、長藩穴戸安房(元應)・福原越後為惣頭出張、前件通砲發、二ツ船之頭江射当、御船焼失を見届、勝吐氣を作り引取候由相聞得、無礼之挙動甚以不心得義ニ御座候、乍併其節は風波強、殊ニ雪天ニて有之たるよし候間、決て挑灯等之御印も不相知、全西洋舟ト存込右仕抹ニ及候半、此表宇宿并大山(通舟)之御も致砲發候得共、直ニ彼之藩小舟より乗參及挨拶候由、右之趣は御聞届為被成置、就ては此節は雪夜ニて、御国舟とハ全不存姿ニ候、乍然当夜は兎も角も、翌朝ニ相成候得は細詳可相分、不取敢其場所江も挨拶も無之趣ニ相聞得、心外之次第御座候間、御裁許懸園田彦左衛門被差出筋ニ致吟味奉

同(奉伺トハ太守公)、其通取扱仕置候、自小倉迄出懸、土持山口・大原林左衛門(大原ハ燒亡汽船乗員ナリ)等江事実承届候上、依時宜ては大原ニも致同道、長藩江引合致応接候様申付置候、且此表之儀も有之、乍存夜中長海江乘入候義、実是不調法ニ御座候、何分口惜次第不量変事ニ御座候、何れ追々可相分候間、猶細事重て申上越候様可致候、以上、

正月三日

喜入攝津高久

小松帶刀殿

川上式部殿

二白、園田彦左衛門よりも成行之御届、其許御側役へ向、御届申上候様申付置候、  
(島津忠孝氏所藏本にて校訂)

一六二 高崎猪太郎書ヲ伊達公ニ呈ス

(伊達)昨日伊豫守様ヨリ三郎様へ被仰進候云々ノ事件有之、  
(山内豐信)早速私容呈様へ御使者相勤、是迄ノ手続旁參預ノ一条、  
(山崎宮田稱)且勸修寺宮御帰俗一件等細縷言上仕候処、何モ逐一御同論ニテ、如何ニモ御尤ノ御処置ニ被思召候段御沙汰拜承、右ニ付容公參預ノ員ニ被為加候儀、御病氣中辻モ御堪兼被遊候間、御断被仰上トノ事ニ付、此儀ハ絶

テ御差扣被遊候様奉願置候、随分御許容被遊候、尤御様子奉伺候処、中々此涯御参 内ノ儀思モヨラン勢、且ハ甚御無理ノ様奉窺候、近々賢侯方御打揃御参殿ニ

テ御説得遊バシ候ハ、御動揺ノ期モ可有御座候、此儀ハ悠遠悠久ノ御心得可然御事ト奉存候、其他何モ御異論ト申程ノ事モ無之、誠ニ不堪雀躍ノ至、右ノ事情故婦掛昇殿言上ノ合ニ候処、昨宵子刻過罷帰不能其儀、今朝モ彼是扮擾昇殿仕兼候間、何卒右ノ趣宜敷御披露被成下度、偏ニ奉仰候、将亦長州暴挙ノ御届書献呈仕候様、三郎様ヨリ被仰聞別紙差上候間、是以御披露御願申上候、イヅレ縷々ノ事情ハ、明朝モ参殿御直ニ言上可仕、其内大略ノ事情如是御座候、何卒右ノ趣ハ〔松平慶永〕春嶽様ヘモ、伊豫守様ヨリ御晰合被遊下候様ノ儀、御願被下度奉願、何モ混淆中乱毫真平御海量可被下候、恐々不尽所思候、頓首百拜、  
〔頭註〕「(再夢紀事参照)」

高崎猪太郎五六  
旧名

友愛

法

子正月念四

伊達伊豫守様〔宗城〕

御近習中様

一六三 参考 小松帯刀家内へ書翰

カヘス〜イトイ被成候ヨウニゾンジ参候、早々メ  
デタクカシク、

文ニテ申入マイラセ候、マヅ〜折カラノサハリナク、サヘ〜シククラシ候ハツト、イカバカリ幾久シクメ  
デタキ事候ゾンジ参候、拙者ニモ大元氣ニ相勤居マ、少シモ〜アンジナサレマシク候、コ、元モ無事ニ御座候マ、アンシンナサルヘク候、三日便ヨリ文トモ遣シ候マ、相ト〜キ候ハントゾンジ参候、何カト細ニ申遣シ事候ヘトモ、今日ハ早朝ヨリ平松家其外堂上方へ年頭ノ御祝儀ニ出、  
上様モ御出旁ニテ大キニイソキ居、アラ〜一シヨウ申参候、ナラステ長々申残候、幾久シクメデタクカシク、

正月五日

小マツ帯刀

無事

於チカトノ

人々

一六四 禁中聞書

一六四ノ一  
毛利大膳父子伏罪ノ形迹相頭候ニ付、追討諸藩一同凱陣ヲヨヒ候由、尾張前大納言以書取言上被 聞食、此上ハ防長処置ノ儀即今ノ急務、且又 皇國ノ大事ト被

思召候間、兼テ 御沙汰ノ通大樹速ニ上坂、被安 勅慮候様<sup>元ノマ</sup>俵所置可有之旨被 仰出候事、

元治元年子正月 (年紀違イカ)

一六四ノ二  
今般大樹上坂ノ儀更被 仰出候ニ付、尾前大納言儀暫 被召留候旨被 仰出候事、

元治元年子正月 (年紀違イカ)

一六五 汽船安行丸買入達書

安行丸

右ハ先度於長崎御買入蒸氣船、右通船名被召付候旨 被仰出候段、京都ヨリ申来候、此旨御船奉行へ申渡、 向々へ可申渡候、

正月

攝津喜入

右ニ付太守様ニハ御在国ニ付、此方ニテ可被仰渡ヲ、 京都ニテ 三郎様ヨリ被仰出候ハ、如何ン、

一六六 英夷ト和睦及扶助金ヲ与フ(八日)

英夷折合ニ就テハ、不容易重大ノ事件ニ候得共、

御両殿様篤ト被為及御勤考、大小軽重御斟酌ノ上、一 時ノ権道ヲ以、時日遷延ノ術計被施度

思召候折柄、島津淡路守殿ヨリ御願ノ趣有之、<sup>(久好、佐土原藩士)</sup> 人・能勢次郎左衛門江「(能勢直陳紀事参照)」

御趣意被

仰含出府被仰付置候処、猶又切迫ノ模様成立、近々

御国許へ廻船モ難凶事情ニテ、無拠

幕府へモ御届ノ上、仮ニ扶助金相渡候段相達候、全体

御本志ノ訳ニハ不被為在候へトモ、

皇国御危急ノ秋ニ当リ、此上

御国難被為請候テハ、十分勲

王ノ御趣意難被為立ハ案中ノ勢ニ候間、暫時小ヲ被為 忍、御国中一定ノ上ハ汚辱一洗、

御大志被為述度、実以不被為得止ノ御処置ニ候、就テ



ハ一同無御抛

御趣意奉汲受、海岸文武磨励ノ道今一涯振ハマリ、成  
功ヲ遂候様、各職掌々々ニテ相励、致尽力候様有之度  
旨被

仰出候事、

英夷折合ニ就テハ、不容易重大ノ事件ニ候得共、

御而殿様篤ト被為及

御勤考、大小軽重御斟酌ノ上、一時ノ権道ヲ以時日遷  
延ノ術計被施度、仮ニ扶助金迄モ被相渡、暫時小ヲ被  
為忍、御国事一定ノ上御大志被為述度、実以不被為得止  
御処置ニ候間、

御趣意奉汲受、海岸武備ハ勿論、文武磨励ノ道今一涯  
振ハマリ、成功ヲ遂候様

御別紙ノ通被

仰出、誠ニ以

御而殿様不一方被遊

御厚配、暫時権道ノ御処置ニモ被為及、実ニ恐懼ノ至  
ニ不堪、臣子ノ分ヲ尽スハ此時ニ候間、  
御趣意ノ程奉汲受、海岸武備ハ勿論只管文武研究イタ  
シ、各職掌相励、涯ニ成功相立候様深切心掛、可奉安

尊慮候、

文久四年子正月

大藏〔朱〕

攝津〔喜入〕

但馬〔川上〕

一六七 全上

英夷折合ニ就テハ不容易重大之事件ニ候得共、御而殿  
様篤ト被為及御勤考、大小軽重御斟酌之上一時之権道  
ヲ以、時日遷延之術計被施度 思召之折柄、島津淡路  
守殿ヨリ御願之趣有之、樺山舍人・能勢次郎左衛門ニ  
御趣意被仰含、出府被仰付置候処、猶又切迫之模様成  
立、近々御国許へ廻船モ難凶事情ニテ、無抛幕府へ御届  
之上、仮ニ扶助金相渡候段相達候、全体御本志之訳ニハ  
不被為在候得共〔朱〕「(能勢次郎左衛門及ヒ富田通信親話記參  
照)」

皇国御危急之秋ニ当リ、此上御国難被為受候テハ、十  
分勤 王之御趣意難被為尽ハ案中之勢ニ候間、暫時小  
ヲ被為忍、御国事一定之上ハ汚辱御一洗、御大志被  
為述度、実以不被為得止之御処置ニ候、就テハ一同無  
御抛御趣意奉汲受、海岸武備ハ勿論、文武磨励之道今

一 涯振ハマリ、成功ヲ遂候様各職掌々々ニテ相助、致  
尽力候様有之度旨被仰出候事、

一 英夷折合ニ就テハ不容易重大之事件ニ候得共、御兩殿  
様篤ト被為及御勤考、大小輕重御斟酌之上一時之權道  
ヲ以、時日遷延之術計被施度、仮ニ扶助金迄モ被相渡  
暫時小ヲ被為忍、御困事一定之上御太志被為迷度、実  
以不被為得止御処置ニ候間、御趣意厚奉汲受、海岸武  
備ハ勿論、文武磨励之道今一涯振ハマリ、成功ヲ遂候  
様御別紙通被仰出、誠以 御兩殿様不一方被遊御厚配、  
暫時權道之御処置ニモ被為及、実ニ恐懼之至ニ不堪、

臣子之分ヲ尽ハ此時ニ候間、御趣意之程深奉汲受、海  
岸武備ハ勿論、只管文武研究イタシ各職掌相助、深ク  
成功相立候様深切ニ心掛、可奉安 尊意候、

右之通奉承知候様無漏申渡、諸与与力・諸郷・私領  
へ可被申渡、向々へ可申渡候、

子二月

大藏  
撰津  
但馬

右扶助金一件ニ付、尊 王家ノ輩生麥一条ハ勿論、  
何篇攘夷々々トイカメシク言誓リ、殊ニ公辺ヨリモ  
国家ノ大事ニモ可相及候間、程能キ所置有之度、度  
々言サトシ有之候得共、夷国人共何モ恐れヘキ事ハ

無之、曲直分明彼ヲシテ屈服ナサシムル道イカ程モ  
有之、モシ暴戾相募リ候ハ、夷国迄モ征伐可致旨  
事々敷言誓リ、繕ヒシ甲斐モナク、去ル七月接戦之折  
徳カハノ烈シキニヲソレ、佐土原へ託シ償金之名目  
ヲ替、扶助金トシテ金七万兩被遣候儀ハ何事ゾヤ、  
実ニ国家ノ大事ヲ引出、宗廟ヲヤカレ過分ノ入価ニ  
及ヒ、夫ヨリ段々ト諸色モ高料ニ成立、今コノ文面  
大小輕重、一時權道小ヲ忍シテ、一定ノ規本相立候  
上ハ汚辱一洗杯ハ何事ゾ候ヤ、深ク可勤考モノ也、

### 一六八 久光公建言（近衛家蔵）

臣源久光誠恐誠惶頓首々々、死罪々々謹上言、  
臣伏シテ惟レハ、方今天下ノ形勢日ニ危殆ニ赴キ、人心  
恟々トシテ乱將ニ起ラントス、然ルニ將軍既ニ火輪船  
ニ駕ス、不日ニ当ニ洛ニ入ル可シ、此機実ニ安危ノ係  
ル処至テ大ナリ、熟慮セスンハアル可ラス、仄ニ伝承  
スレハ、幕府ノ衆吏諸藩ノ輩下ニ輻輳スルヲ忌ミ、從  
来ノ幕威ヲ以テ是ヲ制圧シ、再ヒ  
天朝ヲ度外ニ置奉ラントス、嗚呼是ヲ何トカ云ン、幸  
〔徳川慶喜〕〔松平定房〕〔松平慶次〕〔伊達宗城〕  
ニ一橋中納言及ヒ會津中將・越前中將・伊豫侍從・土

(山内憲範)  
佐侍從等ノ数人、確然トシテ此機ヲ洞察シ、今ニ及ン

テ君臣ノ名義ヲ正サスンハ、天下遂ニ瓦解土崩、救フ可ラサルニ至ランコトヲ憂慮シ、幕吏ヲ説解シ、若用ヒサル者アラハ罪ニ処センコトヲ議定セリ、臣退テ熟

考スルニ、譬ヒ衆幕吏ヲ説得シタリトモ、將軍ノ胸裏

君臣ノ名義ヲ正スニ着眼セサレハ、如何シテ此危殆ノ

形勢ヲ挽回スルコトヲ得可シヤ、且去春ハ將軍上洛ノ

廢典ヲ再興セシカトモ、(三条)藤原實美以下齋暴ノ卿相等、

浪士ノ邪謀ヲ信シ、

朝威ヲ假テ彼ヲ庄倒シ、急遽ニ攘夷ノ命ヲ伝ヘ、大江(宅利)

慶親・定廣父子暴臣ノ狂言ニ欺レ、妄ニ征幕ノ説ヲ唱

ヘ、君臣一和ノ道ヲ失ヒ、宇内ノ紛乱ヲ促シ、終ニ八

月十八日ノ一挙ニ至リ、今ニ至ルマテ

勅命ノ真偽ヲ論スルカ如キ、実ニ是

朝憲ノ輕キニ依ル処ニシテ、嘆息痛恨スルニ余リアリ、

故ニ臣謹テオモヘラク、今春將軍上洛セハ、速ニ諸大

名ト共ニ

玉座ノ下ニ召レ、至誠ノ

諭言ヲ以テ諭告シ玉ヒ、是ニ重ヌルニ

宸翰ヲ以テ己ヲ罪スルノ 詔ヲ下シ玉ハ、衆心感佩

欣戴シテ、天下挽回ノ道ヲ開ク可キ歟、依之愚魯ヲ忘

レ忌諱ヲ避ケス、別幅一通謹テ

闕下ニ献シ奉ル、実ニ不遜僭越ノ罪誅ヲ免ル可ラスト

雖、是愚臣

陛下知遇ノ 特恩ニ報シ奉ルノ一端也、臣源久光不堪

恐懼戰慄之至、謹上表以聞待斧鉞之誅、時文久四年春

正月七日、

一六九 喜入攝津ヨリ在京小松帶刀へ報告

(蒸氣船燒亡ニ就テ)

一翰致啓上候、余寒之砌御座候得共、愈以御平常被為

揃愛出度奉存候、然ハ先日ヨリ追々申上越候通、製鉄

所御借受之蒸氣船一条ニ付、自燒場之事實且ハ長人之

心底致探索、依時宜テハ実丸打放シ候始末、彼是相探

リ以成行其表ヘモ可申上賦ニテ、園田彦左衛門去三日

差立置候得共、何分長藩之事故、如何様自暴申募リ候

儀共有之候得ハ、又シテ害ヲ生シ候媒ト存候ニ付、去ル

四日御手元ヨリ奈良原幸五郎(市来・土持馬關談判ノ後)被差出、園田ヘモ申

談旁致探索、兩人共一先致上京、何篇奉得 御差戻候

様為被 仰付儀ニ御座候、然処昨八日長州ヨリ書翰致

到來今便差上候、書意略、横目上井甚左衛門儀豊後表聞合トシテ被

差出候処、御舟焼失之儀承、早速小倉へ差越承合、直

二下ノ關へ渡海、彼地ニ於テ聞合之趣書附、(卷六) 龜絵図相

添差出申候、就テハ危忽(忽ハ急ノ語也)之次第悔悟之向相見得候間、

第一被安 尊慮候様、且御吟味之端ニモ可相成奉存、

今日極々急飛脚差立申候、小倉侯ヨリモ飛札到来、且

御手厚キ御取扱等為有之由、其上御船自燒之次第日記

迄モ持参差出申候、格別相替儀モ無之候、先ツ長人ノ心

底大概相分り、先ハ致安心候、且亦幸五郎へモ逢取、

直ニ申合賦候処、当人モ当日出立被仰付、少シ早御暇

致候由、殊ニ御式内ニテ御直達(御式内ト、年頭御式事ヲ云云)(御直達ト、太守公御親達ヲ云云)モ有之為差限同席ニテ、

トウ々得逢取不申残念候、乍然島津求馬ヨリ委曲為

申合由ニ候、何分御高評之程奉希候、尤御吟味之御治

定兩人へ御申合被下度奉存候、

一御内婚愈来月初旬之処、大奥向モ御受有之、当分御鈔

物等之儀、追々大奥ヨリ申出事ニ御座候、且又暁姫様(茂久夫人)

御住居御造添之儀モ、弥御節隠迄ニテ相濟申候、一昨

七日見分ニ差趣取究置申候、此上相替儀ハ有之間敷存

申候、御場所ハ 暁姫様御手水所ヨリ未之方御縁ツ、

キニ取究置申候、右之趣以御都合御申上置可被下候、

將又(佐土原藩番頭)能勢次郎左衛門・重野厚之丞ニモ去六日致着被仰

越候趣承届候、尤同便ヨリ御用封致披見、御書面之通

相心得申候、勿論重野方ヨリモ江府ニ於テ之成行承届

申候、拙者ニモ無異連勤仕申候間、乍慮外御放念被下

度、蒸氣船ノ一件ニ付テハ、諸書付取束表向差上申候

間、(表向ト、國老名義ヲ以テス)厚ト御披見被下度候、此段公私取交以乱毫如是御

座候、恐々敬白、

正月九日

喜入攝津

小松帯刀様

再展時分柄、折加久御自愛御座候様奉存候、爰元何モ

相替儀無之、且又仰出、昨日席々ニ於テ拜聞被仰付、

匆々可祝、

一七〇 汽船焼亡ノ顛末問答ノ概要 (市來日記参照)

長藩国老益田右衛門介等ハ使者ヲ鹿兒島ニ遣シ(正月)

連署ノ書ヲ以我國老ニ向テ謝スルニ、下ノ關ニ於テ暴

撃シタル汽船ハ、全ク外国船ト誤認シタルニアリト、

厚ク謝罪ノ書及ヒ使者演説ス、此時本藩ニハ汽船乘員

生存ノ輩走セ帰リ事情ヲ報告ス、予テ長藩ノ暴業一般

怨ル処ナルノミナラス、今回ノ挙動ハ実ニ忍フヘカ  
 サル事ナルカ故、問罪ノ師ヲ出サント勃々タル際ナル  
 カ故、使者府下ニ入トキハ、如何ナル挙動ニ及ハンモ  
 測ルヘカラス、因テ阿久根郷ニ止メ、其筋ノ者応接ニ  
 派出セリ(出水野間原ノ関門ニ来リシハ、正月十八九日頃ナ  
 リ、而シテ該郷ヨリ府下ニ報シ、阿久根郷ニ止ムヘキヲ命シ、  
 応接ニ及ヒタルハ廿三四日頃ナリ)、太守公此由聞召シ、容  
 易ニ聞キ届ケ玉フヘキ事由ニ非ラサレハ、否ヤノ答詞  
 ハナシ玉ハス、同所ニ留メ置キ、此由飛檄ヲ以テ 国  
 父公へ窺ハレケルニ、京師ニハ疾ク其顛末聞ヘケルニ  
 御怒一方ナラス、事ノ始末ヲ糺問シ、臨機問罪ノ兵ヲ  
 向ケラレン事ヲ

朝幕ニ申請セラレタリ、

此時京師在邸ノ輩ハ長藩ノ暴業ヲ忿瀆シ、速ニ問罪ノ  
 兵ヲ向ケラレン事ヲ請フコト甚タ切ナリ、各藩ニ於テ  
 モ同論洛中是カ為メ鼎沸セリ、茲ヲ以テ

(和泉守忠精カ)

朝議幕論頗ル困難、閣老水野日向守殿ヨリ演論ニ曰ク、  
 長州ノ挙動最モ粗暴ナル言ヲ待タルナリ、昨年来ノ  
(堺町御門等ノ事件ヲ云)  
 事件ニ就テ処分評議中ナルカ故、一藩力ヲ以テ問罪ノ  
 師ヲ動スハ、必ス先ツ猶予スヘシ、幕府ノ処分或ハ命

令ヲ待チ、敢テ動揺スルコト勿レトナリ、因テ暫時ク

処分命令ヲ俟ツノ藩論ニ決シタリ、是ヨリ嚮キ正月三

(頭註)「市来士持談判」(四郎旧名)

日市来正右衛門・中村吉左衛門ハ藝州廣島へ使節ノ命

(廿五日)

ヲ奉シ、旧臘十一月鹿兒島ヲ発シ、長崎ニ立寄(長崎ニ出  
 タルハ、大小砲購求・軍艦詠文ノ為ナリ、詳事ハ後ニ記ス)、而

シテ十二月晦日筑前太宰府駅ニ於テ、暴撃ノ為メ沈没

ノ乗員数十名死亡ノ確説ヲ聞キ、昼夜兼行(福岡ニ至リ

藩吏吉永源八郎ニ面接、実否ヲ問ヒ其実ヲ聞知セリ、吉永ハ市

来知己人ナレハナリ)小倉駅ニ至リ、同所在勤横目役土持

(吉船)

ト通稱ス、從來各所ニ派出ス

平八ニ会シ、尚詳ニ長藩ノ暴業ヲ聞キ、国名ニ関スル

重大ノ事ナルカ故、其顛末ヲ審問シ報告セサルヲ得ス

ト、市来ハ土持ヲ誘ヒ馬關ニ渡リ(此時迄ハ未タ長藩ニ

接シ顛末尋問セス、小倉・田ノ浦等ニ在テ道路ノ説探訪セシノ

ミナリキ)、長藩ノ兵營ニ至リ、砲撃ノ顛末ヲ詰問セン

ト議ス、此事早ク小倉藩吏漏聞シ(小倉駅本陣村上銀右衛

門ヨリ通知セシト云フ)、適々藩吏ヲシテ当時長州ノ暴

業実ニ甚シ、商人ノ如キ者モ馬關ニ入ルヲ得ス、若シ

入ルトキハ捕縛或ハ斬殺セラレシ者数多アリ、然ルニ

尊藩ヲ悪ムノ説殊ニ太甚シ、故ニ彼地ニ至テハ恐クハ

禍ニ罹ルヤ必セリ、必ス行クコト勿レト懇告ス、市来

等曰、同藩士許多沈没、加之一時借受ケノ船ナリト雖  
モ本藩ノ所有ニ異ナルコトナシ、実ニ国名ニ関スル一  
大事件ナルカ故、暴撃シタル因由詰問セサルヲ得ス、  
然ルヲ彼又暴ヲ為サハ、其曲一層スルヤ論ナシ、我輩  
傍觀シ通過スルコト能ハスト厚意ヲ謝シ、小舟ニ搭シ  
市來・土持二名從者三四名、鑄錢方用達柿本彦左衛門・酒  
匂十兵衛・池田武八郎及從者三人）ヲ具シテ、馬關ニ至リ  
シハ正月三日申ノ刻頃ナリキ、而シテ旅店（宿屋名問屋ニ浦屋露也）ニ就キ、店  
主ヲ以テ長藩本官ノ長官ニ面会ヲ乞フ、夜ニ及ンテモ  
回答ナシ、其間如何ノ思想ナリシニヤ、兵隊數十名銃  
槍ヲ携ヘ旅店ヲ囲ミ、尚探偵ニ等シキ者出入ス、亥下  
刻頃店主長官來レルヲ告ク、依テ招入レ応接ニ及フ、  
阿彌陀寺宿官ノ長官高杉晋作、所勞次官金子蔀・粟屋  
益太郎、外ニ附屬吏四名各着込ヲ着シ、槍ヲ提ケ來レ  
リ、又兵士三十名計リ銃槍ヲ携ヘ從ヘ來レリ、  
市來等金子・粟屋ニ向テ問答左ノ如シ、  
（通註 市來問答）  
一市來等曰ク、去ル廿四日本藩蒸氣船、浪花ヨリ長崎  
ニ立寄り、帰國ノ途航中当港へ碇泊セントセシニ、  
貴藩前田・壇ノ浦砲台ヨリ砲撃、遂ニ該船沈没、  
士官十余名、水夫等十余名溺死セリ、其顛末ハ案内

ノコトナルヘシ、就テハ嚮キニ攘夷ノ布令アリシト  
雖モ、今ヤ全国許多ノ蒸氣船・風帆船アリ、殊ニ当  
地ハ九州ノ咽喉トモ云フヘキ航路ナリ、必ス掲クル  
処ノ標旗ヲ認メ、而シテ彼我明認シ、夷船ナルトキ  
ハ砲撃スルモ否ラサルモ、叨リニ砲撃セラレタルハ  
如何ノ理由ナリヤ、詳ニ其顛末ヲ聞シ（以下答トハ長  
藩士カ答フル所ナリ、問トハ土持・市來カ謂所ナリ、粟屋ハ  
萩藩、金子ハ長府藩ナリト云フ）  
一粟屋曰（粟屋ハ上席、金子ハ次席ニ就ク）、貴説ノ如ク  
砲撃シタリ、其所以ハ攘夷布令以來、本・末藩共ニ  
勅意ニ対シ、夷船ノ帆影ト認ムルトキハ、直チニ掃  
攘ニ努メタリ、故ニ当日天候雲曇、標旗分明ナラス、  
全ク英・佛・米國等ノ船ト誤認シタル者ナリ、実ニ  
不注意ノ至、謝スルニ詞ナシ、  
一問曰、貴説ノ如クナル時ハ、雲霧ノ為標旗曖昧分明  
ナラサルヲ砲撃セラレタルハ、尤モ輕忽ノ名ハ免レ  
得ラレサル者ナラン、是レ軍法上ニ於テ、敵味方ノ  
明弁モナク、開戦ニ等シ、今ヤ全国諸侯外國形ノ船  
多シ、中ニモ幕府ハ數艘ヲ有セラレタリ、則チ此船  
モ幕府ノ船ニシテ、一時拝借シタル者ナリ、然ルニ

事ヲ雲霧ニ托シテ過ヲ蔽ハレントスルニ似タリ、又攘夷ノ

勅命循奉ノ事ハ、弊藩ニ於テモ不策ナカラ御同然ナリ、各藩ニ於テモ勿論ナルヘシ、至重ナル

勅命循守重大ノ攘夷ヲナス者カ、軍法正カラス命令明カナラサルハ、大ニ

勅意ニ背戾スト謂フヘキナリ、又幕府ノ船ト雖モ、其実ハ

朝廷ノ御物ナリ、諸侯ノ船ト雖モ咸同シ、人民モ又悉ナ同シ、仮令ヒ夷船ナルトキハ、帆影ヲ見テ直チ

二砲撃スヘキノ

勅令ナリヤ、我曹未タ拝承セサルナリ、若又其通ノ勅令アリタルニ於テハ、恐多クモ御互諫争セサルヲ得サルナリ、

一粟屋曰、素ヨリ其御布令拝承セス、貴説一々恐縮ニ堪ヘサルナリ、願クハ御宥恕アランコトヲ冀フ、

一問曰、失敬ナカラ粗暴輕忽ノ御所為ト認メタリ、然レトモ迂生等ハ当時主人実父三郎在京ニ付、上京ノ道次此事ヲ伝聞シ、親シク御尋問ニ及ヒ、而シテ上京具申センノミニ御面晤ヲ乞ヘリ、斯ル重大ノ事件

輕卒ニ御詫ヒノ御依頼ヲ受クヘキ職掌ニ非ラス、唯々事実ヲ上告スルニ止ル、御詫ノ筋ハ其道ヲ以テセラルヘシ、

一粟屋黙然タリ、

一金子曰、貴説尤モ然リ、必ス使者ヲ以テ御詫申スナルヘシ、其時ニ於テ御宥恕御聞届ケノ御取成ヲ冀フ、

一問曰、其御依頼ニ於テモ、迂生等ニ於テ決テ御受致シ難シ、如何ントナレハ、前述ノ如ク我曹ハ事実御

尋問ニ止ル、殊ニ乗組ノ者ハ上下皆弊藩ノ者ナリ、船ハ幕府ノモノナリ、又外國船ノ帆影ト見ルトキハ、

一往ノ応接ニモ及ハス、撃掃スヘシトノ

勅命・幕令モナキニ、妄リニ砲撃セラレタルハ大ニ違令ト謂フニ外ナシ、  
朝・幕ニ對セラレテ違令ノ罪重大ノ事ト存ス、

一粟屋曰、寔ニ然リ、

一問曰、以上演説ノ如クナルカ故、御詫ノ一事ハ御談話ヲ止メラレヨ、是ヨリ砲撃セラレタル顛末御尋問ニ及フヘシ、蒸氣船壇之浦砲台何丁計リノ所ニ來リシヲ砲撃セラレシヤ、

一粟屋曰、壇之浦砲台ヲ距ル事凡ソ十丁内外ノ所ト見

受タリ、

一問曰、砲撃セラレシハ壇之浦ノミナリヤ、

一粟屋曰、両所共ニ放發セリ、

一問曰、初メニ放發セシハ何レナリヤ、

一粟屋曰、壇之浦ナリ、

一問曰、大砲ノ種類ハ何々ナリヤ、

一粟屋曰、僕ハ壇之浦受持ノ内ニアリ、大ナルハ二十

四斤・十八斤・十斤・六斤・三斤各二門ヲ備ヘタリ、

一金子曰、僕ハ前田砲台受持ナリ、此所ハ大小十二門

ヲ備ヘタリ、二十四斤・二十斤・十二斤・六斤・三

斤ノ野戰砲、二十擲曰砲等ナリ、

一問曰、両所ヨリ幾十發セラレシヤ、

一粟屋曰、正カニ取覺ヘサレトモ、凡十四五發程放發

セシカト存ス、匆卒ノ事故悉シクハ相調ヘス、

一問曰、放發セラレシ彈丸ハ何々ナリヤ、

一粟屋曰、実丸ノミナリ、

一問曰、熔丸・焼玉・破裂丸ハ放發セラレサリシヤ、

一粟屋曰、実丸ノミニテ他ニハ放發ハ不致候、

一問曰、実丸ヲ以テ燒キ立ツヘキ訳ナシ、燒キ立タル

ヲ以テ見ルトキハ、焼玉・熔丸ノ類放發セラレタル

ニ相違ナシ、然レハ取調方ノ届カサルニハ非ラスヤ、

一答曰、取調ノ届カサルトノコトハ御尤ノ至リ、何レ

重テ取調モ可致ナレトモ、兎角此上ハ何レニモ御詫

ヒ御聞受ヲ願フニ外ナシ、

一問曰、其時蒸氣船ハ直ニ火光ヲ見ラレシヤ、

一粟屋曰、放發ヲ初メシ時蒸氣船ハ田之浦ノ方ニ引返

シタリ、故ニ丁數遠クナリシ故放發ヲ止メタリ、其

時迄ハ火光見ヘサリシト覺ヘタリ、

一問曰、聞ク処ニハ、蒸氣船田之浦ノ方ニ退キタルニ、

直チニ小舟數艘ヲ以テ追躡セラレシト、果シテ然リ

シナラン、

一粟屋曰、直チニ追ヒカケタルニハ非ラス、暫時ニシ

テ蒸氣船ニ火ノ手見ヘタルニ依リ、小舟ヲ以見届ニ

遣シタルナリ、

一問曰、見届ノ小舟蒸氣船ノ傍ニ到リシ時ハ、船ハ何

程燒キ立タリヤ、

一粟屋曰、某其所ハ委シグハ承ハラス、

一問曰、見届ノ為ナルニ於テハ、乗人數救助等ノ次第

モアルヘキニ、然ラサルヲ以テ見ルトキハ、追躡セ

ラレタルニ外ナシト存ス、



一粟屋曰、砲發ヲ初メシニ直ニ手向ヒモ致サス、青濱田之浦ノ方ニ退キシ故、果シテ日本船ナラント申シ合ヒ、夫故見届ニ出シタリ、

一問曰、日本船ナラント認メラレシ上ハ、乗人数救助等ノ尽力アルハ無論ノコトニ非ラスヤ、否ラサリシヲ以テ見ルトキハ、敵視追躡ノ証拠ナルニ非ラスヤ、

一粟屋曰、敵船ト認メタルハ初メニアリ、田之浦ノ方ニ退キタル時、日本船ナルヲ過テリト申合ヒタリ、

一問曰、聞ク処ニ拠レハ、見届ケノ小舟立帰リタル後両台場ニ於テ勝吐氣ヲ揚ケ、祝砲ヲ打ち、勝軍ノ式アリシト、此事門司辺又ハ大里辺ノ人々誰モ能ク知ル所ナリ、是レヲ以テ考フルトキハ、御弁述ノ趣前後艫ノ廉多シ、剩ヘ蒸氣船ノ脚舟或ハ綱具・旗類ヲ取り分捕セシト唱ヘ、或ハ其旗ハ薩州ノ紋章十文字付キタル者ニテ、其後二三日間ハ壇之浦台場ニ揚ケアリシト、又脚舟ハ今ニ同所海浜ニアリト、此等ノ事ヲ以テ見ルモ、全ク弊藩ヲ敵視セラレタルモノ、如シ、其敵視セラレタル因由ハ、何等ノ事ニ起因セリヤ、

一粟屋曰、如此キ一ハ全ク兵卒共ノ所為ニシテ、隊

長等ノ下知シタルニアラサルナリ、

一問曰、紋付ノ旗ハ其後如何ナサレシヤ、

一粟屋曰、是ハ城下ノ命ニ依テ焼捨ニ致シタリ、

一問曰、御城下ノ御命令ト云ヘハ、大膳大夫毛利慶親ノ御命令ナリシハ勿論ナリ、然レハ其命令ナサレタル御趣意承知致度、

一粟屋曰、大膳大夫様ノ御命令ニハアラス、藩庁ノ命令ナリ、

一問曰、藩庁ノ命令ハ則チ大膳大夫様ノ御命令ナルハ無論ナリ、其御説ハ些ト承知致シ兼ネタリ、

一粟屋曰、其辺ノ所且ツハ兵卒共誤認ニテ砲撃シタル始末ニテ、一々御答ニ苦ミ候、幾重ニモ恐縮ノ至ナリ、御面会ノ上ハ分テ御詫申上ヘシト、長官ヨリ厚ク申聞タル次第モアリ、御尋問ノ儀ハ御用捨相願フト云フ、

一問曰、御詫御取伝ハ迂生等ニ於テ一切御断リナルハ前キニ述タルカ如シ、唯其始末ヲ承リ因三元ヘ報知シ、是ヨリ上京、三郎ヘ委細申聞ルノミノ心得ナリ、其上ハ自然

朝・幕ノ御裁断ヲ冀フ事ナルヘシト存候、

一問曰、前キニ承リタル御詫ノ御使者ハ被差立シヤ、  
何日ニ被差立シヤ、

一粟屋曰、差立ノ都合中ニテ未タ出立ハ致サス、

一問曰、御答弁ノ趣相違ハ決シテアルマシ、御覽ノ如ク一々、筆記為致セシ故、是ヲ国元へ廻シ、又迂生等ハ上京届出ツヘシ(筆記ハ柿本彦左衛門・酒匂十兵衛・池田武八郎同席ニ於テ筆記ス)

一粟屋曰、決テ相違無之候、

一問曰、粟屋君ハ前田砲台副隊長ニテ、常職ハ何御役ナリヤ、

一粟屋曰、常式ハ番頭ナリ、

一問曰、金子君ハ、

一金子曰、僕ハ壇之浦副將ニテ、常職ハ長府家老席ノモノナリ、

一問曰、壇之浦砲台ノ長官名ハ何ト申スヤ、

一金子曰、前田・壇之浦其外近地官所ノ総督ハ高杉ナリ、砲台毎ニ皆副將ニテ守リ居候、

一問曰、軍法ハ和漢洋古今嚴確ノモノナルハ多言ニ及ハス、然ルニ雲霧ノ為メ旗章分明ナラス、殊ニ蒸氣船ノ方ヨリ砲發モ致サ、ルニ砲撃セラレタルハ、失

敬ナカラ軍法モ全ク無キニ似タリ、又攘夷ノ御布令

ニモ外国形ノ船ト見受タルトキハ、一往ノ応接ニモ及ス、見掛次第掃撃スヘシトノ御達シニテモアリシヤ、弊藩ニ於テハ未左様ノ御布令ハ拜承セサルナリ、

假令其通御布令アリタルニモセヨ、是ハ乍恐皇国ノ御不名ニ関スル次第ト存ス、尤攘夷ハ

皇国ニ於テ至テ重キ御事ナルカ故、万国ニ対シ暴業ト申ス事ニ至ラサル様有之度コト、存候、

一粟屋曰、如何ニモ御同然ノ事ニ候、帆影見受次第掃

攘スヘシトノ布令ハ、御同然未タ拜見シタルニ非ラス、此回ノ事ハ全ク兵卒共ノ不心得ニテ、失敬ノ働

ニ及候、兼テ御両敬ノ御好ヲ以テ、何分御宥恕不相願候テハ、不相濟次第ニ候、

一問曰、御演説之趣ヲ以考フルニ、兵卒ノ粗忽誤認ト

ノ趣ハ甚タ心得兼候、如何ントナレハ、当所出張ノ総裁ハ、高杉殿トノ由ハ兼テ伝聞ノ御方ナリ、然ルニ兵卒ノ誤認シテ放撃セシトノ趣ヲ以テ考レハ、惣督

ノ職掌ニ於テ不都合ト申スニ外ナシ、軍事ハ進退寛急、其他惣督ノ命令ニ仍ルハ論ナシ、然レハ全ク惣督ノ指麾ヲ俟タサルニ当ル、兵卒ニ罪ヲ帰セラレタ

(ル)

二者ニ似タリ、是レハ失敬ナカラ遁辞ト外ハ聞キ受ケ難シ、御面敬等ノ御好ヲ以テトノ御言ニ、斯ク遁辞ヲ用ラル、ハ、益御好ヲ破ルニ立到ルヘシ、又朝命ヲ奉シ攘夷ヲナスニハ御互ニ曲直ヲ明ニシ、醜夷ノ侮ヲ受ケス、千載史上ニ伝ハリテモ遺憾ナキヲ心掛度事ニ候、今ヤ開港ヲ允サレシヨリ横濱・長崎等来往モ繁キニ、帆影見受次第砲撃スルハ、暴ノ字恐クハ免レ難カラシ、

朝・幕ノ御趣意ハ決テ然ラサル者ト存ス、其辺ノ御心得振リ承知致度候、

一粟屋曰、如何ニモ一々御答ニ困候、兎角御詫ノ使者差立、御宥恕ヲ願フノ外無之候、

一問曰、焼亡セシ蒸氣船、先般当海通帆ノ時モ切リニ放發セラレシ際、乗頭宇宿彦右衛門上陸致シ、長官方ニ談判ニ及ヒ、其時爾來通航ノ節ハ、昼ハ国旗ヲ中柱及ヒ艦ニ掲ケ、夜間ハ紋付ノ大挑灯ヲ同所ニ揚クヘシト御約束シタリトノ趣ハ、国元へ届越シタリ、然ルニ今度宇宿其外士官皆同人ナルカ故、御約定ノ通り昼夜共ニ標ヲ掲ケアリシ趣ハ、乗組ノ内上陸致シタル者共ヨリ申立候、如斯御約定ニ及ヒタル末、

日モ未タ経サルニ妄リニ砲撃セラレタルハ、誤認トハ承知致シ難シ、遁辞ト云フニ外ナシ、

一粟屋曰、実ニ然リ、斯ク責問ヲ蒙ルニ於テハ答弁ノ道ナシ、今更是非ヲ弁スルハ、益々尊藩ノ御忿意ヲ重ヌルニ至ラン、願クハ夫々謝罪ノ道ヲ立テ可申、何分宜シク御取成ヲ願フ、

一答曰、御詫ヒノ事ハ先キニ相述候通りニテ、迂生等御取成ハ決テ及御断候、斯ク砲撃ナサレタル次第及御尋問ノミノ主意ニテ、及御面談訳ナリト答へ、尋問ヲ止メ程ナク其席ヲ去リ、別席ニ引取シ故、彼等モ程ナク立去リタリ、

右ノ如ク尋問シ、当夜明方馬關ヨリ乗舟、尙四日昼頃(村上銀右衛門)小倉旅店ニ帰リタリ、此時江戸ヨリ帰国肥後五左衛門・本田七郎同旅店ニ来着セシ故、談判ノ始末ヲ伝へ、昼夜兼行帰魔御届ニ及フヘク旨委託シ、或ハ市來等ヨリ書面ヲ以テ概況上申シタリ、土持ハ馬關及ヒ門司ノ間ニ在勤中ナルカ故、市來・中村二名ハ、同日晩影京都ニ向テ発航セリ(市來・中村ハ広島へ使節ヲ終リ、浪花へ鑄錢局銅地金買求ノ命ヲ奉シタリト雖モ、此ノ談判ノ次第非常ノ事ナルカ故、広島行ハ後ニセント議定シ、京師ニ向テ発航セリ)、

同月十一日大坂ニ着シケルニ、京師ヨリ尋問ノ為メ奈良原幸五郎・山口金之進（信秀）・伊藤次郎派遣セラレシニ会シ、談判ノ事実ヲ示シタリ、是ヲ以テ差向キ足レリトシ、四士ハ曳返シ市來ト俱ニ帰京セリ、同十二日着京、市來ハ小松帶刀・大久保市蔵ニ就テ談判ノ事実ヲ具上シタリ、此時邸中勃々トシテ、問罪ノ兵ヲ向ケラレン事ヲ請願シテ熄マス、其形勢甚タ熾ニシテ、此ノ曲ヲ以テ年来彼ノ姦謀詐術ヲ懲罰セント競ヒタリ、然ルニ幕府ヨリ処分アルヘキ旨ヲ以テ懇諭セラレタルニ依リ、漸クニシテ鎮定シ、処分ノ発令ヲ待チタリ、此時各藩ニ於テモ長藩ノ暴業ヲ憎ミ、前罪ヲ挙テ喋々問罪ノ師ヲ挙ケサルヲ得スト、朝・幕ノ命令遲緩ナルヲ忿罵スルコト甚シ、

### 一七一 折田要蔵建言

現米三万石

此度將軍上洛并ニ群侯御上京之儀ニ付、篤と熟案仕候処、京・攝之間近々米穀不足仕、自然高直ニ罷成可申儀ニ奉存候、仍之只今より御手を被附、大坂・伏見・京師之間ニ右之通三万石丈御貯被遊度奉存候、此米五

千人之兵糧ニ見賦り候得共、凡三ヶ年余は十分可有御座奉存候、尤當時余分之御金高二相及義は、近比恐入奉存候得共、御趣方ニよりては現金御払出シニ罷成不申哉ニ奉存候、

一右御米御取入之筋は、筑前・肥後・久留米之三ヶ国江御内談被仰入、当正月より二月迄之間御引結被遊度奉存候、但御返金之儀は、御領内より駒馬壹疋ニ付凡拾五兩ならしニて、肥後江壹千疋・筑前江壹千疋・久留米領江壹千疋都合三千疋御引渡し被遊度、左候得は此金四万五千兩と罷成可り申候、右米三万石代料江打合候得は、過不足は決て有御座間敷奉存候、其上方今九州路馬不足ニて諸国甚困窮仕居、殊更肥後領内ニては、追々地馬仕立之手配も有之哉ニ承り申候、右様困窮之場合ニ御座候間、万一も此策被相行候節は、後年決て御國産之妨と可罷成奉存候、仍之前条之通御取組被遊候は、地馬仕立之策も相止ミ、旁以て可然義ニ奉存候、以上、右は近比恐入奉存候得共、方今之形勢を以て熟察仕候処、本行奉申上候通当年夏分ニ罷成候は、米穀直段分外ニ相進ミ可申候、仍之当正月より二月初旬迄之間ニ御取組之上、御運送有之度儀ニ奉存候、此米三月ニ罷成

候は直段急度相進ミ、隨て高直ニ可罷成哉ニ奉存候、

尤右一件年内於京師内々献白仕置候得共、猶又近日中

御当地并ニ兵庫辺之時勢熟案仕申候処、実以て遅々仕

候時節ニ無御座哉ニ奉存候、殊ニ御当地之儀は、第一

御藏本ニて右様之御手配御引受ケ之儀ニ奉存、私共職

掌之任ニは無御候得共、存附之次第奉申上候、宜御勤

考之処偏ニ奉希上候、以上、

子正月九日

折田要藏(年秀)

木場傳内様(清生)

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

一七二 九州各所視察ノ事実報告書

九州各所視察ノ事実、左ノ如シ(上并甚左衛門)

三郎様より御直書を以、豊後辺浪人其外聞合方之儀被

仰進候由ニて、

御直トハ太守公喜入へ御直達ラ云フ

御直ニ拙者承知仕候付、大目付方江相達候処、横目上

并甚左衛門被差出、別紙之通聞合書差越候付則達

御聴、今日極々急便差廻候間、

三郎様達  
御聴候儀共何分ニも可被取計候、此段以御内用申越候、

以上、

正月十日

喜入攝津高久

小松帶刀殿清廉

右喜入攝津カ書面ニ添フ、上并カ探訪届書左ノ如シ、

私事去ル廿日出水より御届申上置候後中途差急、同廿

三日肥後路より豊後江差入、段々承合候上、一昨廿六

日同国鶴崎迄差越、猶又及聞合候処、当分浪人体之者

等、当表江入込居候儀曾て無之、至て静謐ニ付、委敷

此以前之儀共承合候処、左之通御座候、

一豊後日田御代官は、当分屋代増之助殿ニて候処、当八月

浪人共和州五條并丹州(丹八但ノ誤書ナラ)幾野御代官所江及乱妨候段、日

田江相聞得候付、増之助殿別て相驚、前文両所之御代

官所攻取候上は、頓て当所江寄掛候は案中之儀と恐怖

之折柄、同月下旬長州之藩士名前は不相分、諸国遊学

之者兩人、日田陣屋下町家江一宿ニて立去候儀有之、

兩人トも小手袖着ニて、銘々手槍携居異様之為体故、

増之助殿右は前件浪人一列之者と相疑、早速有馬中務

大輔様御方江加勢人数差出給候様頼入相成、則久留米

より人数上下五拾人計、日田江差越致警固居候処、同九

月御同人御上京ニ付、人数差支候趣を以加勢御断相成

（鑿明、熊本藩主）

候故、又々細川越中守様御方江同様頼入相成、直ニ熊本より為加勢小國・久住之郡代小國大六物頭兼帯ニテ、人数上下五拾人位召列、同月廿七日熊本出立、同月三日日田江差越候処、久留米之人数は則引取致帰国候由、然ニ同月中旬比浪人体之者一人日田江差越、御代官江直談いたし度旨願出候付、御代官随役之者より対談いたし候得共、密談ニテ子細は不相分候由、其御豊前彦山之山伏共浪人一味之聞得有之、小倉より十五拾人計都て浪人体ニやつし、一兩人ツ、彦山江差越、当分諸国一同浪人穿議敵敷、忍先無之候間、為致止宿呉候様衆徒を相欺、右五拾人計之人数不残一山之宿坊々々江入込、浪人荷担之実否相探候由、依之世上ニテは小倉之士共を実之浪人共と差心得、浪人多勢彦山江楯籠候段専取沙汰いたし候付、増之助殿益相驚、前件熊本より之加勢五拾人而已ニテは無心元候間、今一手加勢有之候様、又候熊本江申越相成、同十一月初比熊本より阿蘇之郡代一人名前不相分、人数上下五拾人内外引列日田江差越、前後之人数上下都合百余人ニテ警衛いたし、左候て御代官より右陣屋は素より、市中入口等江相凶之掛板等余多拵、手当及混雜候由ニ付、隣国

等ニテは既ニ浪人共押寄候様ニ申触候由、然ニ増之助殿事、当年迄四ヶ年位之御代官ニテ、同人支配地御年貢之儀は、是迄毎年冬春両度ニ陣屋江致上納来候処、昨年より改革ニテ、右御年貢冬中一緒ニ致上納候様申渡相成、去冬迄は発起之事ニテ、百姓共ニも無苦情其通為致上納由候得共、当年は凶作旁ニテ冬中之皆納別て難渋いたし、勿論御年貢ニ不限百姓共迷惑筋之儀共段々相屯候処より、日田支配拾三ヶ村之百姓共一統不致帰服、終ニ徒党を結び、当月六日比、右十三ヶ村之内七ヶ村之百姓共凡式百人計、何そ得物等携居候儀ニテは無之候得共、日田之内大原八幡之大社江相屯、御年貢上納等之儀古例ニ被返候様及強訴、外村之百姓共も追々寄集候体故、乱妨等是不致候得共、日田中別て及騒動、御代官よりも取押へ方等難出来候付、前条熊本より加勢之役人等より色々百姓共を宥め諭し、又は御代官江及意見、漸御年貢等本々之通申渡相成たる由候付、百姓共は無異儀三四日之内、悉く退散いたし無事ニ相治候由、右次第跡更之世評ニは、御代官ニは前以より百姓共不承知之儀共相察居候故、若強訴等取企候節、浪人等相加里候ては可及大事儀と相恐れ、実は百姓防之為、熊本

之加勢頼入相成たる儀と申触候由、右時宜にて最早平和相成たる由候得共、右熊本之加勢人数は于今日田滞留之由相聞得、且前条長藩之士兩人并御代官江直談願出候浪人体之者は、其後何方江罷通候も不相分、尤前文通彦山江入込居候小倉之士共二は、実否相分り候上、一山頭立候山伏共三拾六人召捕、小倉江列越候由相聞得申候、

一右通にて当所并佐賀之關辺は勿論、方々手を付承合候得共、当分熊本領は素より、(七頭トハ豊後國大小七藩ヲ云フ)当国七頭之御大名御領地何レモ浪人吟味嚴重行届、在、町とも不審之者は、早速領主江届申出事之由候付、前文之外浪人体之者、当国辺江見得来候儀曾て無之、至極静謐之由候付、当表江浪人相屯候との聞得は、前条小倉之士共浪人ニ紛れ、又は日田陣屋強訴等之儀を取々申触候形ニ相見得、外ニ世上異変之儀等承得候儀無之候、

右通御座候付、私事当所より豊前小倉江罷通、下之關詰唐物締(同役トハ土持平八)同役江引合、猶又彦山之一条等其外細々承合候上、引取方之儀は時宜次第可仕候間、此段申上候、以上、

豊後鶴崎

滞在横目

亥十二月廿八日

上井甚左衛門

御裁許掛勤

園田彦左衛門殿

(島津忠家氏所藏本にて校訂)

斯クノ如ク探訪ヲ出サレタルハ、日田ハ元来幕領ニテ、代官ナルモノ四五年又ハ七八年交替在勤スルカ故、制令弛緩人心不定、一揆蜂起等毎々アリ、從テ無頼ノ徒多ク浪士潜匿ノ巢窟ナルカ故、當時ノ形勢ニハ果シテ潜伏ノ者アラン、或本書ニ記シタル年貢期限ノ事ニ付テ、土人屯集ノ説隣近ニ伝播シ、其説張大ニ聞ヘタルカ故探訪ニ出サレタル者ナリ、

一七三 道嶋正亮紀事抄 (汽船焼亡事件長藩書翰)

一筆致啓上候、修理大夫様益御機嫌能被成御座奉恐悦候、然ハ去廿四日此御方御領内赤間關沖合へ、異国船一艘上筋ヨリ乗来候付、同所砲台ヨリ相図両度打揚候処、右船無沙汰ニ夜入抑テ砲台前へ乗来候付、急襲ト心得及砲撃候、彼地出張ノ者ヨリ遂注進候、然処取々ト風説ノ通無相違候ハ、甚以難御濟次第第二候、一人被差越可及御引合候処、不一方儀ニ付不取敢以飛札及御乞合候間、何分ノ趣早々御答被仰聞可被下候、

恐惶謹言、

正月七八日比

六戸備前(親甚)  
名乗判

益田右門助(右衛門介親施)

福原越後(元豐)

浦(元豐)  
根木上総(根来親祐)

國司信濃(親想)

清水伊太郎

一七四 全上ニ対シ返書

御札致拜見候、大膳大夫様益御機嫌能被成御座奉  
恐悅候、然ハ旧臘廿四日其領赤間關沖合へ、異国船一艘  
乗来候付、相刃打場ノ上被及砲撃候処、此御方御手船  
ノ由風説預御尋問趣致承知候、右ハ長崎製鉄所へ此御  
方御借受ノ蒸気船ニ候処、脱体古船ニテ及痛損為修覆  
如例日本旗章等相立、兵庫ヨリ長崎へ廻船ノ処、前々  
御掛合ノ通其御方御台場ヨリ砲発甚敷、前々懸念有之  
不得止事、小倉之様白野江村青濱沖へ乗場致碇泊居候

処、釜屋ノ内ヨリ火差起及焼失候様乗組ノ者ヨリ申越  
候、右ニ付テハ砲発等ノ形行異外ノ至ニ、一先事実分  
明ニ見聞等為致度、早速御役場ニハ被差出置候儀ニ御  
座候、依御尋問此段及御報候、已上、謹言、

正月

川上但馬

喜入攝津

島津大蔵

六戸備前様

其外略ス



元治元年 (1864)

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
元治元年一月ノ二

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」の記載あり  
(紙数四九枚)〕

## 目録

- 久光公登營ノ予達
- 久光公從四位下左近衛權少将推任叙宣下
- 久光公朝議參予任命
- 久光公中川宮其他ニ叙任ヲ謝ス
- 御參内御心得
- 正月十四日ヲ以テ小倉滞在園田彦左衛門届書
- 汽船砲撃ニ就キ幕府達書

- 御城下各砲台大操練
- 新鑄長砲実檢
- 小松帶刀家族へ書翰
- 高崎正風山階宮諸大夫格ニ被加
- 長藩ノ暴為説
- 御馬拝領御届書
- 英艦撃退ノ賞賜
- 全上
- 英艦撃退藩士賞金ヲ賜フ
- 久光公叙位ニ就キ公卿御廻訪
- 久光公ニ條城ニ於テ將軍家ノ懇遇ヲ受ケ玉フ
- 汽船焼亡ニ就キ前田孫右衛門照會書
- 京都ニ於ケル達書
- 市來正右衛門届書
- 久光公御登城予達布告
- 綿商法ニ就キ注意
- 大久保一蔵ヨリ小松帶刀へ書簡及ヒ困風
- 下ノ關ニ於テ長州人汽船砲撃ニ就テ布達
- 寺嶋宗則自記鈔
- 松平大膳大夫家來差出候書付

長藩ヨリ外国船砲撃否ヤ伺并御指令  
在京村山齊助書翰

一七五 久光公登營ノ予達

正月十三日

關老水野和泉守殿(志精、山形藩主)ヨリ重役御呼出、大久保一蔵通利出頭、  
左之通被達タリ、

松平修理大夫家来江

嶋津三郎

御上洛ニ付、二條御城 御参着相濟候ハ、登 城御  
祝儀可被申上候、尤日限之儀ハ追テ可相達候、

正月十三

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

一七六 久光公從四位下左近衛権少将推任叙宣下

正月十三日夜

伝奏野宮宰相中将功殿ヨリ留守居御呼出、内田仲之助出  
頭、左ノ 宣下ヲ蒙ラレタリ、

島津三郎

不容易御時節ニ付、  
朝議参予可有之被

仰出候、依之從四位下左近衛権少将推任叙被 宣下事、  
斯ノ如ク 宣命ヲ蒙ラレ、特ニ (島津忠承氏所藏本にて校訂)

朝議参予ハ、前代稀有ノ御名誉ナルハ言ヲ俟タス、關藩  
大ニ恭慶セリ、他藩ニ於テモ長藩ヲ除クノ外悉ク至当ノ  
宣命ニシテ、一昨年来非常ノ御尽力、

皇威復古ノ途ヲ開カレタルノミナラス、大政改革正邪黜  
陟今日ノ旺盛ヲ見ルモ、全ク 公ノ御勤勞ニ外ナシ、然  
ルニ 朝議ニ参与セラレサルトキハ、隔靴搔痒ノ感寡カ  
ラサリシ故、是ヨリ百事遺憾ナク寬急順序ヲ得、転倒錯  
雜ノ憂ナキヤ必セリト、一般怡悦セリト云フ、中川宮及  
ヒ近衛殿其他正論ノ堂上方ハ、一昨年来国父公へ御叙任  
ノ御内示数回ニ及ハレタリト雖モ、

公ノ御精神ハ功名利達毫モ意ニカケ玉ハス、只管

(島津忠承氏所藏本にて校訂) 照國公ノ御遺志継紹セラレ、尊王愛國ノ一二外ナキカ故、

固辞シ玉フコト屢ナリシカトモ、今ヤ天下ノ形勢日二月  
ニ切迫、稍分崩離折ノ形ヲ顯シ、内ニハ長藩浮浪ノ徒奸  
謀頻リニシテ、外ハ蕃夷ノ迫ルアリ、実ニ危急存亡ノ秋  
ニ当リ、身局外ニ在テ如何ニ竭力シ玉フト雖トモ、隔靴  
ノ嘆搔痒ノ憾尠カラス、殊ニ 將軍家上洛迅速ナランコ  
トモ勸告セラレシ故、不日着京ノ上ハ各藩戮力協心大議

ヲ開カレ、内外之措置確定セラレスンハ、遂ニ土崩瓦解  
救フニ道ナキニ陥ルト否ラサルトノ時機ニ臨メルカ故、  
止ムコトヲ得ラレス御内諭ニ応シ玉ヒシ者ナリ(此時將軍家  
籍京來ル十  
五日ニ過  
リタリ)

一七七 久光公朝議参予任命

(朱)  
「島津三郎」

徳大寺左大将御宅ニオヒテ、

不容易御時節付、朝議参予可有之被

仰出候、依之從四位下左近衛権少将推任叙被宣下候事、

文久四年子正月十三日

一七八 久光公中川宮其他ニ叙任ヲ謝ス

正月十四日

久光公ハ中川宮及ヒ関白殿・二條殿下・徳大寺殿・近

衛家等へ御参殿、御叙任及ヒ

朝議参与ノ大命拜謝セラレタリ、

一七九 久光御参内御心得非藏人ヨリ内達

参内之儀

一 島津之参内鶴之間着座、

一 伝奏出會、自分口上被申述伝奏退入言上之後、更ニ出

席ヲ告ケ可有 御对面之由、

一 出席之後伝奏鶴間出席誘引、小御所ニ於テ取合廊下北

方着座、

一 島津自分御礼貫主申次、御太刀・折紙持参置、下段於

廂被拜 龍顔、

一 島津於下段 天盃頂戴、

一 関白殿於麝香間被謁、

一 鶴間御礼申述退出、

武家掛非藏人

松室丹波

松尾備後

正月十四日  
日夜

一八〇 正月十四日ヲ以テ小倉滞在園田彦左衛門

届書 (汽船焼亡)

(原本に二十三行あり  
前文略ス)

蒸氣船之儀線綿六百本其外御用物積入、土

(本二外人名後ニ記ス)

官宇宿彦右衛門其外便人等都合六拾八人乗組ニテ、先

月廿二日兵庫より出帆長崎廻船、同廿四日夜五ツ時分

柱式本江御紋付燈燭式ツ、看板江大丸并弓張挑灯都合

拾式相燈、当所田之浦江碇船いたし候処、長州前田台場等より、最初空砲五六発打出、如何様号砲と、乗合中差心得居候処、無程実丸式拾四五発位も打放其内三ツ位御船前後江参り候へ共、何そ打当候儀は全無之、然共念遣之処より蒸氣を早目一里半位乘戻り、同所青濱沖江又候碇泊、無間も表之間飯焚釜屋下より煙相見得候付、則右釜屋打崩見候処、風呂之下タ敷之石より板江燃通、右綿江も火相付居、夫より船張諸所江燃広り、乗組中必死之働いたし候へ共、風烈にて弥火勢強く難消留、大原林左衛門〔朱〕〔船中全許方〕ニは御金百五拾両所持いたし、外二七八人一緒ニ橋船より上陸、追々近辺江繫居候、肥後并淡路嶋船橋船より都合四拾人助命いたし、右彦右衛門初都合式拾八人は溺死之形にて、岩元市之助・奥州之内田傳治死体迄流寄候旁之次第は勿論、其後市〔西郡旧名〕〔志〕〔金平太郎名〕來正右衛門并土持平八下之關江罷渡、通行掛之筋にて彼方役筋之者江面会〔編考〕応接ニおよび候形行は、其砌平八より御届申上、正右衛門ニも上京仕候付、委曲御聞取相候候通にて、其後之儀格別相替廉も無之候へ共、砲發翌日は異船打居及焼失候付、決して追々死体可流寄、其節は直様突流置候様申渡、然ニ其後ニ至り御国船之

由取沙汰有之候処、右通申渡相成居候へ共、以来は自然死体寄來候ハ、取始抹いたし、早速其届可申出、尤船焼失之儀、屹と雜說申触シ間敷旨申渡替候由〔此ノ船達心願然、且去ル三日御国船相違之有無、彼御方より御国許江御掛合之飛脚兩人三浦屋源藏方〔三浦屋ハ本藩定間屋ナリ、王持市來彼藩吏下談判モ於テ〕江立寄、御国道法等之儀相尋候節、大変之儀到來いたし不容易事にて、薩州様江参り候ハ、迎ても再罷帰儀は有之間敷杯相咄候由、其外役筋之者共ニも何様之御返答可有之哉、表向は一統心配仕候姿にて、然共國中向々にて、就中奇兵隊と唱浪士等集勢にて、至極不法之者共にて、砲發いたし候も其夜右之組合場詰前にて、畢竟右次第相及、兼て外組之者共とは不和にて、尚更不得心之者も有之、内乱可致到來儀共にては有之間敷哉との評判も有之候へ共、此御方様江何そ異儀到來仕向ニは承得不申、且御国許より此節之一条二付、三百人程追々田之浦江被差出模様之由、爰許は勿論長州表江取沙汰仕、夫故彼方より聞合差出候へ共、全無形も事にて、右は当所より彼地之儀共色々悪様ニ流言申立、夫故右通取沙汰も有之向ニ相聞得、実以其通之事にて、是迄当所〔言所トハ小倉ヲ云云〕とは段々混乱之訳も有之、

其段は御聞及通ニテ、何分大勢ニ無勢黙止居候折柄、此節体之儀到来仕候付、此御方様御勢を以取抑、聊なりとも恨を相暗度内心も有之向ニテ、彼是尚又念を入隠密聞合等仕候へ共、いまた突留候儀共分かね、精々探索仕候間、無油断相分り候上は、細々可申上候得共、其内一先是迄之形行御届申上候、以上、  
但

中村吉左衛門事御用有之、藝州表江被差越答ニテ、爰元江滞在仕居、彼表之儀長州トは国境之事故決て取沙汰も可有之、同人江委敷引合取馴候付、足輕  
彦人召付彼方江聞合差出置候間、是亦相分り可申  
廉も可有御座、且土持平八付足輕より申出趣も有  
之、其外是迄之形行伊東方次郎(一作江引合至候付、旧名)  
委細同人より御聞取可被下候、此段も申上候、

豊前小倉

滞在

正月十四日

園田彦左衛門

京都詰

御側役衆

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

此ノ如ク土持・市來ハ長藩吏ト論問ノ末、市來ハ中村ニ分レテ京都へ事実届出シカ為メ登リ、中村ハ藝州ニ向テ出張シ、防長ノ情事ヲ探訪セリ、此時長人ハ砲撃焼亡ノ事ヲ聞マシ、自焼ト唱ヘ流布セシメタリ、故ニ自焼ノ有無証左トスルニ由ナシ、然リト雖モ曩キニ約シタルカ如ク、昼夜標旗ヲ揚ケタルヲ、明弁セス砲発シタルハ背約ニ外ナシ、或ハ砲撃シタルニ於テハ、焼不焼ニ関セス違約ノ罪問ハサルヘカラス、茲ヲ以テ先ツ責問ノ為メ使節ヲ派遣セントセシニ、朝・幕反覆懇諭ノ筋至当ナルヲ以テ、姑ク命ニ從辺シタルモノナリ、

一八一 汽船砲撃ニ就キ幕府達書

文久四年正月十五日於京師御渡之由、山形藩ヨリ  
入手、

松平修理大夫江

過日其方家来共乗組居候軍艦江、長州ヨリ発砲ニ及ヒ候ニ付、使者差立詰問致度趣ニ候得共、右ハ追テ御所置可有之義ニ付、使者差立之儀ハ見合、輕挙之義等無之様、家来末々迄可被申付候事、

正月十五日

## 一八二 御城下各砲台大操練

正月十五日

本日御城下諸所砲台操練ヲ催サレ、太守公ハ辨天砲台ニ御出馬、例ノ如ク沖中ニ漂的ヲ浮へ、御城下十ヶ所及ヒ櫻島五ヶ所砲台同時ニ砲発ス、本日ハ昨年七月英艦ト戦闘ニ擬シタル催ニテ、殆ント百門ノ大煩一時ニ連発、爆発ノ響山海ヲ震動シ頗ル愉快ナリ、畢テ各所装置ノ砲数門、昨年戦争後特令セラレタル増置ノ巨砲モ稍整備シタルカ故、遠撃試験命セラレシニ、六十斤長煩ハ殊ニ遠距離ニ達シタリ、神瀬砲台築造モ大ニ其功ヲ顕シ、満潮面凡ソ五尺余モ埋築装置ノ砲モ逐次鑄成、或ハ去年十月中原猶介奉命、長崎ニ於テ魯人ニ謀リ買入レタル八十余門モ、不日廻送スヘシト云フ、

## 一八三 新鑄長砲実檢

正月十五日

御城下各所砲台遠撃試験催サレ、例ノ如ク沖中十五六丁ノ所ニ漂的ヲ浮へ、新製六十斤・三十斤・二十四斤長煩ヲ以テ試験ス(青銅製)

午ノ中刻過頃 太守公辨天砲台ニ御出馬アラセラレタリ、

本日ノ試験ハ悉ク的中、爆発ノ度モ頗ル宜シ、

## 一八四 参考 小松帶刀家族へ書翰

カヘスイ脱イトナサレ候ヨウゾンジ參候、此セツハ

上様ノ御事、其方ニテモヨク申上候ヨシ、此方ニテ

モヨホトヨク申上、御キ、中モ無事ノナク何トモ申

サズモ、マ、大キニ仕合ニ御座候、ホウイナト

イカ候哉、ヨロシク何カ又ノ便リニ遣シ申候、マ

ツハアラメデタクカシク、

文ニテ申入マイラセ候、マヅ折カラ、サハリナク

〜、サヘ〜シククラシノハツト、イカバカリト幾

久シク目出タクゾンジ參候、拙者ニモ大元氣ニ相動居

候マ、少シモ、アンシナサレマシク候、サテ

上様御事一昨ハンニ

朝廷へ御出遊シ候様、入口ニ付伝奏ヨリ御留守居御呼

出シニテ、從四位下左近衛權少將御官位ニ仰出、誠ニ

以恐悅御義、有カタク何トモ申上様モナク恐悅々々ニ

ゾンジ上參候、ミナ〜アリカタク、昨日ヨリ御ヤシ

キウチモニギくシク相成、皆々ヨロコハシキ顔ニ御座候、何モ筆ニハ尽シカネ参候、右ニ付昨日ハ早天ヨリ御使勤等ニテ、夜入間時〔ママ〕分罷帰候事ニ御座候、今日ハ公方様御着ニテ誠ニ賑々シキ事ニ御座候、マツく御着ニ相成候マ、モウハ何トモヨク相成候事トゾンジ参候、拙者ニモ

〔朝彦親王〕尹宮様御方へ御用スキニ罷上リ、御加相勤候様仰付ラレ、誠ニ以アリカタキ事ニ御座候、

御上洛ニハナリ、宮へモ相勤マスくイマモコレナク相成参候、サテココロハ元日ノモトヒ・サカナ代ト

モ遣サレ、別テくカタシケナク礼深くく申入マイラセ候、此節ハ何カ遣シ事候ゾンジ候へトモ、イソキ

居候マ、又々遣シ参候、有合ノクワシハ遣シ参候、昨日ハ東郷八郎御用ニテ罷下リ候マ、直左右モキ、ナ

サレ事候、シカシ、ヨシイナラハヤシキノ方ヨリ申越スニテ候半トゾンジ参候、コノ文ハ種子島正八郎今日

蒸気船ヨリ出立被仰付候マ、タノミ参候、マツハ申マテ折カラ、イトイナサレ事候クレくゾンジ参候、幾

久シク万年モトメデタクカシク、カキ取ヘイマタ御下リモ相分ラス候へトモ、三月迄

ニハ御下リトモニ相成候事カトゾンジ候、相分候ハ、早々申越候、

正月十五日 小マツ帯刀  
於近ドノ 無事  
人々

一八五 高崎正風山階宮諸大夫格ニ被加

高崎佐太郎〔朱〕「正風旧名」

此度御家来ニ被召加、諸大夫格ニ被 仰出候事、

子正月十五日

右之通被仰付、伊勢ト改名被仰付、御取次坊官山田大藏卿〔朱〕「(再夢紀事及高崎正風談話記参看)」

一八六 長藩ノ暴為説〔全上〕

子正月十六日方肥後五左衛門京師罷下候由、此者ノ晰

ニ、長崎ヨリ御小人目付様成モノ、蒸気船一件付長州へ差越候処、縛リ首ヲ伐リ候由被相囁候由、十七日承候事、

一八七 御馬拝領御届書

子正月十七日大広間帳

松平修理大夫殿使者

内田仲之助

修理大夫儀、昨年七月領内英夷渡来之節早速攘斥、家  
来共ニモ粉骨碎身格別尽力之由被

聞食、

歎感不斜、依之在国中之儀ニ候得共、厚以

思召御馬一疋・判金拾枚被致拜領、此段御届申上候、

別段

島津少将義、十七日参

内被致候処、被奉拜

龍顔

天盃頂戴、御鞍置馬被致拜領候、此段御届申上候、

正月十七日

一八八 英艦撃退ノ賞賜

正月十七日

少将様久光御参

内被遊候処、太守様左之通御承知被遊候、

薩摩少将茂久

昨年七月領内江英艦渡来之節、早速攘斥、不墜 神州

之威名、家来共粉骨碎身格別尽力之段被 聞召、

歎感不斜、依之上京不致在国中之儀ニ候得共、厚以

思召御馬一匹賜之候事、

一八九 全上

正月十七日

久光公御叙任御礼ノ為メ御参

内、未ノ刻頃二本松邸ヨリ近衛家へ御参殿、同邸ニテ

御衣冠、近衛家御先導、公卿御門ヨリ御参

内（昨文久二年八月九日参内ノ時、諸大夫ノ間縁頼ヨリ御昇殿鶴  
内ハ御居所御門ヨリ御参内ナリ）

之間ニ伺候セラレ、伝奏衆接待

天拝アルヘキ旨伝ラレ、而シテ小御所三ノ間南廂ニ於

テ

龍眼ヲ拝シ玉ヒ、進ンテ三ノ間ニ於テ 天盃御拝戴、

南廂ニ退カセ玉ヒシニ、野宮宰相定卿左ノ

勅書ヲ伝ラレタリ、

島津少将

昨年七月薩摩国鹿兒島へ英船渡来之節早速攘斥、不墜

神州之威名格別尽力之由被 聞召、



叡感不斜候、依之鞍置馬一匹賜之候事、

正月

一九〇 英艦擊退藩士賞金ヲ賜フ

正月十七日

此日御參 内、御太刀一腰・黄金五枚奉獻セラレタリ、

薩摩少将茂久

其方家来共昨年領内へ英夷渡来之節、粉骨碎身速攘斥  
候段

叙賞不斜、依之黄金拾枚賜之候事、

一九一 久光公叙位ニ就キ公卿御廻訪

正月十八日

久光公ハ中川宮及ヒ二條関白殿下・徳大寺殿等ニ御參  
殿、尋テ久世通熙卿・正親町大納言實徳卿・坊城大納  
言俊克卿・正親町三條大納言實愛卿・飛鳥井中納言雅  
典卿・柳原宰相光愛卿・廣幡大納言忠禮卿・野宮宰相  
中将定功卿・阿野左中将公誠朝臣等ヲモ訪ハレ、叙位  
推任ヲ謝セラレタリ、

一九二 久光公ニ條城ニ於テ將軍家懇遇ヲ受ケ玉

フ

正月十八日

閣老酒井雅樂頭殿ヨリ、明十九日 久光公ニ條城へ御  
登城アルヘキ旨、奉書ヲ以テ達セラレタリ、依テ十九日  
未ノ刻松平大蔵大輔春殿ノ館ヲ訪ハレ、而シテ前後ニ  
御登城、伊達伊豫守宗ト俱ニ殿上ノ間ニ御扣ヘアリシ  
ニ、御目附建部徳四郎次接待、大廊下ニ於テ一橋中納言  
殿及松平大和守殿總其他閣老等御面接後、御白書院  
ニ於テ 將軍家へ謁シラレ、而シテ特旨ヲ蒙ラレ、御  
膝辺ニ進ミ玉ヒシカハ、一昨年来国事御尽力一方ナラ  
ザリシ趣親シク御賞詞、畢テ酒饌ヲ賜ハリ、懇遇最モ  
鄭重ナリ(細述編ニ御菓子・御殿、  
物ヲ賜リ云々ト記ス)此時大蔵大輔殿・伊豫守殿  
モ同席ニアリ、而シテ 將軍家座ヲ下リ、自ラ銚子ヲ  
取り御盃ヲ賜ヒシノミナラス、食膳モ俱ニセラレ、畢  
リテ大廊下ニ退セ玉ヒ、雅樂頭殿ニ就テ出格ノ懇遇ヲ  
謝セラレ、御下城アラセラレタリ、

一九三 汽船焼亡ニ就キ前田孫右衛門照会書

一筆致啓違候、然ハ先便得御意候夷船砲擊一条、薩船ニハ相違無之様相聞候得共、弥取極メ難相成ニ付、彼方及乞合候得共、未タ返答相分不申候処、過日薩州君側所勤之人市來(正右衛門)何某馬關へ罷越、別紙之通申出候付、弥薩船ニ無相違段相分り候付、別紙御口上之趣ヲ以テ桂讓助御使者トシテ差越申候、就テハ

天朝・幕府へモ別紙之趣ヲ以テ御届相成申候、薩人別紙(送)之申分ニテハ、幕船ヲ借り

天朝之御用ニテ国本へ罷歸り候付、修理大夫一己ノ返答モ出来兼可申云々、随分狡猾ノ申分ニ御座候、先便ニハ薩州乞合有之候付、返答有之次第御届、尚使者等之儀モ可相運ト申進候処、弥薩船ニ相定候付、即今両条共御運ニ相成申候、猶御届モ彼方ト喰合不申テハ不可然候間、高崎杯御談合可然ト得御意候共、最早彼方ヨリ右様公然ト申出シ候上ハ、定テ彼方ヨリモ右之趣ヲ以テ御届可致、左候得ハ御談合ニハ及間敷ト存候、高崎御談合モ彼方ノ底意ヲ為探索ニ候得共、結句此方ヨリ彼是ト申掛候得ハ、却テ疑念ヲ生シ可申候ニ付、御地御都合次第ニテ必御談合ニハ及申間敷候、尚於御地モ御使者被差立候儀モ可有之歟、何分可得御意段先

便申進候得共、最早本国へ被差立候付、御地ニテノ御使者ニハ及ヒ不申候間、旁右様御承知可被成候御心得ニモ可相成ニ付、薩人申出之写シ、尚幕府へノ御届書之写、薩州へノ御口上、并桂讓助へ被仰合候写共差越申候間、御熟談可被成候、何モ御都合克御取謀可被成候、此段可得御意由御当役方ヨリ申付、如此ニ御座候、恐惶謹言、

正月十八日

前田其外

尚々桂小五郎上京被仰付候ニ付、委曲申含置候間、御聞取可被下候、爰許近状モ御承知可被成候、

宋戸・北條・乃美江

御面書之趣委曲致承知候、京師辺近況弥切齒之次第ニ御座候、然処來島総括之諸隊兎角暴発ノコト含居候由ニ相聞、甚掛念之義ニ御座候、方今天下ノ形勢自滅之体相頭候折柄、不待其機暴発之汚名ヲ取候ハ、甚以テ下策之極ニ御座候間、御大挙ト申儀ニ候へハ、兎モ角モ來島ノ一手ニテ大戦ヲ成シ遂候事ハ無覚束事ニ御座候、必ス名義不相立挙動ハ御押被成度、挙テ懇願之儀ニ御座候、猶來島へモ諫書差越申候、旁之趣私ヨリ及御答候様申事ニ付、不加連署候、恐惶謹言、

正月廿六日

前田孫右衛門様(利徳)

六戸左馬介(眞徳)

一九四 京都ニ於ケル達書

正月十九日

京都邸中ニ於テ達、左ノ如シ、

少将様(久光)御儀、此節御官位被為蒙、宣下候ニ付、一

昨十七日被遊、御参内候処、御別紙之通、太守様、少

将様、勅書被遊御頂戴、誠ニ以不容易御事候条、一統

謹テ可奉拜見候、

正月十九日

帯刀小松清廉

斯報鹿兒島へ、同月廿九日達、同日布達、

太守様、少将様御儀、御別紙之通御褒(御勅書前二記之)、勅被

為、蒙候ニ付、明後朔日御一門方大身分並諸士登城、

於席々御両殿様へ御祝儀可申上候、此旨早々可致通達

候、

正月廿九日

式部川上久美

但馬川上久運

一九五 市來正右衛門届書

正月廿日

土持佐平太・市來正右衛門(四郎旧名)下ノ關ニ於テ長州役

員へ論判之趣、於京師市來届書

私事藝州廣島ハ御交易一件ニ付、中村吉左衛(四郎脱)一同被差

越旨被仰付、十一月廿五日出立仕、長崎表へモ鑄錢方

銅地金御買入方之儀ニ付、立寄候様被仰付、同所へ十

二月廿三日迄滞留仕、同廿四日同所出立、小倉之様罷

通候処、晦日晚方太宰府ニテ御国蒸気船下ノ關ニ於テ

焼失、乗組人数モ余多死亡之風説有之候ニ付、問屋場

等へ実否承繕候得共、取止メ候趣ニモ無御座候間、一

ト先ツ為聞繕被召付候御用聞(上町年寄部本彦左衛門)一人、小倉之様

差立候処、木屋ノ瀬(北九州市)駅ヨリ実事相違無之段申越候間、早

速太宰府出立、小倉之様夜白罷通、小倉滞在唐物締横

目土持平八申談シ、下之關在番奉行粟屋益太郎・金子

蔭外二人へ面接及論談候、大略左之通御座候、

一粟屋申出候趣ハ、十二月廿四日昼七ツ時分、満珠島沖手(山口県下関市)

へ黒船一艘相見得候ニ付、兼テ手当之人數諸所へ出張、

壇ノ浦並前田ノ両台場大砲ニハ装薬致シ相待居候処、

夜入五ツ時分ニモ候半、前田台場ヨリ八九町十町内外

之所へ右船碇泊致候ニ付、直ニ彈擊致シ候処、無間モ

青濱の方へ相迎シ候、尤当夜ハ殊之外風烈ニテ、小舟等乗出シ候儀不相叶、夫故追撃之手当モ不相叶ト之趣ニ候、

一四ツ時分ニモ候半、火光青濱の方へ相見得候ニ付、黒船及破壊候トテ一同鯨声ヲ揚候由、

一其前十一月十五日同所通行之際、弊藩蒸気船へ砲発致候ニ付、乗頭宇宿彦右衛門上陸致及御談判、夜分ニハ灯笼ヲカ、ケ候筋、及御約束候儀有之候、此度碇泊之折ハ、灯笼ノ有無被見居候哉否ヤノ趣及尋問候処、風烈ニテ全ク見受不申旨申出候、

一金子申出ル趣ニ、バツテラ舟一艘青濱沖ニ流レ居候ヲ、廿七日朝物見ニ差出候モノ見当リ、前田台場之様引取リ置候ニ付、御引渡申度旨申出候間、其儀ハ追テ何トカ可及御談判、拙者共ニハ上京通行ニ候旨申置候、  
一私共申ス死亡之者死骸不相知候ニ付、若シ当近海へ漂流致シ候ハ、小倉滞在土持平八ト申者へ御通知可給旨モ申聞置候、

一放發之彈丸ハ、烙丸・焼丸之類ニ可有之旨尋問ニ及候処、実丸ノミ拾余發及放發候段申出候、

一右通ニテ全ク夷船打破候ト相心得罷在候処、五六日モ

相過キ巷説承ルニ、薩州之御船之様申触候ニ付、萩表ヨリ虚実為聞繕、使者御国元へ差立候都合中之処、只今実事承知驚入候段恐入申出候、

右ハ大概之趣ニテ、別紙問答書相添差上申候、以上、

正月廿日

市來正右衛門旧名

本文並問答書ハ小倉ヨリ肥後五左衛門へ相托シ、御届申上置候、尤土持平八ヨリモ自然御届申上候儀ト奉存候、

一九六 久光公御登城予達布告

三郎様御事、此節

公方様御上洛ニ付二條御城へ御着候ハ、御登城御祝儀可被仰上、御日限之儀ハ追テ御達可被成トノ段、御老中水野和泉守様ヨリ被仰渡候段御到来、依之御一門方島津久松圖書殿并諸大身分其外月次御札罷出候面々、明廿五日四ツ時登城、於席々御謁御祝儀可被申上候、已下略、

子正月廿四日

(朱) 但馬川上

一九七 綿商法ニ就キ注意

春寒去兼申候処、御起居愈御泰然恐悦奉存候、先達て上京之砌ハ乍毎御丁寧御礼申上候、此節之難有サニハ安眠も出来候様罷成、何共筆紙難尽奉存候、然ハ昨日綿積船塙之順通丸佐兵衛事いまた兵庫江罷在候処、中国海路評判承長崎行断申出候由、右之船頭咄ニ、堺廻船實徳丸此方わた七百本積入居候処、下の關刃ニ留船ニ相成候噂承候<sup>(志)(多平次)</sup>濱崎手先之者江申遣候由御座候、尤綿五千本・茶式千表ほど当分兵庫江困置候段も濱崎手先申出、唯今にてはとふも手相付不申候間、蒸氣船にては御遣可相成や、是逆も六返位ハ往來いたし不申候てハ、長崎江積届候儀不相叶、三嶋分わたも千本余御座候処、誠ニ笑止之事ニ御座候、御勤考可被成下候、且又此節之一件於当所色々悪評いたし、さつまニハ矢張長崎交易いたし、長州ニハ右様之事無之、いつれ長州之趣意宜由評判ニ御座候由、いつぞや御咄申上候通、春嶽公御不評判御成被遊とも、長崎交易ヲ第一<sup>(志)(軍吏)</sup>疵ニ申上候由御座候処、又此御方様ニ引掛り候も誠ニ残念千<sup>(志)(軍吏)</sup>万御座候、兎角世上の口ニ手ハかふせられ不申候間、もだし居候外無御座候、長州浪士とも乞食体ニやつれ居候由御座候間、ケ様な風聞をいたし、此御方様ヲけ

かし奉らむ為、わた積船焼方取企候儀とも可有之候、先日申上候桂讓助御国江罷下候儀も、虚実をうか、はむ為の間者にてハ無之哉とも被存申候、先日濱崎手代宗助と申もの、わた荷卸いたし居候所江、帯刀指一人参候間、若や長士にてハ無之哉トそんし、あなたニハ何方之御士ニ御座候哉ト尋申候処、拙者ハ長州江戸廻之御軍船上乗にて、当月二日国元出帆いたし候との返答ニ付、貴国ニハさつまの蒸氣船御打取被成候由誠ニ御座候や、答成ほと其通にて候、誠ニ氣味能キ事いたし候、当時日本国中之侍、長州ほとつよきハ無之、他国江踏出候てハ不弁利ニ付、国元ニ引請ケ軍いたす筈にて候、長州之殿様ハ御一言被仰出候ハ、とんと御かはり不被遊御方様にて、下々も別て腰がつよく、何国之国にてまける事ハ無之候、三拾万石有無之さかいゆへ、台場先江向ひしハたちまち打つふす用意にて候、此内ハ異人ト軍の筈之処、今ハ日本の軍と相成候なと、上乘位之人柄ニ御座候故、色々咄もいたし候由ニ御座候、御承達可被下候、右等之世評等表向申上候てハ、嫌疑故障筋も可有御座候間、宜様御取捨可被下候、先右申上度如此御座候、尚追々可申上候、恐惶謹

言、

正月廿五日

木場傳内

大久保一蔵様

参人々御中

例之乱毫御用捨可被下候、

(大久保利謀其所蔵本にて校訂)

一九八 大久保一蔵ヨリ小松帯刀へ書翰及ヒ国風

前文欠 甚以迷惑千万ニ御座候、此度ノ事ハ如何様疑惑  
ヲ受候テモ、実ニ無致方仕合御座候、実ハ一日モ足ヲ留  
候事モ甚安カラサル事御座候へ共、又爰元情実ニヲイ  
テ意ノ如クナラス、是レモ無致方事御座候、事新ラシク  
申モロカニ御座候へ共、一身ヲ (欠)ニ処スル誠ニく  
六ツカシキ者ニテ、此度ニテ悟道仕候、随意ニ出来候  
上山ニ入りテ、雲水ヲ友トシ天命ヲタノシミ候ハゞ、  
ゲニ安楽ナルヘシト乍残念思ヒ出候、  
世の中のはなをもしらてこゝろには

あらぬおもいの立にける哉

(宋)(何事乎知ルニ由ナシ)

御笑種ニ御覽ニ備候、吳々モ御帰国ノ上ニ二件ノ御連  
ハ、早々意外ノ御所置奉渴望候、密事云々ノ一条モ有  
之、何卒御国恥不相成候様御用意専一奉祈候、時下御

自護奉祈念候、尊答迄、匆々頓首、

正月廿六日

一蔵

小松閣下

追テ、御帰着ノ上ハ、桂公へ可然御伝詞被下度奉願  
候、

一九九 下ノ關ニ於テ長州人汽船砲撃ニ就テ布達

先達テ製鉄<sup>(長崎)</sup>所御借受之蒸氣船、下之關へ廻船之砌、長  
州台場ヨリ及砲発候ニ付、懸念候処ヨリ乘戻リ、小倉  
領内之内へ致碇泊候処、右船及焼失候一件ニ付、如何  
様之御処置相成候哉ト諸人致疑惑、物議モ有之候段被  
聞召通候、右一条ハ夜中之儀ニテ、全異国船之心得違  
及砲発候処、跡以御国船之由風聞承得、其通之事ニ候  
ヤト一往為尋聞、彼ノ方ヨリ以飛札掛合有之、此御方  
御船無別条段返答相成候処、於彼方モ別テ後悔イタシ  
候段、以御使者御挨拶有之向ニ相聞得候、尤事情為聞  
糺、早々小倉辺迄御役々ヲモ被差出、京都へモ形行被  
仰上置候付、追々委細相分候上ハ、京都へ御相談被仰  
上、於京都 三郎様御賢慮之趣モ被為在、公武へモ  
御届被仰上、厚御評議之上、道理明白之以御趣意、彼

方へ御掛合之賦候間、人々其通相心得、聊動揺イタスマシク候、此段向々へ可申渡旨

御沙汰被為在候事、

右ノ通御沙汰被為在、ヲノツカラ夫々道理明白之御処置可被為在事候条、一統其旨ヲ奉承知、聊動揺イタスマシク候、此旨向々へモ可致通達候、

正月廿七日

大蔵・摂津・但馬

## 二〇〇 参考 寺嶋宗則自記鈔

元治元年甲子

(裕、三田藩主)  
正月江戸ニ来リ川本幸民・中原猶介等ニ会シ、方今隱

伏ノ情ヲ陳へ、再ヒ四方寺村ニ帰ル、吉田市右衛門ノ

家ニ在テ閑散ナスコトナシ、読書ニ倦ムトキハ、其主

人或ハ其男ト囲棋闕ヲ遣ル、七月肥後七左衛門ノ報ニ

云フ、藩命アリ、帰藩スヘシト、同月廿七日江戸白金

曾ノ家ニ帰ル、翌日金杉ノ一樓松本屋ニテ薩藩家老岩

下佐次右衛門ニ会ス、今ノ名ハ岩下方平ニシテ、元老

院議官ナリ、初ハ未タ公然帰藩ノ状ナキヲ以テ藩人ヲ

訪ハス、藩人モ亦来ラス、然レトモ爾後漸ク往来セリ、

右ノ岩下及留守居新納加等屢々訪来レリ、又福澤諭吉・

箕作秋坪(冠)ニ訪ハル、二年前共ニ欧行シ、帰朝後未タ一面セサルノ旧友ニ逢フ、其歎想フヘシ、冬白金ナル曾

ノ家ヲ橋本某ニ売却シ、高輪薩邸ノ官舎ニ転ス、或時

薩邸ノ留守居新納加ナル者余ヲ見ント云フ、至リ面ス

レハ新納云フ、長崎ニ於テ命スヘキ藩用アリ、急ニ下

崎スヘシト、十二月八日無僕ニテ輕轎ニ駕シ、江戸ヲ

発シ、東海道ヨリ大坂ニ至リ船ニテ小倉ニ上リ、翌年

正月四日長崎ニ着シ、五代才助ヲ見其藩用ヲ問ヘハ、

薩ノ生徒英国ニ至ントス、五代ト共ニ同行スヘシトナ

リ、然レトモ之カ為ニ一船ヲ雇ハント欲シテ、其船未

タ長崎ニ来ラス、一旅亭ニ寓シテ之ヲ待テリ、

## 二〇一 松平大膳大夫家来差出候書付

(汽船砲撃ニ就テ)

(井上正真、老中、浜松藩主)  
河内守

旧臘廿四日、長門国豊浦郡府中沖合へ、異船一艘上筋ヨ

リ乘来候付、赤間關砲台ニテ相闘兩度打揚候処、右船

無沙汰ニテ夜ニ入押テ砲台前面へ乗込候付、急襲ト心

得及砲撃候段ハ、最前御届仕候次第ニ御座候、然処右

船同所乗出候以後、豊前路沖合へ碇泊中失火、乗組之

者及揚陸、且松平修理大夫様御船ト申様之風説モ有之候付、早速以飛札及問合候内、修理大夫様御家来市來正右衛門・土持平八兩人同所へ罷越、弥修理大夫様御借用船之儀承知仕候、不計之儀ニ付使者ヲ以及挨拶置候、此段御届申上候様大膳大夫ヨリ申付越候、依之申上候、以上、

松平大膳大夫内

正月廿九日

遠藤太市郎

二〇二 長藩ヨリ外国船砲撃否ヤ伺并御指令

大膳大夫領内長門国於赤間關、外夷ト戦鬪之次第ハ連々申上候通御座候処、当春ハ外夷共同所へ襲来可仕旨之新聞紙モ流布仕候ニ付、同所出張之家来へモ、手当向一入嚴重相心得候様申付置候間、異国形之船同所通行候ハ、是迄之振合ヲ以テ前広通達可有之候得共、猶又為念一応遠沖へ碇泊イタシ、出張之家来へ及応接候上ハ、船印見定不相成候ニ付繫船、翌日通行致候様御沙汰被仰付被下候様仕度奉存候、此段奉願候様国元ヨリ申付越候、已上、

正月廿九日

松平大膳大夫内

乃美織江

右書面ニ対シ二月三日ノ御付札、

願之趣ハ難被及御沙汰候、仮令異国船タリト雖モ從是不致砲発、無差支通行可為致候（據夷ノ布令アリシヨリ、夷船ノ帆影ヲ見ルヤ、直チニ砲撃スルハ稍布令セラレタルガ如シ、既ニ癸亥ノ夏馬関ニ於テ初テ砲撃ノ後、勅使下向先魁タルヲ賞セラレタリ、然リ而シテ、茲ニ至リテ無差支通航可為致トノ令タルヤ、前令ニ反シタル知ルヘキナリ）

右御指令ニ就テ、重テ左之願書ヲ呈ス、

別紙之趣御付札ヲ以テ被仰聞候、然処大膳大夫於領内數度異艦及掃攘候次第ハ、連々申上候通  
叡慮ヲ賜ヒ、監察使ヲモ御下向ニ相成候程之參リ懸リニモ有之事ニ御座候、殊ニ去十一月、大膳大夫領海へ外国船通行不致様（外国船通行不致様云々、業ヨリ為シ得ヘカラザルノコトタルヤ、三歳ノ童モ知ルトコロタリ、然ルヲ斯ク記シタルハ、謂フ処ト内心ノ異ナル、論ヲ俟タザルナリ）、御告諭振共ハ不為被在間敷哉ト申上置候得共、未何タル御答モ不被 仰出内、此度御付札之通被 仰聞候テハ、大膳大夫ニ於モ太甚以当惑仕、



家来末々迄惑ヲ生シ、触達シ様モ無之罷在候、況シテ去月十日期限ト被 仰出モ御座候へ共、癸丑以來攘夷之

叡慮今更被為變候儀可有之トハ、努々不奉考候 (叡慮ノ變シタルヲ駭シタルモノニシテ、曩キニ矯 勅ノ非ヲ反顧セザルノ意顯然タリ) ニ付、領内關口(関口ト馬関ヲ云)へ乘込候異国形之船碇泊之上、連シ無之節ハ難見定儀ニ付、最前之通相心得可及砲發候 (謾然前ノ矯 勅ニ復セントスル文言ニ外ナシ) 間、願之趣被 聞召分被及 御沙汰被下度、再応奉願候様從国許申付越候、此段申上候、以上、

二月

松平大膳大夫内

乃美織衛

二〇三 在京村山齊助書簡

(宛名詳ナラスト雖モ小松大久保両氏へ乎)

歳首芳翰忽飛来、倍御清適被成御超歳之由大慶不過之奉賀候、小夫無異加齡仕候間、乍慮外御放意可被為在候、当時紛擾之形勢愚見之処一々左ニ申上候、一橋公ハ深志遠大之器也、然共兵權ナキ故ニ水人原一

(忠政)  
之進・梅澤孫次郎等カ如キ謀士ヲ以テ大事ヲ謀ントス、原ハ当時無双ノ智謀第一ノ士也、然ルニ橋公(本「孫智ノ名アリ」)ノ方寸、衰微ノ幕府ヲ押潰シ、自ラ天下ノ兵權ヲ執ラントスルノ意アリ、幕吏又是ヲ伺知故ニ嫉ム事モ甚タシ、動モスレハ京師総督ノ任ヲ解キ、関東へ引下ントスルノ機アレトモ、

朝廷ヲ憚リ止ム事ヲ得ス因偷セリ、橋公又此気味ヲ知ル、原・梅澤等カ如キモ禍ノ身ニ及ハン事ヲ恐れ、故ニ爰ニ於テ大挙ニ及ントスルノ意アリ、

一尾州老公此節長征総督ノ処置因偷ニ過キタリトノ事、朝・幕共ニ此嫌疑アリ、是ハ第一薩論ヲ其俛ニ採用アリシ故ト云、然トモ薩論ハ正論也、間然スル処ナキカ、元ハ會津其外ノ諸藩、薩ヲ忌ム心ヨリ大ニ離間説ヲ行シ也、爰ニ於テ尾州一人大ニ窮迫、名古屋ニ帰城モ不相成、出京モ不相成、直様関東下向ノ命下レリ、然処朝廷ニ周旋セシト見へ、御召有之、先日上京、然ル処ニ尾州大納言(是ハ中ノ隠居ナリ)・竹腰兵部少輔等カ如キ姦物ヲ引出シ、幕府ノ俗吏ニ結ヒ専ラ国政ヲ変革シ、前大納言殿ヲ再ヒ幽閉セントス、老公於此進退殆ト窮ル、一橋公ト共ニ策ヲ決シ、長征三十六藩ノ大諸侯ヲ朝命ヲ以京

師ニ会シ、錦ノ旗ヲ東方ニ向ケテ、姦吏ヲ除キ大ニ勢  
焰ヲ張ルノ企アリ、會津ハモト々補幕也、爰ヲ以テ  
大ニ憂慮シ、万一個様ノ時宜ニ及候時ハ、幕威ハ一朝  
ニ消滅センコトヲ恐レ、肥後守急々關東へ下向シテ、  
大樹公上洛ヲ勸メ、而シテ姦吏ヲ除ントス、二月七日  
頃發足ノ筈ニ候処、關老松平伯耆守・阿部豊後守上京  
之旨相聞へ趣意不相分、夫故ニ暫時延引、未タ今日迄  
ハ發足不相分候得共、何レ不日ニ下向ノ筈也、然ルニ  
會津モ亦朝廷ノ御都合能ク、橋公ト和親ナルカ故、幕  
吏ヨリ之ヲ嫉ミ、守護職ノ任ヲ免セントス、右ノ氣味  
ナレハ、万一会津此度下向セハ、再上京ハ出来間敷、  
將軍上洛ハ思ヒモ寄ンコト也、會津ノ愚可笑々々、一  
橋ハ又會津ヲ出シ抜キ、其跡ニテ三十六藩呼登セ、大  
事ヲ揚ントスルナルベシ、是ニ上京スル諸侯ハ馬鹿也、  
ケ様ノ氣味合故、天下ノ事如何共手ヲ附様モ無之、傍  
觀シテ機會ヲ待ツ計也、此節兩關老出京ノ事ハ未タ趣  
意慥ニ不承候へ共、兵庫開港且長州処置ニケ条ナルベ  
シ、此方ノ存念ヨリハ長州処置モ余程ニ苛酷ニ出ルベ  
シト相見得、郡目附等モ兩三人出京ナレハ、地面受取  
ノ為ナルベシ、

一水浪ハ尽ク加・越・彦・若等ノ藩へ預リ、越前敦賀ノ  
津へ土蔵ヲ明サセ入置候処、先日田沼玄蕃頭參リ相  
重立候者耕雲齋已下參拾余人ヲ斬首セシ由也、残りノ  
者共モ多クハ誅セラルベシ、蔵ヲ破リ脱走セシ者モ有  
之風説ニ候得共、是ハ虚実不分明ナリ、総テ朝廷、幕  
府共因循姑息ノミ、又官吏ハ尽ク私家ヲ利スルノ念ナ  
リ、一日逃レニ姑息ヲ行フノ外ニ出ズ、旧侯ト共ニ猜  
忌ヲ懷キ、偏執嫉妬狐疑逡巡ノミ、一所モ天下ヲ挽回ス  
ベキ処ハ存シモ寄ラス、我藩ト雖トモ多年ノ尽力ニ疲  
弊ヲ極メ、今更大挙シテ天下ノ弱ヲ扱フ備ナカルベシ、  
先々富国之外當時策ナシトスベシ、於此処自己ノ寸力  
ニ任セ周旋奔走スルハ、策ノ極メテ拙ナルモノナリ、  
穴賢、

〔朱〕  
〔本書月日不明〕

村山才助

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
元治元年二月ノ一

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数五九枚)の記載あり〕

## 目録

- 久光公御推任叙
- 久光公大隅守御改名布告
- 全上
- 道島正亮紀事鈔
- 本藩汽船馬關ニ於テ砲撃セラレタルヲ詰問使ヲ派遣セン  
トス
- 長州人濱崎カ綿積船ヲ焼ク
- 兵庫在勤海軍教授頭取勝安房守万国公法奉呈ノ書讀
- 益満休之助柴山良助ニ送ル書翰
- 大坂留守居交迭ニ就テノ書翰
- 久光公御官位宣下少将様ト称フヘク達書
- 久光公推任叙布告
- 久光公推任叙届書
- 久光公御鞍置御馬拝領御届書
- 久光公御参内御馬御拝領
- 久光公初テ二條城ヘ御登宮
- 久光公特旨鯉魚数尾拝戴
- 諸郷私領ノ者勤方云々達書
- 長州征討達書
- 小倉在勤土持平八探訪届書
- 幕議内聞
- 越土宇及ヒ久光公連署建言
- 大坂留守居木場傳内ヨリ大久保一蔵ヘ書翰
- 久光公御官位宣下布告
- 徹夜ノ朝議
- 御城下数ヶ所砲台操練
- 久光公御用部屋通達書

元治元年(1864)

久光公参内心得

久光公御建言

久光公御在京中在邸人員へ諭達

四侯尹宮へ推参

長州征討達書

二〇四 久光公御推任叙

二月朔日伝奏坊城大納言後殿ヨリ御達、久光公少将

兼大隅守タルヘキ旨

勅宣ヲ蒙ラレタリ、

二〇五 久光公大隅守御改名布告

少将様御儀 大隅守様ト御兼任被為蒙

宣下候ニ付、大字并同唱之文字可致遠慮候、

右通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ相達、諸郷・

私領へモ可申渡候、

二月

(島津久徳)  
大蔵

二〇六 全上

一去ル朔日、於京都伝奏坊城大納言様ヲ以、

少将様儀 大隅守ト御兼任被為蒙

宣下、同三日巳ノ刻

宣旨・口宣案被遊 御頂戴候段御到来候、此旨可奉承

知候、

右通表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ可申渡候、

二月

大蔵

二〇七 参考 道嶋正亮紀事鈔

一平運丸

右於長崎買入相成候蒸氣船右通被仰付候、

一小蝶丸

右外車蒸氣船右通被仰付候、

右通ニ唱候様二日攝津ヨリ通達、

一長崎製鉄所御借受之蒸氣船下之關廻船之砌、長州台場

ヨリ及砲発候付、掛念之処ヨリ乘戻、小倉領内ニ致碇

泊候処、右船焼失候一件ニ付、公武へモ御届被仰上、

厚御評議之上道理明白之以 御趣意、彼方へ御掛合之

賦候間、人々其通相心得、聊動揺不致様 御沙汰被為

在候段、先達テ申渡通ニ候、然処於京都御老中水野和

泉守様ヨリ使者差立詰問致度趣候得共、右ハ追々御処

精、山形藩主

置可有之儀ニ付、使者差立候儀ハ見合、輕挙之儀等無  
之様トノ趣ハ別紙之通被仰渡候付、一統其旨ヲ奉承知、  
聊輕挙之儀共有之間敷候、此旨向々へ不洩様可致通達  
候、

二月 大藏・摂津・  
但馬

文言余リ行届時ハ、却テ過不及ノ差誤アリテ間然ス  
ル所モアランカ、道理明白被相糾候ハ、反テ嫌疑  
ヲ受ルノ儀モアルヘシ、深ク可考、

二〇八 本藩汽船馬關ニ於テ砲撃セラレタルヲ詰  
問使ヲ派遣セントス

二月初メ、本藩ハ旧臘馬關ニ於テ汽船燒燼セラレタル  
事由責問ノ為メ、使節ヲ長州ニ遣サントス、幕府百方  
之ヲ慰諭シ、

朝・幕ニ於テ処分スル所アルヘシ、姑ク忍耐シ 命令  
ノ下ルヲ俟ツヘキ旨ヲ以テス、然ルニ藩庁ニ於テ頗ル  
困難ナルハ、藩内一般長藩ノ暴挙ヲ忿リ、或ハ去ル壬  
戌以來權謀詐術ヲ以テ種々ノ妨碍ヲナシ、或ハ離間讒  
誣甚シニ至レルヲ数へ、天下ノ兵ニ頼ラス一藩力ヲ以  
テ屠滅シ、禍源ヲ絶ント奮慨勃興セリ、之ヲ鎮靜セン

トスルニハ外国老等甚タ困ミタリ云々、

二〇九 長州人濱崎カ綿積船ヲ燒ク

二月初、鹿兒島下町商賈濱崎多平次ナル者所有ノ船、  
大坂ヨリ帰国ノ途次、長崎ニ寄航セント防州別府港ニ  
碇泊セシニ、同時警衛兵数名刀槍ヲ携へ乗入り、船頭  
大谷仲之進ヲ捕縛シ、木綿許多搭載セシヲ外国貿易ノ  
為ナラント認メ、大谷ナルモノ及ヒ水主二名ヲ斬殺シ、  
船ハ燒燼シタリ、此船凡千石積位ニシテ、濱崎カ自己  
商用ノ船ナリ、当時外国人日本産ノ草綿ヲ買フコト多  
ク、從テ高直(大坂時每百斤四五兩内外ナルヲ凡七八兩内外ニ販売スト)、茲ヲ以テ商賈爭  
テ売買セリ、濱崎ナルモノモ大坂ニ於テ数万斤ヲ購求  
シ、長崎ニ廻漕セントス、然ルニ長州ニハ、薩州ガ外  
人ト綿商法ナスト誤聞シ、彼ハ諸浪士ヲ馬關其他各港  
(長防二國各港ヲ云フ)ニ屯集シ、攘夷或ハ本藩ヲ敵視スル際ナルガ  
故、斯ノ如ク暴業ヲナシタル者ナリ、後其暴業者ノ巨  
魁永井精一郎・山本誠一郎ノ二名ハ、大坂東本願寺門  
前ニ大谷ナル者ノ首ヲ梟シ、斬殺シタル始末ヲ揭示シ、  
屠腹シ死シタリ(永井・山本ノ私意ニ出タル所為ナリトテ、  
未)、彼ノ藩庁ヨリ謹責セラレ、遂ニ脱走シテ後大坂ニ出テタリト

云)、因ミニ記ス、当時日本産ノ綿花高価ナルハ、英・佛二国ニ輸出多キニ由レリ、斯ク輸出ノ多キ所以ハ亜米利幹南北戦争ニ依リ、南方ハ棉花ヲ産シ英・佛二国ニ輸送スルモノナリシカ、戦争中産出ナク、故ニ英・佛二国ノ紡績産業ノ輩日本・支那ノ産ヲ仰ケリ、茲ヲ以テ忽チ騰貴シ、従来之価格ニ倍騰シ、大坂其他ノ綿商巨利ヲ得タリト云フ、

## 二二〇 兵庫在勤海軍教授頭取勝安房守万国公法奉呈ノ書牘

万国公法一部

右ハ勝安房守殿ヨリ御両殿様・御近習迄差上呉候様、

別紙ノ通被申越候ニ付差上候間、御披露旁可然様御取計可被成候、此旨申越候、以上、

(慶応二年九)  
二月六日

小松帯刀

(長崎)  
菱田傳兵衛殿

猶々帰国ノ衆書生故、乱包等高張ニテハ迷惑ト存候間、唯ニ古具包、御国元御廻ノ節御近習へ被命、宜敷御包直奉希候、再白、

万国公法官版出来ニ付、可差出ト存候処、幸今日出来、

帰国ノ兩人鳥度立寄候間、相頼御廻申上候、最早御覽後トハ存候得共、点附誰モ見易ク相成候間、ワサト御廻申上候、尤一部ハ御国許 太守様方御近習迄入 御覽度、此法能々不解候テハ世界ノ通法無覺束、又彼方心情モ粗被察候儀ト奉存候、一部ハ貴君へ呈上仕候、御閑暇ノ折御一助ト奉存候、取急匆々不備、

(慶応二年九)  
正月廿二日

安房守

帯刀様

万国公法ノ翻訳ハ日本ニ於テ之ヲ嚆矢トス、原本ハ佛国ニ於テ(アメリカ人宣教師上海で漢訳)出版シタルモノナリ、勝氏カ担当シテ訳述セシメタルハ、当時攘鎖ノ説驚々タルノ時ニ方リ、知彼弁己ノ大要ナルヲ以テナリシト云フ、

## 二二一 益満休之助柴山良助ニ送ル書翰

尚々御家内様へモ宜敷被仰上被下度奉願上候、

貴札忝拜見仕候、弥以御勇可被成御座、珍重之御義奉存候、随テ私無異相勤罷在申候間、乍憚御休意思召可被下候、然ハ年内ハ無申迄モ、年頭ノ御祝義等モ不申上、不本意千万、何卒御用捨可被成下候、於爰許モ

將軍ヲ初、市橋其外大名方追々御上京相成申候、

少将様モ毎日程ノ御登城御座候、未天下ノ事ハ何ノ筋ト御決定相成不申候由、当分ハ諸大名ノ御周旋最中ト奉伺候、御屋敷ヘモ毎日程御大名御出無之日ハ無御座候、此節尹宮様御同様御取立相成候、山階宮様余程御高名ニ申上候、且又大島氏ノ一条ニ付福山清蔵トノ出立被致、最早着ヲノツカラ御取合モ御座候筈、右大島氏ノ事ニ付テハ御同慶此事ニ御座候、此ノ一サツハ最早御覽ニ相成候カト奉存候得共、差上ケ申候、追々珍重ハ可申上、御地ノ事モ御洩シ被下度奉願上候、先右御礼旁為可申上如此御座候、恐惶謹言、

二月八日

益満休之助

柴山良助様

参人々御中

追テ、愚筆御推覧可被下候、

二二二 大坂留守居交迭ニ就テノ書翰

一筆啓上仕候、御分袂後愈以御清福被遊御座、恐悅御儀奉存候、私ニも無異相勤申候間、乍憚御放念可被下候、此節藤田廣左衛門江大坂御留守居被仰付、私江交代御内沙汰承知之由伝言申来、定て蒸氣船等より近々

出坂之筈ト仕舞方仕事ニ御座候、とふそ此帰船便より交代相成候ヘハ、別て仕合高し低し相待候事、唯込入たるものハみにて、朝夕なかれ申候ニハつゝ、き不申、別紙差上申候間御落手可被成下候、先日一寸申達之御伝言之趣も申聞候処、ひつくり仰天うれしかり難有かり申候、別紙之まゝ御礼申上候て可有御座候、今日急便通行、折悪しく先達御借入金御請申出候振廻として外勤仕候間、用事迄申上候、御金も拾万両当四月迄御請申上候、頼談中ニ交代相知れ不申、御都合之事御座候、いつれ御上坂奉待上候、恐惶謹言、

二月九日

木場傳内

大久保一蔵様

参人々御中 (大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二二三 久光公御官位宣下少将様ト称フヘク達書

一三郎様御儀此節御官位被為蒙宣下候ニ付テハ、以来 少将ト奉称候様被仰出候条御到来、此旨表方ヘ致通達、御勝手方・諸郷・私領ヘ可被申渡、

二月九日

大蔵「島津」

二四 久光公推任叙布告

少将様御儀、御別紙別紙前ニ記  
スカ如シ之通、御官位被為蒙

宣下候段申来候、依之明後朔日御一門方・大身分並諸  
士登城、於席々 御兩殿様へ御祝儀被申上、兼テ大興  
へ御祝儀申上来候面々ハ、同様可被申上候、

右通申渡諸郷・私領へモ早々可申渡候、

二月

式部川上久美

但馬川上久運

二五 久光公推任叙届書

文久四年二月十日牧野(田舎系、老中、長岡藩主)備前守様江被差出之、

島津三郎儀、先月十三日伝奏野宮宰相中将様ヲ以、不  
容易御時節ニ付 朝議参予可有之被 仰出候、依之從  
四位下左近衛権少将推任叙被 宣下候段、別紙写之通  
蒙 勅許候、右之趣可申上旨申越候、此段申上候、以  
上、

松平修理大夫内

二月十日

新納嘉藤二(卷)「立夫旧名」

別紙

不容易御時節ニ付、 朝議参予可有之被 仰出候、  
依之從四位下左近衛権少将推任叙被 宣下事、

二六 久光公御鞍置御馬拜領御届書

島津三郎儀参 内仕候様、伝 奏野宮宰相中将様ヨリ  
被仰達候付、先月十七日参 内、拜 龍顔天盃頂戴  
仕、其節昨年七月鹿兒島江英夷渡来之節早速攘斥、  
神州之 御威名不墜、格別尽力之由被 聞食 歡感  
不斜、依之 御鞍置御馬一疋、

勅書ヲ以拜領被 仰付、修理大夫儀モ同断ニ付、未  
上京不仕在国之儀ニ候得共、厚恩召ヲ以裸背御馬一  
疋三郎名代ニテ拜領被 仰付、且又右同断之節、修  
理大夫家中之儀粉骨碎身早速攘除 歡賞不斜、依之  
判金拾枚 天賜之旨、伝 奏右宰相中将様御演達ニ  
テ、是又三郎名代ヲ以頂戴仕候、右之趣可申上申越  
候、此段申上候、以上、

松平修理大夫内

二月十日

新納嘉藤二

二七 久光公御参内御馬御拜領



少將様御事、先月十七日 御参内被遊候様、伝奏衆野  
宮宰相中将様ヨリ被 仰達候ニ付、御太刀一腰・黄金  
五枚前以被遊 御進献、当日四ツ半時御供揃ニテ、  
近衛様へ 御参殿、御同所ニテ御衣冠御召替、 公家  
御門ヨリ御入、諸大夫ノ間御縁類ヨリ 御参内、鶴之  
間へ御扣被遊候処、伝奏衆ヨリ

御対面之儀 御承知被為在、被為拜

龍頭 天盃御頂戴、左候テ昨年英夷渡来之節早速攘討、

神州之御威光ヲ不被為墮、格別御尽力之由被

聞召 叡慮不斜、依之鞍置之御馬壹疋被遊 御拝領、

太守様ニモ御在国之御事ニ候へ共、右御同様被仰付、

裸背御馬壹疋御拝領被仰出候段、伝奏野宮宰相様ヨリ

御演達ニテ、

勅書御頂戴、是又同断之節御家中粉骨碎身イタシ候儀

ニ付、判金拾枚

天賜之旨伝奏、右同人様ヨリ御演達ニテ

勅書御頂戴、右相濟麝香之間江

関白様御出席御謁、夫ヨリ虎之間於御縁類御馬ニ疋御

拝領御引渡、其節両伝奏衆御出席御頂戴被為濟御礼被

仰上、御同日ハ御参予ニ付、右御用被為濟御退出掛

近衛様へ御参殿、翌十八日 関白様其外様へ、夫々御  
礼御廻勤被遊候段御到来候、依之明後十三日  
勅書拜見濟之上、御祝儀以下略ス、

二月十一日 攝津

二八 久光公初テ二條城へ御登宮

少將様御儀、先月十九日京都二條御城へ被遊御登城候  
様、御老中酒井雅楽頭様ヨリ御達被成候付、四ツ時御  
供揃ニテ松平春嶽様へ御立寄、同所ヨリ伊達伊豫守様  
御同道ニテ御登城、殿上之間御扣所へ御着座、於 御  
書院一橋様・松平大和守様・御老中様御話ニテ  
御目見、御膝元へ被召、去年以来万端御尽力等之義不  
一方、御懇之被為蒙 上意 御着座、御菓子・御吸物  
等御頂キ又々 御膝元へ被召、 御手自 御盃御酌ニ  
テ御頂戴、右被為濟於同所御膳迄御頂戴、御表江御引ノ  
上、於大廊下酒井雅楽頭様江御逢御礼被仰上、夫ヨリ  
被遊御帰殿候旨御到来候、依之御一門方島津圖書殿并  
諸大身分其外已下略ス、御祝儀被仰付候事、

二月十一日

大藏・摂津「喜入」  
但馬



紀井中納言殿茂承

副總督

松平肥後守保容

閣老ニテ差副

有馬遠江守純道

須賀松平阿波守裕

池田松平相摸守德慶

松平出羽守安定

細川越中守順慶

淺野松平安藝守長茂

池田松平備前守政茂

小笠原大膳大夫幹忠

阿部主計頭守方正

脇坂淡路守安雙

右之通被仰出候間、諸事受差図尽力可致事、

二月十二

右留守居内田仲之助ニ條城ニ於テ承知候、御名代其他各藩同文各通ヲ以テ達セラレタリト云フ、

二三二 小倉在勤土持平八探訪届書(綿積船焼亡)

防州別府浦ニおひて綿積船焼捨、才領人致殺害候風説等有之、先達て右為聞、合別府最寄室積江、罷渡承合申候

処、外ニも三艘同様之(破損)之動始抹有之形ニ横(破損)

諸浦江流込、乍然突留証拠も無之、事実分明不致候付、

是非実地ニ踏入存分致探索(虫食不分)静旁相伺

候処、諸浦殊ニ浪士共出張、就中、士分之者他所より

致上陸候ば、則見疑(見ハ嫌フ)を掛、是迄段々麁暴之致拳

動候儀共多々有之、然折柄そ忽ニ手を付候ば、故障付

廉も可有之哉致猶予一旦曳取、此表諸国船問屋或は商

船共江相計、段々品を替手を尽承合候処、防州別府加

徳丸船頭松右衛門御雇入相成、綿千百本兵庫ニおひて

積入、久見崎船頭大谷仲之進(内市)久見崎船手付(内市)上乘ニて長崎江

致廻船賦ニて、去十二月廿八日(亥)兵庫より致出帆、

先月(正)十二日別府江致入碇、刻限旁不相分候得共、同

夜何方者共不相分浪士共、五六人列ニて、鉄棒携本船

江乗付、直様船之看板江揚、最初船頭松右衛門召呼、

才領人ハ罷居候哉、名相尋、寝入候段相答、用事有之

是等江可参旨申聞、其通仲之進儀不計も看板江出張た

る処、其節之申分何様いたし候哉不相分候得共、兩三

人ニて鉄棒を以無体ニ散々致打擲、苦痛之声相立候、

物音ニ驚船中共俄ニ騒立候場合、一兩人看板より下り、水主共は可助置候付、銘々自物等取卸候様申聞候得共、仰天之余取ものも不取得逃去、海面江飛入游渡候者も有之、致分散、然間右仲之進首搔落、在合之箱江相包持卸、死体海中江突流し、且又船頭松右衛門召搦、一通之致折檻叱放、左候て碇綱等難払、釜屋之燃木取出し積荷之綿江致差火焼払、然折同所浦人共船出火と見受、段々駈付候者も有之たる形ニ候得共、右浪人共異暴之任業致恐怖、夫形見捨置候半、外ニ其場立障候者も無之、然処無間も浪士共早船江乗移同夜致出帆、其後行方不相分、右之形行大庄屋より役筋江遂披露候処、人相書を以段々評議有之、右浪士共語音旁聞合相成所之者共より申出候は、萩家中并肥後、又は上方風之言葉も有之、諸国より之取集者共ニては無之哉、不審相掛候との風説等有之、併一体暴論ニ募候因柄ニて、前件人相書等を以所僉儀有之とは、諸国響合之為申触候欵も難計、右等之次第弥其筋実正共難見請様御座候、一繰綿六百七拾五本積入、防州大島郡小松之住吉丸船主船頭平治上乘、岩元仁之助、右同千弍百八拾弍本、同所小松之神寶丸船主船頭久吉上乘、川添清六、同千弍

本割昆布四拾俵、同所小松之蛭子丸船主船頭市郎兵衛上乘渡辺惣太郎、右三艘通三船皆候時銘々致上乘、兵庫より本行積入長崎江廻船掛、先月何日頃欵共不相分候得共、在所大島郡小松江致汐繫、前条別府加徳丸松右衛門船異外之難ニ逢ひ候儀共承得、態と差扣致滞船候哉、又は船留ニても相成候哉、旁之次第は不相分候得共、小松宰番寄藩ハ在より右形行山口城下役筋江同越相成候処、藩中伊東正九郎・小田源五左衛門・林何某と欵申者三人、右三艘江銘々一人ツ、為警固乗付、下之關迄送越、出帆見届、其形行山口江可申出旨役筋より申渡候由ニて、小松より何日出帆共不相分候得共、先月廿九日下之關を同所福浦江致碇泊、去三日右三艘俱無異儀出帆、いたし候段承得、猶又付役中村喜寛を下之關伊崎付船之、防州小松之問屋坂次郎方江差遣直ニ承合候処、右為警固乗越候伊東正九郎外式人事、右船々出帆遣ニ見届置、直様陸路より山口之様致通行候由、然は福浦迄送越候趣意、何様候欵は又申承合候処、前段別府ニおひて異変致到来候折柄之事故、万々一此末重て右体之儀共有之候ては、不相濟訳柄と段々評議有之、旁懸念之処より右三人乘廻相成、左候て右始抹ニ付て

は、役々共別て及心配候段、三人之間より内々坂次郎江相洩候由ニ付、猶又外々内密承合候処、前条不相替承得申候、

一右付、先達て室積ニて承得候ニは、加徳丸之松右衛門船、外ニも同様焼捨候風説等有之、右は如何様其砌大島郡小松江致汐繫候節、一旦宰番より山口江何越差置候哉、夫を加徳丸同様之取扱相成候哉ニ、申触たる事共候半、全無形事ニは無之候得共、虚説と相見得申候、然は災難ニ逢ひ候は、加徳丸松右衛門船ニて、右は此内之風説通弥別条無御座候、外船々は無難之形ニ相見得、勿論肥後之鶴住丸船頭文吉・防州大島小松之政榮丸船頭金兵衛両船は、如何様右別府之変事承及候欵、洋中より乗戻上坂いたし、且又堺之寶徳丸船頭源介・同所金榮丸船頭元蔵両船は、大坂より長崎江致直乗、去ル三日下之關致通船候形ニ相見得候付ては、大坂積入元井長崎表之届先等双方承合候処、去十二月廿日以來都合拾壹艘御雇入相成、右之内別府之加徳丸松右衛門船壹艘横暴ニ逢ひ候迄ニて、外船々無難乗抜、又は乗返し候船も有之、然処大坂住吉丸船頭源次郎、并防州大島郡小松之住一丸船頭清蔵両艘は、中途江滯船候

欵、疾長崎江致着岸候哉、いまた何れ之筋相分不申候付、猶又手を付置申候間、相分次第追々何分可申上候、此段申上候、以上、

子二月十二日

(編等)  
土持平八

大久保一蔵殿

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

此探訪説ニヨレバ長藩庁ノ令シタルニ非ラズ、全ク浪士等ノ所為ナルヤ明カナリ、

### 二三 幕議内聞

三三ノ一

閣老初メ内評ニ、島津少将初メ隠居之諸侯周旋之意甚タ訝敷、却ツテ御一和之妨ケト可相成杯申立候品有之候処、此度

公方様二條御入城之砌、諸役人 御前へ被為召、一橋

中納言殿御言上之大意、

此度 御上洛之御趣意ハ、幕威ヲ張候義第一二候、併徒ニ

上御安座ニ付テハ、御威光モ更張致間敷、既ニ長州一件ニ付テハ、御親征被遊候程之御気力無之テハ、威勢相振不申候、且當時在京諸侯之内、異図有之哉ト疑念之向モ有之欵ニ相聞候へトモ、島津少将初メ深意

吐露及承候処、中々以テ可疑之姿無之候間、向後ハ別  
テ御親敷御取扱、右等疑念之卑見無之、御威勢相張候  
儀、且又此度

御上洛中万事御基本相立可申ニ付テハ、御東帰御差急  
有之間敷様致度事之旨申上ル、

公方様被為聞召、只今中納言演舌之趣至極尤之儀ニ付、  
銘々右様相心得候様トノ御事、右ニ付宮中之御評議モ  
一新ニ相成候、一統決心御答出来候由、

但右翌日島津少将御召ニテ御接待有之候ヨシ、

二二三ノ二  
二月十一日於二條白書院

将軍様御出座、姫路候ヨリ極密御達、今度有馬遠江守  
長州へ詰問之為下行、返答次第ニテハ

紀伊殿大將軍、會津副將、因・備其外九侯之兵ヲ率ヒ  
征討之段被相達、右ハ諸藩へ不洩様トノ

御沙汰之ヨシ、

二三四 越土字及ヒ久光公連署建言(十一日)

当今不容易御時節ニ付、私共上京仕候様再三之

勅命ヲ奉承知、恐懼至極奉存候、上京之上猶又御当地

之形勢四方ノ情態觀察仕候処、誠以重大之御場合ト奉  
存候付、聊愚存之趣奉言上候、抑 皇国内外御危急之  
時節ニ当リ、万民ノ困苦ヲ忍ハセ給ハス、辱モ未曾有  
之御英断ヲ以去年以来大政御変更、官武一度ニ御事業  
御施行、誠ニ成就之時ニ至候処、当節之成行兼已ニ八  
月十八日一變ノコトキ深被為惱  
宸襟事共、小臣等悲痛流涕之至、必竟臣子之罪不可遁  
儀ニ御座候、乍恐

朝廷ニモ御旧弊被為在御事御座候、願クハ以来奉始  
至尊、左輔・右弼ノ公卿急度天下之形勢人情事變 御  
洞察、永世不朽之御基本相立候様、遠大之御見識相居  
リ、聊之儀ニ御動転不被為在候処、專用之儀ト奉存候、  
朝令夕改令輕出候儀ハ、自古衰世之習ニ御座候、此機  
会ニ 皇国挽回之道被為在候様、急度御大志御屹立被  
為在候上ナラテハ、如何様之良法奇策御採用相成候テ  
モ全其詮有之間敷、本立道生之明訓能々 御看察被  
在度奉存候、右ハ乍恐

朝廷ノ御範軸相居候儀大急務ト奉存候、未御用之命モ  
不承知候得共、大事之御時節默念罷在候テハ本志ニ無  
之、愚存之趣言上仕候、御処置次第緩急ニ付テハ、愚

昧ノ存意ハ難申上候間、列藩上京之上、正議御採用御大策被為立度事ト奉存候、誠惶々々頓首敬白、

二二五 大坂留守居木場傳内ヨリ大久保一蔵へ

書翰

本長州生れ当所長せい寺之和尚咄ニ、長州当分凡下僧俗ニ至る迄、朝より昼迄武術修行被仰渡、出家等ハ昼後より法檀ニも登り候事ニて、常住衣之下より着込着用いたし、衣之下は金鑷様之えり相見得居候由、尤女も都て長刀稽古いたし候由、出家は髪を立金剛組と唱へ、穢多は町人格ニ被仰付、武術修行ニて専軍之用意無他事由御座候、  
一 土佐より人数千人ほと長州江来り、内三人土州江罷帰候と之事、

一 大砲千式百挺ほと御座候由、  
一 増田<sup>(益)</sup>彈正權柄甚鋪、長州三拾六万石我心次第と我慢いたし候由、夫故人氣至て不揃、此節之困難引出候も專増田仕事故、若も軍起り候ハ、弾正を血祭ニシテ討死可致と申輩も御座候由、  
一 若殿様御付家老名は能不分鞆負とか申人、別て温潤之

家老ニて増田より色々申掛候得共頓着不致、だんまりニ御座候故、増田も少しハ憚り居候由御座候、

但武鑑見合申候処、浦鞆負と申名前御座候由、右ハ兵庫辺江も出居候者ニて、軍学ニハ余程相達候樽之者ニ御座候、

一 増田事八月十八日京都一変之節、大仏江引取候中途より無僕ニて、只一人引返シ何方へか潜居、其後兵庫より一人三田尻船江乗り国元江帰り、着船場より家来下人拾人計借入帰家いたし候由、跡越之儀ニハ御座候得共、是等之働唯者ニハ無之、油断難成儀ニ御座候、  
一 右長せい之寺咄、

一 当地日本橋南詰升やと申所江浪人罷居由承付、聞合いたし候処、張紙之通御座候由、

<sup>(貼紙)</sup>

水戸家中

正月八日

佐々木艦之丞

当年廿五六才

正月七日

田中善之助

同 二十才程

同日

横川 帯刀

同 三十才程

正月八日

工藤留次郎

西横堀花岡二

同 三十才程

両三人程

先日

倉田 八郎

坂町玉世二

同 十九才程

一人

同

石ヶ谷武彦

一平野町弓屋之弓矢、長州より都て買上ケ之由承り、致

同 廿五六才

聞合候処、二男家徳山より弓式拾張・矢五百本買入候

外ニ供老人

由、乍然弓は八張相渡シ、残りハ当分細工いたし居候

ノ 七人

由御座候、

冬年より

齊田 新助

一伏見長州屋鋪江三百人ほと罷居由風聞御座候、

当年三十才程

一長州金借入方之儀最早相濟候由御座候、尤三万両丈ほ

同

梅原登之助

と買入候由承申候、長州にて老朱銀・老歩銀致偽作、

同 廿八九才

右にて買入候風説も御座候へ共、右様過分之贋銀兩替

同

今泉與一太郎

屋共氣不相付儀も有之間敷奉存候、

同 廿六七才

一長州にて奇兵隊と唱候内、右を三組に分ケ、奇之一組

同

小嶋新七郎

ハ京・攝、兵之一組ハ兵庫より、中国路隊ハ国許ニ罷

同 廿八才程

居、内外応援之手筈いたし居候付、京・攝之儀急速ニ

此間京都より

山中森之助

国元江知れ候由承り申候、

同 三十才程

一先日申上候江戸がみたくはト申唱歌ハ、元來岩國と申

ノ 五人

違にて、岩國よりからがみたくハ長州ニおぢやれ、や

外ニ

かて長州空<sup>カラ</sup>になると申候を、長州より江戸かみたくバ



と作り替候由御座候、何分國中混乱之儀ハ無疑御座候得共、増田等詐術あなどりにくき事ニ御座候、いつれ軍ニなすはまりと相聞申候間、何卒旁御用心御手当被為在、御用金等之儀折角費用相省り候様御勘考、当務之急と乍恐奉存候、

一紀藩鑑察使岡雄之進より承候由、去冬十二月長州を脱藩之人数四百五拾人ほと有之由、

一勢州田丸刃江浪士共徘徊、藤堂家を責候企いたし候由、泉州にて雄之進承候由、

一和州表之者共長人江余ほと帰伏之由、其外江ハ何分表向計帰伏之模様ニ御座候由、

一何比とハ不分三田尻船にて長人境江着岸、人数五六拾人ほとも京・大坂・境江散在いたし居候由、

一和州表江去年浪士共罷居候節、米買入候約定いたし、売上書付受取居候付、右約束いたし候もの共、在々村々右手当ニ米過分困居候噂、尤直段ハ時々之相場ニ相究有之由、

右迄雄之進咄ニ御座候由、

一当地北鈴木町御代官江御出入年寄江川庄左衛門を以承候処、大和五條江人数ハ不相分浪士四組罷居、漬物拾

壹丁・梅千六丁其外塩・味そ類過分手当いたし候と之事ニ御座候、

一先日申上置候長州より逃帰候京都之馬飼儀、当所天満与力より呼下方手筈いたし候へとも、全体四條家御内之者にて、又々彼御方江立帰候処、四條家より外江御出不被成、呼下方不出来由ニ御座候、

一増田弾正事京・攝之間江潜居候由候へとも、いまたくハしく不相分、相分り次第尚亦為知候様可致、岡雄之進申候由御座候、

右は区々之説御座候得共、御見合之端ニも罷成御届申上候、何分御油断不相成時節と奉存候、以上、

二月十二日

大坂

木場傳内

大久保一藏殿

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二二六 久光公御官位宣下布告

少将様御官位被為蒙

宣下候付、先月十六日

宣旨被為遊、御頂戴候段御到来候、依之御役人限御役人并明十三日於席々相謁、御祝儀可申上旨被仰渡候事、

二月十二日

但馬(朱)川上

### 三三七 徹夜ノ朝議

二月十三日酉ノ刻過ル頃、卒然參

内アルベキ旨伝奏衆ヨリ達セラレタリ、依テ酉ノ下刻過ル頃御出邸參

内セラレタリ、

此時邸中ニアル壯士等遽ニ御參

内、殊ニ夜中ナルカ故、異変アラント想像シ、從駕セントト各々走出タリ、然レトモ素ヨリ然ルニ非ラザルカ故、鎮靜スヘク喻達セラレタリト雖モ、敢テ承服セズ、御玄喚前広庭ニ屯集シ、押テ從駕セントス、此旨、聞召シ、重テ小松帶刀ニ命セラレ、事實ヲ示サレ、若シ異変ノ兆モアラバ、直ニ命令セラル、ベシ、御築地内モ遠キニアラサレハ、機ニ後ル、コト勿レト、反復懇諭セシニ依リ、漸クニシテ承服シタリ、実ニ旺ナルコトナリキ、斯ク各奮起シタル所以ハ、當時洛中其他ニ長藩士及ヒ浮浪ノ徒許多潛匿為スコトアランノ説囂々、剩ヘ會・薩・越ノ三藩ヲ搦除セントスルノ訛言喧シク、不虞ヲ戒ムル際、夜中遽然ノ御參

内ハ、定メテ非常ノコトナルガ故、如此忘想タルモノナリ、此日卒然ノ參

内ヲ促サレタルハ、長藩討伐ノ

朝議優柔不断ナルカ故、尹宮ヨリ奏

聞セラレタル趣アリテ、遽ニ 將軍家ヲ始め一橋殿・川越侯・會津侯・越前侯及ヒ 久光公其他閣老ヲ召サレ、

御前ニ於テ(主上ハ御簾内ヨリ衆議ヲ聞召サレタリトナシ) 議論聞召サレタリトゾ、

此時 公ハ黙シ玉ヒ、各侯ノ議ヲ聞シ召サレシニ、一橋公 公ニ向テ御意見ヲ問ハレシニ、 公曰ク、忠孝ノ二字ヲ以テ國家ハ維持スヘキハ勿論タリ、又法ハ國家万民ノ標準ナリ、之レニ違フモノヲ罰スルハ、和漢之通議珍シトセス、別ニ意見ナシト 仰セラレシカハ、満座一言モナク、而シテ討伐ノ外ナキニ決定セラレタリト云フ、然シテ当夜暁ニ及ンテ退朝セラレタリ(親話録)、  
当夜ノ參

内ハ各藩邸及ヒ洛ノ中外ニ至テモ大ニ動揺シ、市街ニ於テハ稍避乱ノ用意ナシタルモアリシトナン、

二二八 御城下数ヶ所砲台操練

二月十五日御城下海岸数ヶ所ノ礮台操練催サレ、太守公ニハ九ツ時頃ヨリ祇園台場ニ御出馬、各所ノ放発ヲ見玉ヒ、祇園礮台射擲ノ度数等指揮セラレタリ、沖中ニハ例ノ如ク漂的ヲ浮へ、毎礮十発ヲ試ミタリ、中ニモ六十斤・三十斤・廿四斤ノ長礮ハ、尤モ遠ニ二達タリ、其中三十斤長礮ハ三四発ノ後車架破壊ス、然レトモ銃手ニ傷ツクモノナシ、

五十斤曰礮ノ爆彈一個頗ル適度ヲ得、漂的ノ中竿ヲ碎キ爆発シタリ、僉人喝采ノ声轟キタリ、

二二九 久光公御用部屋通達書

二月十六日二條城へ留守居呼ヒ出シ、達書左ノ如シ、

嶋津大隅守

御用有之節ハ、御用部屋へ罷出候様可被致候事、

斯ノ如ク達セラレタルハ、

朝議参予ノ

勅命ヲ蒙ラレシ故、幕議ノ席ニ列セラル、ハ勿論ナルカ故ナリ、是ヨリ准諸侯ノ地位ニ列セラレタルモノナ

リ、

二三〇 久光公参内心得

参 内之儀

一 嶋津大隅守参

内、鶴間着座、

一 伝奏出會、大隅守自分口上被申述、伝奏退入言上之後、更出席告、可有、

御対面之由、

一出御之後伝奏鶴間出席誘引、小御所取合廊下北方着座、

一大隅守自分御礼貫首申次、於廂拜

龍顔、

一大隅守於下段

天盃頂戴、

一於鶴間御礼申述退出、

(嶋津忠承氏所蔵本にて校訂)

二三一 久光公御建言

夷賊御征服、

皇威御振興、生民塗炭之苦ヲ被為救度ト之從來之

叡慮ニ被為在候得ハ、必死ニ導奉仕候儀ハ武臣之常分、

ヲノツカラ幕府ヨリ攘夷之策略寛急之次第、御建議可有之筈候得共、今攝海之御手当向相察候処、海岸ニ彼ノ砲艦ニ可対応砲台之敷、陸上ニ野戦ヲ可管之備無之

(嘉永三年、大坂天保山或ハ西河口ノ諸所、或ハ兵庫・堺等ノ地ニ、彼々タル砲台築キタリト雖トモ、兎兎ニ類シタル設ニシテ、夷艦ニ備フベキニアラズ)

我何ヲ以テ勝算可有之哉、是迄之夷情ヲ以テ相考候処、往々人之国ニ兵艦ヲ差向候ニハ、必先ツ其国之都会咽喉之場所ヲ攻撃スト相見得候へハ、前条通攝海ハ形勢無人之地同前ニテ、逆モ

禁闕之保護・京畿之警衛如何可有之哉、実以テ不安心之儀ト奉存候、各国之兵備ハ各国主之見量モ可有之候へ共、何分攝海之要港ニハ、公武同一体ニテ

皇国之全力ヲ以テ彼ガ砲艦ニ可対応、海陸之実備ヲ敵ニシ、内外ノ見据屹度相付、速ニ

叡慮相立候様有之度奉存候、既ニ近年諸国ニテ無謀之攘

夷相唱候(無謀ノ攘夷ヲ唱フルハ長藩及浮浪士ニアリ、之レニ左袒ノ藩々ハ一時長藩ノ勢焰ニ恐タルモノ半ハ以上ニ居ル、長藩モ、誠意ニハ兼アラズ、深慮ニ非ラズト雖トモ口実トシ、別ニ謀ル所アリ)面々モ、嘉永癸丑

入港以來頻リニ内備之議論モ有之、十年之星霜ヲ経候テモ其驗不相見候ニ付、匹夫之分ニシテ始終之遠略ニ涉ラズ、一己之管見ヲ以テ握腕切齒イタシ候志ニ於テハ、一凶ニ不可惡詛ニモ可有御座哉、乍併御国体之立

不立、攘夷之成不成克々其利害得失ヲ熟考仕候得ハ、誠以不可謂

神州ノ御大事タルハ、事理判然タル詎ニ御座候、堂々タル

天朝・幕府天下之大事ヲ決セラレ候ニ、一時之物議ニ拘

泥シ、不成攘夷(無謀之攘夷ヲ不可トスレハ、久光公始終一致之論ナリ、幕府モ内ニハ不可ナルヲ知り、到底行ハルヘカラザルヲ知ルト雖トモ、一時ノ權道ヲ以テ循奉、事ヲ左右ニ托シ運延シタリ)ヲ行ヒ候ハ、不思寄御儀

ニテ、被重社稷候御趣意ニ無之、且ハ後世ニ対シ臣子ノ分難相立候間、是非攘夷之攘夷タルヲ行ヒ、盟天地

奉安

宸襟度儀ニ御座候、偕攘夷之攘夷タルヲ行ヒ、奉安

宸襟候ニハ、先以テ彼ヲ制圧スルノ武備充実致候儀急務

ニ可有御座、勿論一昨年来幕府之御政体、昔日之比ニ

無之内、断然タル非常之改革ヲ行レ(断然タル非常之改革ヲ行ヒタルモ、久光公ノ御建言ニ出タルハ、)外諸大名之參勤ハ相弛、妻子各其国ニ引取

候様被命候上ハ、夫等之余財モ有之道理ニ候間、御手

始ニ神速京・攝之御備向、盛大嚴重ニ被設度奉存候、

実以テ不容易詛ハ勿論ニ候得共、於幕府勅

王之至誠被相貫、断然タル御所置ヲ以テ天下之耳目ヲ一新セシメ、假令暴論之輩トイヘトモ、感泣イタシ候様

無之候テハ、

神州挽回之道相立候儀夢々六ヶ敷、然ハ乍恐

朝廷之

朝廷タル御体裁可被為立儀ハ勿論ニテ、第一ハ幕府タル

御職掌被為尽候厚薄ニ依リ、治乱興亡之機相分レ可申

候間、克々御鑑察被為在、大根本タル武備充実之大業

速ニ御取起相成度奉存候、昨夏敵邑ニテ英夷ト一戦之

砲、砲艦之備手薄候故ヲ以テ、僅ニ撃退之場ニ至リ候

迄ニテ、一艦ヲモ打沈得サルハ夷ニ千載之遺憾、武門

之瑕瑾ト恐入候、乍併彼カ伎倆ヲ克々致実察候処、我

二十分之武備サヘ相立候得ハ、

神州ノ氣節ニテハ、数十年ヲ経ズシテ

御国威ヲ海外ニ輝キ、宇宙ニ冠タル強國ト相成、夷賊御

征服無疑儀ト奉存候、不肖之私実以不堪恐懼候得共、

一昨年来聊 官武之御為ニ奔走仕、殊ニ昨秋御召之

勅ヲ蒙リ上京仕候処、弥内外切迫之世態、殆ント

神州之御安危ニ関リ候儀ト奉存候間、前条確証ヲ得候事

件等、愚慮之俛申上候、猶 御賢慮相伺候テ、必死之

微力奉尽度奉存候、誠惶敬白、

二月

島津少將

如斯閣老ノ手ヲ経テ建言セラレシカハ、 將軍家喜容

シ玉ヒ、日ナラス吏員ヲ攝・泉・播其他紀州・阿波・

淡路等ニ出シ、礮台設立ノ要地ヲ定メ、建築ニ着手セ

ラレ、或ハ陸路八幡・山崎・枚方其他ニ数ヶ所ニ関門

ヲ据ヘ、砲台ヲ築キ、頗ル嚴整セリ、中ニモ大坂川口

天保山ニハ從來些少ノ砲台アリシカトモ、之ヲ改築シ

テ一大砲台ヲ建築シ、大煩三十余門ヲ装置スルニ至レ

リ、此時本藩ハ洋製ノ大煩十二門ヲ獻呈セラレタリ、

○此洋製ノ大煩ハ曩ニ中原猶介奉命、長崎ニ於テ魯人

ニ依頼シ買入レタル八十門ノ中ヨリ、長大ノ良礮ヲ撰

拔シ、奉獻セラレタリ、○斯ク建言セラレシカハ、幕

府ハ実地經驗シタルハ、全国ニ於テ特リ本藩ニ外ナキ

カ際ナルカ故、要地之調査或ハ築造ニ就テ、指揮スベ

キ者撰出スヘシトノ依頼アリシヲ、固辞セラレシカト

強テ懇請ナルカ故、初メ折田要蔵・中原猶介二名ヲ出

サレ、後木脇権一兵衛・沖直次郎等ノ数名ヲシテ代ラ

シメ、乙丑ノ春ニ至リテ落成ヲ告ケタリ、又各所関門

ノ造築ハ會津ヨリ数名ヲ出シ、幕吏ト俱ニ造建セリ、

二三三 久光公御在京中在邸人員へ諭達

夷賊征服之儀從來之

叡慮ニ被為 在候得ハ、今般 官武御一途之根軸被為立、  
宸翰ヲ以被仰渡候趣被為 在候上ハ、幕府ハ勿論列藩一  
同尽死力不奉安

宸襟候テハ、臣子之分難相濟儀ト存候、就テハ於征夷之  
策略、方今之急務タルハ、攝海之要港守備嚴重相調候  
儀ニ可有之存候間、聊愚意之趣幕府江建言イタシ置候、  
尤時世之急務致言上候様トノ趣、先達テ申渡置候得共、  
猶又右攝海守禦之術ニ於テハ、成敗之処分人命之所係  
ニテ、実以テ至大至重之事情間、方略之次第存寄有之  
者ハ不差置可申出候、當時於諸藩開鎖之論致紛擾候哉  
ニ相聞得、甚敷ニ至候テハ我藩ヲ開港説ト唱候由ニ候  
得共、決テ可答ニ非ラズ、又一時愉快之説ヲ聞可動ニ  
非ス、我等趣意ニ於テハ一昨年来致持論候通、我レニ  
十分ノ備ヲ設ケ、万古不易之征夷ヲ行ヒ度トノ着眼ニ  
テ、

神州之安危ニ致關係候御大事之時ニ至リ、数年ノ

叡慮ニ奉基大策見据候上ハ、天下後世迄モ致貫徹度志ニ  
候条、幾重ニモ趣意取違無之様、為心得申聞候事、

二月

斯ク示諭セラレシ所以ハ、近頃長人或ハ浮浪ノ徒、洛  
中又ハ伏・坂ノ間ニ潜匿セシ者多ク、種々ノ訛言ヲ以  
テ煽動シ、或ハ落書シ、本藩ヲシテ開港論ト誹譏喋々  
タルカ故、藩人壯年血氣ノ輩ハ之ヲ忿リ、若シ浮浪等  
ニ対シ過激ノ所為アランコトヲ憂ヒ玉ヒ、或ハ深密ノ  
尊慮ヲ知ラサザルモノハ、若クハ然ランカト、疑惑ヲ  
起スモノナキニシモアラシト杞憂セラレ、如斯諭示セ  
ラレタルモノナリ、

攝海防禦之儀ニ付、御別紙之通 少将様御建言被遊、  
又ハ於京都被 仰出候段申来候条、誠ニ以テ難有  
御趣意之御事候、就テハ一統御趣意厚相心得、存寄  
有之者ハ不差置、銘々支配頭諸郷ハ地頭へ相付、以  
書付可申出候、

右向々へ不洩様可致通達候、

二月廿九日

式部川上 但馬川上

### 二二三 四侯尹宮へ推参

二月十六日一橋卿・春嶽侯・宇和島侯・島津三郎侯等  
参 朝有之、

御直々ニ攘夷之義

勸慮之所被伺定候処、御直ニ被仰下候ニハ、於攘夷ハ少モ御動揺不被遊御旨ニ御沙汰之処、右伺引退キ候上、右様伺居候上ハ、是非

勸慮貫徹之様不相成候テハ、深恐入候義ト論判之処、島津計右ハ伺之廉聞間違ニモ可有之、攘夷之義全御間違ト被申候ヨシニテ、段々論判之上翌十七日早朝二條表登城有之、右ハ不容易義ニ付、如何之訳ニテ左様被申候哉ト御論判之処、御間違之義慥ニ尹宮ヨリ御沙汰ヲ承知罷在候段ニ付、右尹宮直ニ被承候哉トノ処、直々ニテハ無之、高崎伊勢ヨリ承込候旨返答ニ付、直様一橋君其席ヲ立、早々尹宮へ御出之処、宮御方御風氣ニテ御対面御断之処、只今参上之義ハ天下之重事ニ付、御寝所ニテ不苦ト被仰、押テ御携刀之俛、宮御寝所トカニテ前件之始末御談判之所へ、引続キ跡三候ニモ御参上之処、遂ニ談判之義宮御方御返答ニハ、左様之義申候義ハ無之由ニ御返答ニ付、島津侯へケ様ニ迄御談判申上候上ハ、如何之訳ニ可有之哉ト尚又御論判之処、詰リ島侯返答ニ、右方之義モ例之奸吏共之所業ニモ可有之抔ト、不容易義ヲ被申消候ヨシ風聞有之、右ハ尹宮ト何等子細之義可有之儀歟、口外ヲ可憚事也、

島侯ハ專ニ開港因循ニ當時被相成候ヨシ、

二三四 長州征討違書

子二月十六日達

名代

紀伊中納言

副將

松平肥後守

差添

有馬遠江守

此度松平大膳大夫父子御札問之筋有之、万一承服不致節ハ、征伐可致存念ニ付、其節ハ云々申付候間、用意可致旨内意申渡候事、

同日

松平阿波守

松平相摸守

松平出羽守

松平修理大夫

細川越中守

松平安藝守

松平備前守

小笠原大膳大夫

阿部主計頭

脇坂淡路守

〔孝明天皇紀第五にて校訂〕

右同〔卷ノ十番〕文言申渡之、

当時は京無之向へハ、家老呼出シ、密封ニテ御渡之ヨシ、



〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編  
元治元年二月ノ二

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
（紙数六五枚）の記載あり〕

目録

- 元治元年(1864)
- 勝麟太郎方江入塾ノ徒給与伺
- 堺町丸太町同所へ書付
- 九條殿南之壁江墨ニテ大字ニ書付
- 丸太町閑院宮御築地ニ書付
- 水野殿へ御呼出申渡
- 茂久公御刀御拝領
- 久光公御刀御馬御拝領ノ布告

三條大橋張札

薩商大谷仲之進梟首及ヒ捨札

錢相場布告

火操練御出馬

長州征伐発表

長州征討達書

長州征伐出軍人名

在京兵操練久光公親臨

島津少将大砲献上

二三五 勝麟太郎方江入塾ノ徒給与伺

此節勝麟太郎殿方江入塾被仰付候面々、世上之形勢相伺、御地江御届申上候相心得之由、就ては急速之節、彼地より御地差越可申上儀も可有御座、其節は御賄料被成下儀御座候哉、私江相付伺越呉候様申出候付、此段申上越候、何分之儀被仰渡置度奉存候、以上、

子二月十七日

木場傳内（養生）

大久保一藏殿

（大久保利謙氏所蔵本にて校訂）

二三六 堺町丸太町同所へ書付

島津三郎義不容易奸計ヲ抱キ、幕ヲ陥シ

天朝ヲ欺キ奉リ、長藩ヲ攻討ノ策ヲ工ミ候段、実以不顧  
皇國ノ手段不屈ノ至リ、詰リ

皇國ノ大變ニ可至、若尔後改心不致、徳川氏ヲシテ攘夷  
致サシメサルニ於テハ、不時ニ可加天誅者也、

二月十七日

二三七 子二月十七日朝

九條殿南之壁江墨ニテ大字ニ書付

二三七ノ一

島津三郎儀不当之奸計相抱キ、幕府ヲ陥レ

天朝ヲ欺キ奉リ、既ニ長藩ヲ攻討之策略ヲ工ミ候段、  
実以不顧

皇國之傾敗不屈之至リ、

神州之釀大乱ニ至ル、若尔後改心ヲ致、(不脱カ)不使徳川攘夷

ニオイテハ、不時ニ可加天誅也、

二三七ノ二

同東洞院西へ入

閑院宮壁ニ左之通、

当時春嶽始島津三郎等、開港ノ儀ヲ主張シ、

皇國ヲシテ専ラ滅亡ニ至ラシムル所置、甚可惡之至、

因テ滿天下有志英雄一挙シテ可加嚴誅也、

二三八 子二月十八日丸太町閑院宮御築地ニ書付

方今開港之儀ヲ推張り、(松平慶永・島津久光・伊達宗徳)春嶽・三郎・宇和島其れ余奸吏

之計ヲ

天朝ニテ御採用有之候テハ、國人不居合、因テハ可加  
天誅者也、

二三八ノ一

同日間ノ町東へ入九條殿御築地江

当時春嶽・島津三郎等、開港ノ儀ヲ張り、  
皇國ヲ自滅ニ至ラシムル深意甚可惡之至ニ候、  
日本國中有志之英雄可加天誅者也、

二三八ノ三

同日堺町西江入所ニ

島津三郎儀不容易奸計ヲ抱キ、幕ヲ陥リ

天朝ヲ欺キ奉リ、長藩ヲ攻討ノ策ヲ工ミ候段、実以不顧  
皇國之手段不屈之至リ、詰リ

皇國之大變ニ至ルヘク、若尔後改心不致、徳川氏不致  
攘夷於テハ、不時ニ可加天誅者也、

二三九 子二月十九日水野殿へ御呼出申渡

折田要蔵呼出

松平修理大夫家来

折田要蔵(年秀)

右攝海御台場御取建ニ付、為見分御用被差遣候間、其段可申渡候、委細之義ハ御目付徳永主税(昌新)・御勘定吟味役林又七郎・御勘定小澤金五郎へ承り合候様可仕候、

二四〇 茂久公御刀御拝領

二四〇ノ一 御座間ニ於テ(元)「二條城」

松平修理大夫

名代

(柳沢保中、郡山藩主)  
松平甲斐守

年来国家之御為藩屏之任ヲ尽シ候段、

御満足ニ被 思召候、依之御差之御刀・御脇差被下之、

弥励精可相勤候、

(卷)  
「二月二十二日」

二四〇ノ二

嶋津大隅守

年来国家之御為励精尽力致し、当節之御場合ニ至候段、御満足ニ被 思召候、依之御鞍置御馬被下、愈精勤可致候、

(島津忠家氏所蔵本にて校訂)

右於御白書院椽類替席両度ニ、和泉守 銘々書付渡之、

老中列座、

御差之御刀美濃国兼常 松平修理大夫

同御脇差延壽國壽 名代松平甲斐守

御手自

東照宮一本 御刀備中国直次代金五十枚 島津大隅守

御鞍置馬

二四一 久光公御刀御馬御拝領ノ布告

二月廿二日於京都閣老水野和泉守殿ヨリ、捧書ヲ以テ

二条城へ御登城アルヘキ旨達セラレタルニ依リ、同廿

二日御登城(紀述編年卷五ニ未ノ刻ハ、カリニ御登城ト記セリ)、牡丹ノ間ニ於テ水野和

泉守殿ヨリ達、

島津大隅守

年来国家之御為励精尽力致シ、当節ノ御場合ニ至候

段、御満足被 思召候、依テ御鞍置御馬被下、愈

精勤可致候、

右ノ如ク拜承セラレシ後、大目付渡邊甲斐守ヨリ御用アル旨ヲ以テ、御扣アルヘシトノ事ナリシカ故、御扣アリケルニ、重テ和泉守先導、御座之間ニ案内、程ナク將軍家出御、去秋八月十八日堺町御門ノ事件落士殊更ニ尽力、加之

朝議復正是全ク養生馴示周到ニ依レリト親賞セラレ、御手ツカラ刀ヲ賜フ、而シテ大広間ニ御退キ、酒井雅樂頭殿ヲ以テ謝セラレタリ、

此報知鹿兒島ニハ二月二十九日到達、同日布達左ノ如シ、

少將様御事、去ル廿二日於京都、御別紙之通御鞆置

御馬并御刀御拝領、其上於 御前別段御直御褒賞被

為蒙候段御到来候、依之御一門方并諸大身分其外月

并御礼罷出候面々、明朔日登城月并御礼後、於席々

謁御家老、(島津茂久) 太守様 少將様へ御祝儀可被申上候、

左候テ御役人諸士之儀ハ、右相濟候上同断御祝儀可

申上候、諸郷之儀ハ地頭へ相付、御祝儀可申上候、

右通不洩様可致通達候、

二月廿九日 式部川上 但馬川上  
久美 久運

二四二 子二月廿三日三條大橋張札

辺防之事起リシヨリ、攘夷之

叡慮頻ニ被 仰出候得共、奸吏ノ因循、上ハ奉輕蔑

天朝、中ハ列侯ノ遺訓ヲ背キ、下ハ闔國之人民ヲ患シ

メ、奸吏私慾恣ニシ候段、神人共ニ怒リ、天變地妖打

続キ、就中南都春日社神鏡ノ破裂等ハ、從古兵乱ノ妖

孽ニ候処、今日ニ至リ改過候儀モ無之、却テ醜夷ニ通

シ奉欺

朝廷、有志ノ者ヲ屈撓セシムルノ謀ヲ廻シ候条、幕

府モ術策ニヨルトイヘトモ、烈公ノ遺命ヲ承ナカラ、

奸吏ニ与シ候一橋公ノ罪ナレハ、為

皇國不得止可加誅戮之評議、往々街語有之事、

一去年九月十四日ヨリ横濱鎖港及談判候節、醜夷ノ一言

ニ畏縮シ及因循候処、此節ニ相成数百万金ノ償ヲ以、

横濱一港暫鎖港ノ儀ヲ相唱候条、外夷へ貢ヲ贈候全様

ニテ、実ニ以テ

神州ノ汚レト相成可誅之罪一也、

一正忠ノ長藩ヲ、奸謀ヲ以遠サケシムルハ、會藩ノ奸謀

ニ候処、右ノ者江褒美ヲアタヘ候儀、不届ニ付可誅之

罪二也、

一長藩之儀モ深被遊

勲感候処、恐多モ矯 宸衷討長ノ策ヲ及建言候ヘトモ、

一旦ハ薩藩ノ正論ニ挫カレ候処、此度秋元(志朝、館林藩主)但馬守ヲ、

長州江御差下之

朝命ヲ拒シ段可誅罪三也、

一討長ノ策ハ、薩藩ノ建言ト申触シ、薩長間ヲ離間イタ

サセ候謀ヲ廻シ、終ニハ長国ヲ削リ候密謀有之、醜夷

ヘモ通シ長国ヲ劫掠イタサセ、終ニハ薩ヲモ全様ノ策

ヲ以勤 王藩ノ根ヲ絶テ、逆臣可誅ノ罪四也、

一大和浪士囚獄者トモ外夷ニ当候テハ、実ニ一騎当千ノ

者共ニ候間、津藩其外永井主水正(篇志)ニ至迄、助命之建言

有之候処、当十六日被処斬罪ニ候段、奸吏之外ハ上下

共不堪痛憤候、既ニ戊午前後、勤 王有志之輩非命ニ

殺シ候事不少、可誅之罪五也、

一当今ノ形勢ニテハ、幕威ヲ以矯

宸衷、長藩ヲ逆臣杯ト申候義、如何体之奸曲致組織候

ニモ順逆ニ候、 神明ノ冥覽鬼人之見分顯然之事ニ候

処、長藩之激烈、幕威凌候事件モ可有之候ヘトモ、幕

吏奉対

朝廷候罪ニ比スレハ、九牛ノ一毛トモ可申、乍去上下之名分ヲ省キ理ヲ相弁、外夷掃攘之周旋有之度事、

一薩藩ノ因循開港ノ建言有之由、且綿花杯多分貿易致候

由、綿花火攻戦争ノ楯ニ相用候品、敵国ニ兵器ヲ与ル

ノ利ニテ、尊攘ノ説ヲ主張之三藩第一ト被称候薩、此

度ニ至リ反復ノ取計有始無終事ナランヤ、

一東肥南越其外諸藩偷安ノ策ヲ建、幕府ノ虚攻ニ因循之

不諫ハイカニ淫靡ノ風ニ流レ候共、大藩ノ規模モ無之、

他日後悔之事ヲ不知ハ、難堪事ナランヤ、

一幕府ノ失錯、諸藩ノ因循、度々ノ上京徒ニ金錢ヲ費シ、

人望ノ帰向ヲ失ヒ、俗ニ云小田原評議ニテ、送ル月神

怒民叛不容易患害ヲ醸可申、既ニ有志之徒不堪痛憤、

薩長始極密申合、三港其外奸賊ノ巢穴ニ放神火、

神州ノ御威光海外迄モ輝シ可申機会ト一同決心ノ上、

天下ノ人民ノ耳目ヲ驚シ申サンカ為、兼テ揭示スルモ

ノ也、

元治元子年二月

有志中

二四三 薩商大谷仲之進鼻首及ヒ捨札

二四三ノ一

子二月廿六日朝大坂南御坊前馬繫江伐首札ニ

表ノ方

大谷仲之進

中国浪士

永井精一

山本誠一郎(朝正)

此者泉州堺ヨリ長崎運送トシテ、莫大ノ綿油其外諸品買込、積下シ候趣相聞候ニ付、此度周防之国別府之浦ニ於テ、嚴重ノ及糺明候処、外夷交易ニ積下シ候段、逐一及白状、豈計哉、薩藩ハ順聖公(島津齊彬)以來、尊王攘夷ノ大義ヲ被唱、天下之人心奮起イタシ候程之処、只今ニ至先公ノ深旨ヲ忘却シ、外夷ニ令交易候段、全諸役人ノ貪欲無恥、私之奸計ニシテ、上ハ十余年以來、日夜被為惱

宸襟所、断然ニ被仰出候攘夷之聖衷ヲ蔑シ、下ハ諸品払底、物価高直ニ相成、人民次第ニ困究ニ相迫候ヲモ不顧、……内ハ

神州ノ国力ヲ疲ヘイセシメ、外ハ豺狼ニ等シキ夷賊ノ術中ニ陥リ、神州有限之品ヲ以、夷賊無厭ノ欲ニ充マ、トス、其罪惡不容天地神人共ニ怒ル、依テ其品々焼払、船中居合ノ奸吏ヲ誅シ、世間交易スルモノヲ戒シメンカ為ニ如此令梟首也、

二月

裏ノ方ニ

我等兩人所存有之、国元出奔イタシ候処、此度泉州堺ニ於テ莫大之品ヲ買込、交易セシメ候趣相聞候ニ付、附覬加誅戮候、全ク是ヨリ交易スルモノ共改心イタシ、恐ナカラ攘夷之  
 叡慮相貫度切腹イタシ候、我等ノ赤心天地神明照覽可給事謹テ祈所也、

右様取計置、兩人トモ御堂石檀ノ上ニテ切腹相果居候ヨシ、

此大谷仲之進ハ、薩藩中此度堺表ヨリ運送諸荷物宰領役人ト申風聞ナリ(朱)「第一卷ニ記スルカ如シ」

二四三ノ二  
 二月廿六日、大坂東御堂前ニテ、大谷仲之進ト云者ノ首級ヲ梟首イタシ置、自殺罷在候浪士兩人ノ辞世ノヨシ、

山本氏三十才計

雨風に散るともよしやさくら花

君か為にはなとかいとほん

永井氏 三十四五才計  
数あらん名ヲあく迄も思ふ身の  
はかなくきゆる野辺の朝露

右真偽如何可有之候ヘトモ、殊勝之假書記シ畢、

一 右大谷何某首級ハ、薩藩共風説有之、正月十一二日頃  
防州沖渡海ノ節被生捕、交易筋ノ義白状イタシ候トモ  
雑説有之、建札ニ書記シ候通彼地ニテ打取、石灰漬ニ  
イタシ京都迄モ持登リ、鼻首可致心組ノ処其儀不果、  
遂ニ大坂ニテ取行自殺致候杯、不取留説紛々ニ有之候  
事〔本〕「第一巻参照」

一 長州兵卒組内ノ商人某、病氣治療申立、三月上旬上京、  
或問屋ヘ注文出シ即日帰帆、其者ノ密話ニ云、去亥九  
月已来、長府探索掛リ一組三人宛四組、兵庫・堺・京  
攝ノ間ニ潜伏、種々探索候処、薩州ヨリ堺表ニテ綿・  
油・木綿夥敷買込、長崎へ積送候荷物、薩藩大谷仲之  
進ト申者棟梁ニテ、其下役共四十人計リ周旋、無程出  
帆ノ趣長府へ申達シ候ニ付、其手配ニテ待居候処、案  
ノ如ク其船長州別府浦ニ泊リ候故、改役人罷越、異船  
ト見掛候間、国柄荷物等改ノ上、通行ヲ可許ト申乗入  
候処、日本人計リニテ、先ツ重立候船頭ヲ番所江小船

ニテ召連帰り、言次ニ大谷仲之進ヲモ同様ニ迎入及札  
問候処、外夷交易ノ為長崎へ積下シ候旨、逐一及白状  
候ニ付、兼テ探索方ヨリ内達ノ書取ト符合イタシ候ニ  
付、大谷并船頭共首ヲ刎、其節蒸氣船釜元江火薬ヲ仕  
込置候故、一時計ヲ経テ焼出シ、人々防候得共、綿・油  
等ニ火移リ難消留、遂ニ船ハ焼沈、乗組六十八人ノ内  
廿八人死亡、残四十人計上陸致候ヨシ、扨右重立周旋  
イタシ候長藩永井精一・山本誠一郎兩人ハ、右船頭ノ  
首ハ取捨、大谷ノ首計ヲ石灰漬ニイタシ携登リ、子ノ  
二月廿六日早朝、大坂南御堂前馬繫キ掛、張札出シ、  
全ハ自分等中国浪士ト称シ、右之所業兩人江引受、潔  
能相果候趣也、右両士誠ニ 皇国ノ御為主君ノ為ニ身  
命ヲ果スハ、正義忠勇皆感賞ス、

一 三月廿日肥後熊本ヨリ帰京ノ者ノ話ニハ、右薩藩船ヲ  
長藩ヨリ焼シハ子二月二日也、熊本ニテ風聞ハ、長州  
ヨリ発砲シテ焼打ニイタシ候由、然レトモ薩藩上陸イ  
タシ候者共ハ、船中自火ニテ焼亡セシ由ヲ国元江申遣  
シ候趣、表立長州ヨリ焼打ト申儀ハ難相成、右上陸ノ  
者モ帰国不相成、豊前小倉ニ滞留ノ由、且又長藩両士  
大坂ニ差違ヒ死タルニテハ無之、兩人共辞世ノ歌ヲ紙

ニ認、各立派ニ切腹致候儀無相違ヨシ、

一泉州堺ニテ風聞ハ、薩州ヨリ交易ノ品買集候ハ、右之〔左カ〕

趣ニ相聞候、

綿五十万斤〔老斤目方二百目也〕

油 十六万樽

木綿 五十万端

二四四 錢相場布告

一四文錢一文ニ付〔二四四ノ一〕

代錢六文ツ、

一銅錢壹文ニ付

代錢貳文ツ、

右ハ吟味之趣有之、今日ヨリ御蔵々入払ハ勿論、御

領國中一同腰書直成ヲ以致通融候様申付候、左候テ

金錢相場之儀申渡置候ヲ、内々相場相立、致取替候〔左一六板ニ於テ買入ノ價格〕

段相聞得、第一

御国政ヲ相紊リ候場ニ相当、別テ如何之到候条、金

直成又ハ琉球通寶等、兼テ定置候直成通致取引、内

々ニテ相場相立候儀不相成候、若此後不束之致取引

候者ハ、屹卜可及迷惑候、此旨支配中へ申渡、奥掛・

表方へ相達、諸郷・私領へモ可申渡候、

二月廿七日

〔書人久高攝津〕

二四四ノ二 鉄製四文錢通融ノ説〔全上〕

二月廿七日四文錢貳文通融ニ相成候由、世間大騒キ、

二四五 火操練御出馬

二月廿七日、操練場ニ於テ御旗本及ヒ両御城下警衛隊  
操練催サレ、太守公御出馬アラセラレタリ、

本日長州征討出軍奉命ノ人員モ隊員ノ中ニアリ、畢リ  
テ御城下諸所砲台遠擊操練モ同所ヨリ御覧アラセラレ  
タリ、

二四六 長州征伐発表

二月廿七日達

去ル十一日、二條御城へ御留守居御呼出、於大広間

御老中水野和泉守様・酒井雅楽頭様御列座、大目附

土井備中守殿、御目附中山藤十郎ニテ、和泉守様ヨ

リ 太守様へ御書一通、御密事ノ由ニテ被相渡、今

日御到来御開封被遊候処、松平大膳大夫父子へ御札

問ノ筋有之、万一承服不致候ハ御征伐可被遊 思召



二付、其節ハ討手被 仰付候段、御別紙ノ通御承知  
ニ候条、各拜見可有之候、尤モ御手当向ノ儀ハ、追  
々被 仰出ニテ可有之候事、

二月廿七日

別紙前卷ニ記シタルカ故茲ニ略ス、然シテ此書顯然、  
布達ニハ非ラサレトモ、国老喜入攝津ヨリ組頭ヘ心  
得ノ為メ内達セラレタルモノナリ、然ルニ此内ヨリ  
一般長人ノ所為忿懣ニ堪ヘサルカ故、老若挙テ奮起  
シ、出軍冀望ノモノ多ク、国老等ニ就テ請願シ、或  
ハ組頭又ハ軍務ノ吏ニ依リテ、懇請スルモノ続々タ  
リ、

二四七 長州征討達書

松平修理大夫

此度松平大膳大夫父子江御札問之筋有之、万一承服不  
致節ハ、御征伐可被遊

思召ニ付、其節ハ為討手、其方人数差出候様被

仰出候間、用意可致旨

御内意被

仰出候事、

〔別紙〕

御名代

副將

差添

〔徳川茂承、紀州藩主〕

〔紀伊中納言殿〕

〔容保、軍事總裁、会津藩主〕

〔松平肥後守〕

〔道純、老中、丸間藩主〕

〔有馬遠江守〕

松平修理大夫江

右之通被

仰出候間、諸事受差図尽力可被致候事、

〔別紙〕

〔薩須賀斎給、阿州藩主〕

〔松平阿波守〕

〔池田慶徳、因州藩主〕

〔松平相摸守〕

〔定安、松江藩主〕

〔松平出羽守〕

〔慶順、熊本藩主〕

〔細川越中守〕

〔淺野長訓、芸州藩主〕

〔松平安藝守〕

〔池田茂政、備前藩主〕

〔松平備前守〕

〔忠幹、小倉藩主〕

〔小笠原大膳大夫〕

〔正方、福山藩主〕

〔阿部主計頭〕

〔安芸、能登藩主〕

〔脇坂淡路守〕

右之者共江モ相達候間、諸事可被談候事、

一去ル十一日、二條御城へ御留守居御呼出之上、於大広

間御老中水野和泉守様・酒井雅楽頭・有馬遠江守様御

列座、御席詰大目附土井備中守殿、御目附中山藤十郎

殿ニテ、和泉守様ヨリ太守様へ御書一通、御密事之儀

ニテ被相渡、今日御到来 御開封相成候処、長州へ御

〔馬津忠承氏所蔵本にて校訂〕

札問之儀被為 在候付、万一承服不致候ハ、御征伐可被遊 思召ニ付、其節ハ討手被仰付候段、御別紙之通被遊御承知候付、各拜見可有之、尤御手当之儀ハ追々被仰出旨可有之事、

二月廿七日

一別紙長州之儀ニ付、御書付并添書之趣、今日登城夫々拜見之通候処、病氣等ニテ不罷出者モ可有之候付、一統不洩様大番頭・御小姓番頭其外へ早々可致通達候、左候テ諸組与力ハ支配頭宅、諸郷・私領ハ地頭飯屋又ハ領主々々ハ於飯屋拜見有之候様、是又可被申渡候、

子二月廿七日

丹波・摂津・但馬

二四八 長州征伐出軍人名

二月廿七日達、長藩征討ノ内達アリシニ依リ、左ノ人々出軍拜命ス、

周防殿及御家老・大目附ハ、御座之間ニ於テ御直達、御側役以下御使番迄ハ、芍薬之間ニ於テ御家老ヨリ達シ、其他什・伍長等ハ御用人申渡之、

御名代 御家老

島津周防殿忠鑑重高領主 喜入 攝津久高鹿籠領主

大目附

御側役

御軍役奉行

御先手物主

町田民部久成、伊集院郷石谷村ヲ領ス

叢田長池傳兵衛

折田平八

北郷數馬久徳

仁禮舍人仲信

田尻務種賢

島津織之介久直

川上右膳久賢

島津権五郎久馨

御旗奉行

伊集院周八

小荷駄奉行

市來次十郎広業

玉薬奉行

山田轉有志

御使番

大山彦左衛門光通

汾陽次郎右衛門

御目付

御軍賦役

小倉喜藤太  
三雲藤一郎

一同大砲 二隊 御城下兵下同數ナリ  
一曰砲攻城 四座二十樽曰砲、○人員四十八人、此内兵士三十四人、其他ハ夫卒ナリ

兵糧奉行

大山格之介綱良  
田代宗次郎

一帖佐郷士兵 一組 人数九十八人  
右御名代周防殿へ被召付候予テ同郷地頭職ナレハナリ  
右各組人数賦左ノ如シ改正御軍賦ノ如シ  
同廿八日達

人馬奉行

郷田源八

一番組

物主

普請奉行

安田喜藤太

〔頭註〕「談合役以下名札シ記入スベシ以下皆同シ」  
談合役 北郷 數馬久徳

御右筆

迫水善左衛門久徴

旗預

御儒者

竹内伊左衛門

仕長

医師

兒玉源之丞

〔二行空白〕

兵糧方

〔ママ〕

一 御城下士兵

一 陣 人員總計七百七十人、此内兵士三百九十六人、此外ハ諸役者及夫卒等也

一 同大砲

二 隊 人員百九十六人、此内兵士八十人、其他ハ夫卒等ナリ

一 諸郷士兵

一 陣 御城下兵下同數ナリ

玉薬方

〔ママ〕

小荷駄方

(マ)

宿割方兼普請方

(マ)

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

斥候役

(マ)

医師

(マ)

二番組

物主

仁禮 舍人仲信

談合役

江田平太郎

旗預

寝占 與助

什長

三木原 等

西 太郎兵衛

鎌田市兵衛

〔頭註卷「外札スベシ」〕

〔三行密告〕

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方兼普請方

溝口十左衛門

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

斥候役

三番組

(マ)

医師

(マ)

物主

田尻 務種賢

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(六行空白)

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方兼普請方

(マ)

四番組

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

斥候役

(マ)

医師

(マ)

物主

島津織之介久直

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(六行空白)

兵糧方

五番組

(マ)

玉葉方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方兼普請方

(マ)

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

目役

(マ)

斥候役

(マ)

医師

(マ)

物主

川上 右膳久賢

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(六行笠目)

兵糧方

(マ)

玉葉方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方兼普請方

(マ)

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

目役

(マ)

元治元年(1864)

六番組

斥候役

(ママ)

医師

(ママ)

物主

島津権五郎久馨

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

什長

(六行空白)

兵糧方

(ママ)

玉葉方

(ママ)

小荷駄方

(ママ)

宿割方兼普請方

旗指

(ママ)

太鼓役

(ママ)

貝役

(ママ)

斥候役

(ママ)

医師

(ママ)

川邊一組

(頭註朱) (物主名札ン記入スペース、以下皆同シ)

物主

(ママ)

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

什長

(六行空白)

樋脇一組

物主

(ママ)

医師

(ママ)

斥候役

(ママ)

貝役

(ママ)

太鼓役

(ママ)

旗指

(ママ)

宿割方兼普請方

(ママ)

小荷駄方

(ママ)

玉葉方

(ママ)

兵糧方

談合役

(ママ)

圖師 崎良助

旗預

(ママ)

什長

(六行空目)

兵糧方

(ママ)

玉葉方

(ママ)

小荷駄方

(ママ)

宿割方兼普請方

(ママ)

旗指

(ママ)

太鼓役

(ママ)

貝役



元治元年(1864)

高城郡高城一組

斥候役 (マ)

医師 (マ)

物主

長束 十郎

談合役

旗預 (マ)

什長

(六行筆目)

兵糧方

玉薬方 (マ)

小荷駄方 (マ)

宿割方兼普請方

旗指 (マ)

太鼓役 (マ)

貝役 (マ)

斥候役 (マ)

医師 (マ)

高山一組

物主

山城新右衛門

談合役

旗預 (マ)

什長 (マ)

大崎一組

(六行空白)

兵糧方

( )

玉葉方

( )

小荷駄方

( )

宿割方兼普請方

( )

旗指

( )

太鼓役

( )

貝役

( )

斥候役

( )

医師

( )

物主

益満與右衛門

談合役

( )

旗預

( )

什長

(六行空白)

兵糧方

( )

玉葉方

( )

小荷駄方

( )

宿割方兼普請方

( )

旗指

( )

太鼓役

( )

清水一組

貝役 (ママ)

斥候役 (ママ)

医師 (ママ)

(ママ)

物主

武宮十左衛門

談合役 (ママ)

(ママ)

旗預

(ママ)

什長

〔六行空目〕

兵糧方

(ママ)

玉葉方

(ママ)

小荷駄方

宿割方兼普請方 (ママ)

旗指 (ママ)

太鼓役 (ママ)

(ママ)

貝役

(ママ)

斥候役

(ママ)

医師

(ママ)

蒲生一組

〔頭註末〕「物主以下名札シ記入スベシ、以下皆同シ」

物主

(ママ)

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

什長

〔六行空目〕

兵糧方

〔ママ〕

玉葉方

〔ママ〕

小荷駄方

〔ママ〕

宿割方兼普請方

〔ママ〕

旗指

〔ママ〕

太鼓役

〔ママ〕

貝役

〔ママ〕

斥候役

〔ママ〕

医師

〔ママ〕

國分一組

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

什長

〔六行空目〕

兵糧方

〔ママ〕

玉葉方

〔ママ〕

小荷駄方

〔ママ〕

宿割方兼普請方

〔ママ〕

旗指

〔ママ〕

太鼓役

元治元年(1864)

志布志一組

貝役

(マ)

斥候役

(マ)

医師

(マ)

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

什長

(六行筆目)

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方兼普請方

(マ)

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

斥候役

(マ)

医師

(マ)

大口一組

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

〔 〆 〆 〕

什長

〔六行空白〕

兵糧方

〔 〆 〆 〕

玉薬方

〔 〆 〆 〕

小荷駄方

〔 〆 〆 〕

宿割方兼普請方

〔 〆 〆 〕

旗指

〔 〆 〆 〕

太鼓役

〔 〆 〆 〕

貝役

〔 〆 〆 〕

斥候役

〔 〆 〆 〕

医師

隈之城

水引

合一組

〔 〆 〆 〕

物主

〔 〆 〆 〕

談合役

〔 〆 〆 〕

旗預

〔 〆 〆 〕

什長

〔六行空白〕

兵糧方

〔 〆 〆 〕

玉薬方

〔 〆 〆 〕

小荷駄方

〔 〆 〆 〕

宿割方兼普請方

〔 〆 〆 〕

帖佐一組周防殿馬廻二付

旗指 (マ)

太鼓役 (マ)

貝役 (マ)

斥候役 (マ)

医師 (マ)

物主 (マ)

談合役 (マ)

旗預 (マ)

什長 (マ)

(六行空白)

軍監兼參謀

兵糧方 (マ)

玉葉方 (マ)

小荷駄方 (マ)

宿割方兼普請方 (マ)

旗指 (マ)

太鼓役 (マ)

貝役 (マ)

斥候役 (マ)

医師 (マ)

(マ)

此一郷帖佐一組御名代周防殿地頭職故、被召付隊外

外二

周防殿手人上下百人余不定

喜入攝津手人上下三十人余不定

野戰砲八門二斤山野砲

〔頭註末〕「物主以下名札シ記入スベシ、以下皆同シ」

物主

〔 〆 〆 〕

談合役

〔 〆 〆 〕

旗預

〔 〆 〆 〕

什長

〔六行空白〕

兵糧方

〔 〆 〆 〕

玉葉方

〔 〆 〆 〕

小荷駄方

〔 〆 〆 〕

宿割方兼普請方

〔 〆 〆 〕

旗指

〔 〆 〆 〕

太鼓役

〔 〆 〆 〕

貝役

〔 〆 〆 〕

運送方玉葉運送方兼

〔 〆 〆 〕

斥候役

〔 〆 〆 〕

医師

〔 〆 〆 〕

野戰砲隊山野重砲八門

物主

〔 〆 〆 〕

談合役

〔 〆 〆 〕

旗預

〔 〆 〆 〕

什長

〔 〆 〆 〕



(六行空白)

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方

(マ)

宿割方兼普請方

(マ)

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

運送方玉薬運送方兼

(マ)

斥候役

(マ)

医師

臼砲四座二十拇

(マ)

什長

(六行空白)

兵糧方

(マ)

玉薬方

(マ)

小荷駄方玉薬運送兼

(マ)

宿割方兼普請方

(マ)

旗指

(マ)

太鼓役

(マ)

貝役

(マ)

運送方

(マ)

斥候役

(マ)

醫師

(マ)

二五〇 島津少将大砲献上

大砲十二挺(魯国製ヲ買入レタル者)

今般征夷之以

叡慮、攝海之要港守備嚴重行届候様被 仰出、於幕府  
巡察被差出候上ハ、器械頓整之処急務ト奉存候、自御  
手当モ被為在候筈ニ候へ共、乍恐右之通献砲仕度奉存  
候ニ付、聊御用途之一助ニモ相成候へハ難有奉存候、

宜御執 奏奉願上候、已上、

二月二十九日

薩摩少将

右四座監軍ニテ指揮役兼

一 京都ヨリ出張人数上下二百二十人(高橋縫殿総督ス)

一 高橋縫殿<sup>種親</sup>手人十八人 不定

惣人数上下凡式千五百人余

外ニ蒸気船ヨリ出張人数詳ナラス、凡ソ百余人ニ及

ヘリト云フ、糧食・彈藥等改正軍賦ノ如シ、略ス<sup>久文</sup>

元年十二月、  
改正ノ如シ、

右廿八日達セラレタリ、然ルニ出軍冀望者多く、之レ

ニ漏レタル輩ハ大ニ残慨シ、奔走シテ請願スルモノ多

キカ故、諭達スルニ 太守公臨機御出馬アルヘシ、此

回ハ先鋒ノ隊ヲ出サル、モノナリ、因テ鎮静スヘキ旨

ヲ以テシ、漸クニシテ鎮メ得タリ、

二四九 在京兵操練久光公親臨

二月廿八日、在京兵隊不時ノ操練ヲ岡崎邸内ニ於テ催

サレ、 国父公 親臨セラレタリ、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

元治元年三月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」  
(紙数五六枚)の記載あり〕

目録

- 寺町三條下ル町升屋喜右衛門表戸ニ張紙
- 久光公ヨリ容堂公へ書翰
- 本田親雄ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 折田三島ノ二名ヨリ大久保伊集院へ書
- 在小倉土持探訪報告
- 久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰

久光公舞楽陪覽并詠歌

將軍家在京中参内及ヒ式事ノ概略

市來ヨリ寺師へ与ル書簡

大島吉之助上申書

折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰

道嶋正亮建言

久光公ヨリ伊達宗城公へ書翰

全上

銅銭式文通融云々藩令

三月晦日ヲ以テ重野厚之丞安長防事情探訪報告

薩州御屋敷内へ廻文之写

二五一 子三月二日朝

寺町三條下ル町升屋喜右衛門表戸ニ張紙

今般

大樹公御上洛被為遊候ニ就テハ、外夷ハ勿論、格別之

御政立可被為在ト、天下ノ人心恐賀罷在候処、今以

御英断ノ御趣意モ天下江不被為觸示、兎角世上混乱之

風説ノミ承リ候処、中川宮様朝彦親王・島津久光三郎殿・松平慶永大蔵

大輔殿右三人ト全意ニテ、奇怪ノ企モ被致候哉、亦々

人心囂然トシテ惑乱致候上ハ、大害ヲ引出シ候哉モ難

計、殊更当正月中島津三郎殿中川宮様ヲ以、恐多モ

皇朝調伏ノ祈禱致懸ケ候始末柄等、尚此上如何様ノ隱

謀醸シ候哉モ難計、右等徒早々御所置被為在度、此段

天下ノ御役方江為知、此ニ認置者也、

三月

皇国銳民

二五二 久光公ヨリ容堂公へ書翰

華墨拝読仕候、如來命昨夕ハ緩々拝顔、御高論拝聴雀  
躍之至奉存候、扱自春獄兄別紙之通申來候由、御同意  
奉存候、猪太郎差遣可申候、細事ハ後刻同人ヨリ可申  
上候、御請迄早々頓首、

孟春第三

二白、別紙二通返上仕候、以上、

双松(先)「久光公」

南州賢兄

貴酬

二五三 本田親雄ヨリ大久保一蔵へ書翰

京師

鹿児島

大久保一蔵様

本田彌右衛門

要用平信  
三月四日発

尚々

一筆啓上仕候、弥御勇健被成御奉職珍重奉存候、小生  
も碌々相勤申候間、乍憚御放棄可被下候、然は先度ハ  
奈良原氏便より御一封難有拜誦仕候、乍恐

大隅守様、御任官位等被為蒙

御褒勅、何共難有次第、積年之御忠誠天下ニ顕達、誠  
ニ以至微臣等雀躍之至ニ存候、扱も当今世態実以不容  
易形勢、吉井、奈良原等より細々伝承いたし候処、群  
賢侯京師集会、大樹公ニも御上洛相成、万事其形を成  
候ても、其実ニ至る所全く難キ之形勢、御配慮万々奉  
推計候、然処長州札問一条終ニ御征伐之内策御一定之  
由にて、岸良等着当日より専ら実戦之用意、此節御軍  
法之通人数繰出ニ相成候御規定之処、相洩候壮士等諸  
要路江迫り、色々訟訴も承申事にて、当分蒸船ハ三艘  
ニ候得共、平運丸之外ハ皆小舟にて人数乗応し不申、  
和船ニいたし大小式拾艘なくてハ不相濟、大概賦いた  
し申事にて、ケ様之事機ニ及候てハ、大振之大蒸艦無之  
てハ其詮もなく、江戸岩下佐次右衛門方より京師へ掛  
合ニ相成居候と致申、二艘有之哉ニ風説、又ハ長崎へ

京師御用部屋より御注文共申事にて、分明ならず候、此地にても精々御買入之処、建言仕事ニ候、乍然第一御差繰黄白ニ相拘ル事ニ候得共、当分之処にてハ其職之事故、如何ニも御買入さへ相成候得は、御用済次第ニハ、跡ハ如何様共売払共、手段ハいくらも可有之奉存候間、当時伊地<sup>(伊地知壯之丞)</sup>壯<sup>(丞)</sup>ニも出崎中之事也、彼是御勘考御速決相成候処奉願候、○佐賀之關江石炭ハ百万斤丈御買困相成候様申出、日数を経漸く御免相成申候位中々御証文彼是六ヶ敷事、横目老人ニ波江野休右衛門・阿久根之源兵衛さし添買円方ニ被遣申候、右石炭ハ兵庫江も御困被為在度奉存候間、同所出産も追々相開ケ為申筈、無左候は、其御地より直様誰そ御遣し御手相成候様御取計可被下候、諸侯も蒸船取入之方追々相重ミ申候間、何分早く御手付候処御頼申上候、○兵庫海軍所行之人數八人取しらへ申上候処、直様今日安行丸便より出立被仰付出立為仕申候、是ハ吉井中助江い細託置申候て、麟<sup>(勝)</sup>太郎江頼入之賦御座候、長崎江は川井田市郎左衛門被差越、仁禮治平次外ニ五人鍛冶被召附、製鉄所稽古被仰付難有奉存候、右ハ少シ時後レ申候得共、長崎へハ鑄物師兩人公義之方へ頼入にて、主取い

たし候者滞崎ニ付、随分右人數相加へ申候ハ、不遠御用立可申候、大砲八十二挺も参り候、是も兵庫・大坂へ半分ハ卸方不致てハ不相濟形勢ニ成立候故、いまた台製所ニも参り不申候、大砲卸方綱具作り方最中にて御座候、外ニ集成館出来候大砲ハ、追々台も備り申候間、台場へ居へ付も試発も有之候、何事も稍成らんとする只今之処江、長州一条相発候故一緒ニ混合、万端目前之急のミニ趣申事、要路何れも心配と被伺申候、くはしくハ吉井氏なとより御聞取被下度、幸便一筆如是御座候、尚後音可奉申上候、恐惶謹言、

三月三日

本田彌右衛門

大久保一藏様

侍史

(大久保利謙氏所藏本にて校訂)

二五四 折田要蔵ヨリ大久保一藏へ書翰

(楠公社云々)

二五四

楠公社之一条、今朝以飛脚御留主居迄成行申越候間、

疾ニ被聞取候半んと奉存候、然は当日ハ雨天故、幕役延引可致と存し、様子等同候処、大隅守初何れも、出張之模様ニ御座候間、早々出会仕候次第ニ御座候、就

てハ御桶公社之一条、極内分を以て大隅守并ニ主税殿

(島津久武力)

江申入置候間、其趣口上之通書記し差上置申候間、猶又御指揮之筋も御座候は承知仕度奉存候、兎角初発より御願立之義ニ御座候間、急々御手を被附、御造立被為在度奉存候、御時節柄御入費之儀は、至極恐入奉存候得共、人望之反覆は、万金ニも難易義と奉存候、内実は、水藩旁之風評も此一義にて、深心を傾ケ罷在候由、殊更今般 御献言一件と申大事之機会と奉存候、篤と御勤考被下置、猶又帯刀様江も被仰上被下度、返ス〜も奉願上候、天下有志之輩をシテ、一時ニ報動為仕候好時勢と乍恐奉推察候、右は今日之様子奉申上度、如斯御座候、恐惶誠白、

三月四日晚

折田要蔵(年秀)

大久保一蔵様

二白、此度は幕役大ハ(天動まじでの方言)メ付にて、雨中もミの笠にて、海辺にてハ泥中ニ踏込ミ、余程ふん発と相見得申候、諸事御丁寧之御取扱ニは頓と困入申候、

二五四ノ一

大磯揚ヶ場所之儀、今朝御留主居より細々致承知、仍之町奉行大隅守殿江願込候、天保山磯台田中ニ差置候

ても無異儀旨承届申候、仍之此上は御留主居より届ケ離シにて差支無之様、都合仕置候間、是又左様思召可被下候、以上、

三月六日

折田要蔵

大久保一蔵様

(天久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二五五 折田三島ノ二名ヨリ大久保伊集院へ書

(大坂砲台事件)

爰許天保山并ニ島屋新田磯台之義、明日にて精細之図於町奉行所成熟罷成候間、是より直様御取附之旨、今日於木津川口地形見分場所、大隅守并ニ主税殿より被相達候、尤凶形之義は、是迄私取調置候凶面ニ毛厘も無異儀、殊ニ昨年来勝方にて之取調候凶形と暗合仕居候由、其外拾三ヶ所何れも砲台之居地、勝氏と同論之旨、門人佐藤與之助より細々承知仕候間、旁仕合之至りニ奉存候、附ては右天保山之義、只今不移時日御園より御請取、御造築之御願立被為在度好機会と奉存候、爰許之儀は、彌兵衛兩人にて可相成と心配仕候得共、何分諸所見分之間ニ無透間、一方より已ニ取掛り申候勢ニ御座候間、夫を押留候も不罷成仕合ニ御座候、

一 松平肥後守様近々御下坂之由、極内分承知仕申候、尤  
爰許地形其外陸地之城堡野戦之次第、神保修理・小室  
金吾并二秋月等江も細々示談ニ及候処、深嘆賞罷在候  
故、右様之訳より肥後守様御下坂御進申上、爰許実地  
御巡察被為在度との事ニ相聞得申候、殊ニ今晚右小室  
義急ニ上京仕申候、

一 今朝未明より木津川口地形見分之上、目標相立、晚付  
相仕舞、随て明日より泉州堺辺巡察可罷成と奉存候、  
右は爰許之様子御問合申上度、如斯御座候、以上、

三月六日

大久保一蔵様 (利通)

伊集院平治様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

折田 (年秀) 要蔵

三島彌兵衛 (通庸)

二五六 在小倉土持探訪報告

防長之動静旁無油断追々探索仕候処、当分差て相爰承  
得候儀無之、併当時之政事ニ付ては、譜代恩顧之藩屏  
屏ハ土ノ等承服不致、公武御合体之道理解得失考、段々  
誤ラシク致諫言等族も有之由候得共、畢竟執政職之益田右衛門  
介事、権柄掌諸家之浪士等近寄、暴論ニ募、是迄異外

之儀共到来、夫故人心紛乱之形ニも風評有之、就中先  
達て蒸氣船焼失本藩ノ汽船燒一件ニ付ては、物頭野々村勤  
九郎、奇兵隊浪士組ト致口論候儀共有之、夫ニ曳続互  
之異説ヲ立論議差起一起不致、然ニ諸士共嘶合候儀共  
内々相洩候ては既諸侯ニ離れ、防長孤立となり微勢之  
為体何分慷慨令歎息、仮令山口要害之城郭たり共、方  
今幕府江楯を突籠城難對、希は平均之道相開、策略致  
内評者も間々有之形ニ候得共、脱体浪士共諸事異氣強  
く勢ひニ仕掛不相劣、諸士末々ニ至迄、異風簸暴之挙  
動等有之候得共、内心ニは御主人様并右衛門介等江、  
後指を差し候者も有之候由、然は大膳大夫様御父子御  
間柄、御趣意之程何様候欤、巷説区々之形ニて、突留  
慥成儀分明不致、右次第段々承合候処、兼て無疑念味  
方ニ取組候手付之者江、密々相計、去九月末頃大膳大  
夫様御直筆仰出写手ニ入申候間、已後御見合之端ニも  
(付箋)罷成可申哉奉存、別冊写相添此段申上候、以上、  
(別冊調フベシ)

子

三月八日

大久保一蔵殿

土持平八幸 綱

長州下之関詰  
豊前小倉御船  
唐物締横目

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

二五七 久光公ヨリ伊達宗城公へ御書翰

拝読仕候、愈御安全奉賀候、夜前は病夫參殿候処差たる尽力も無之候処、御褒言承知汗顔之仕合奉存候、失敬之挙動も不少後悔至極ニ御座候、容堂云々委細致承知候、賢慮は如何不奉存候得共、於愚意は方今一藩ニても帰国いたし候ては、一統之人心ニ關係、不容易儀欵と奉存候、可成は貴君御引止メ之御策略は無之候哉、懸念至極御座候、一藏・猪太郎之内は、委細承知致候、早速差出可申候、謹言、

中春初九

双松拜久光公

弄鐮明公

(伊達家宇和島事務所蔵本にて校訂)

二五八 久光公舞楽陪覽并詠歌

三月九日

朝廷ハ、將軍家及ヒ在京衆諸侯ヲ召サレ、舞楽興行セラレ、  
国父公モ同シク召サレタリ、此時 御詠  
征夷大將軍、右ノオホイマウチキミ内ニ參リ給ヒケル日、召レテ參リケルニ、南殿ノ前ニテ、舞楽

ヲ奏シサセ給ヒケル折シモ、御前ノ桜盛リナリケレハ、

舞人の袖ふきかへす春風に御階の華も香に匂ひつゝ、

此日

天氣殊ニ麗シク、官方及ヒ公卿大小候參

内酒饌ヲ賜ヒ、奏楽正雅実ニ鳳鳥来儀ノ思ヒヲナシタ

リト云フ、

二五九 將軍家在京中參内及ヒ式事ノ概略

三月七日

今五ツ時御供揃ニテ施薬院へ被為人、夫ヨリ御參

内、

三月九日

今六ツ時御供揃ニテ施薬院へ被為人、夫ヨリ御參

内、此日舞楽御拜覽諸大名惣御供參

内、島津少将国父モ同列、

三月十三日

今度御推任叙被為濟候、為御祝義紀区始在京諸大名  
登城、午上刻御白書院替席、御黒書院出御、一人ツ、  
御太刀目錄持參、御礼申上、



三月十四日

御推任叙被為濟候、為御勸

勅使登城、

勅使

坊城大納言克俊

飛鳥井中納言典雅

野宮中納言功定

午上刻大広間へ出御、御対顔〔志〕〔大樹參内〕

禁裏ヨリ 公方様へ

御太刀 一腰

黄金 三枚

親王ヨリ 公方様へ

御太刀 一腰

黄金 一枚

准后ヨリ 公方様へ

御太刀 一腰

黄金 一枚

別段

禁裡ヨリ 公方様へ

御直衣

御織物衣

准后ヨリ 公方様へ

二種一荷

右順々御頂戴畢テ入御、

三月廿四日

御刀〔志〕  
武藏國兼權  
代金五拾枚

右御座ノ間替席於御黒書院御目見拜領之、

同日四時御供揃ニテ施薬院ニ被為入、夫ヨリ御參

内、

三月廿八日

九ツ時御供揃ニテ二條殿へ被為成御用談、

三月廿九日

九ツ時御供揃ニテ施薬院へ被為入、夫ヨリ御參

内、且御窺事有之、

以上

二六〇 市來ヨリ寺師へ与ル書翰

二月十一日之御書状體ニ京師へ相届、取ル手モ早ク拜

見仕候、母上様御初御手前様其外英之丞等〔志〕  
〔市來長男〕ニモ、至極

之玄機之由、大慶此事ニ奉存候、殊ニ今日永吉主殿〔志〕  
〔島津〕

ヨリ伝承仕候ニ、英之丞事ハ永吉へ調練見分ニ差越候

由、旁樂ニ相成候半ト想像仕候、私ニモ至極之元氣、去月廿一日(朱)〔不修〕帶刀殿下坂之御用有之、罷下候様被仰付、同日一緒ニ下坂仕居、節句過ハ広島之様出掛候賦御座候処、亦々無抛御用有之、六日ヨリ急々上京、七日ニ京都へ出、今日迄モ滞在罷在申候、此度ハ初之見込通ヨリ御用向数々被仰付、都テ經濟一件ニテ、年来之宿志モ別テ相運ヒ、銅モ先日迄ニ三拾八万斤余取入、近々船ヨリ積出シ之筈ニ御座候、又外ニモ拾万斤程有之、近日中ニ取入之手筈モ仕置候、御金筋モ六万余御渡シ相成、何モ十分ニ相運置申候、加之南部森岡ト銅其外大豆交易之儀有之、昨日彼方へ曳合モ相濟、兩日中内田仲之助殿一緒ニ御約定相成筈御座候、右外長崎ニテ大砲御注文之儀、此涯八千門程早々注文イタシ候様被仰付、ゲ(朱)〔ミニール統〕ヘールモ式千丁程被仰付、誠ニ御盛之事ニ御座候、因テ一日モ早々長崎へ差越、右等之事取計帰府之含御座候へトモ、何分南部其他之御用向不相運候テハ、出足出来兼、御家老衆ヨリモ、右之尾ヲ取り退京可致旨被仰聞、甚心セキ罷在申候、併当月中ニハ是非退京、広島之様出張、十五日計モ滞在、夫ヨリ丁度雲州へ參、夫ヨリ長州へ出、十五日程モ罷在候テ帰国可

仕候、イツレニモ五月中旬ニ可相成哉、左候テ大久保(朱)〔不修〕

モ当月末ニハ帰国之筈候ユへ、御国へ被罷居候内ニ、私ニモ是非帰国御金手当之儀共治定、又々出崎・上坂

モ可被仰付哉、殊ニ銅一条私不罷居候ハト内分被申聞、当秋ハ上坂之都合ト奉存、右外申上度趣ハ、如山海ニ

有之候得共、只今飛脚立承候間、早々如此御座候、時分柄罷成候間、折角御(保)養專一ニ奉存候、恐々謹言、

三月九日

市來正右衛門(朱)〔公上〕

寺師次右衛門様

市來英之丞殿

參

## 二六一 大島吉之助上申書

道之嶋砂糖御買円之御趣法ニ付てハ、甚以苛酷之詛ニて、五倍之御商法ニ御座候処、近来弥増重歛之仕向成立、人民困苦ニ迫候儀ニ御座候へハ、若哉異人共手を付候様之事も有之候ハ、格外慈計之巧を以愚民を惑はし候てハ、忽チ違背仕候時機罷成候ハ、案中之事と奉存候、右ニ付てハ悉ク被相除候儀ハ、當時柄不被為濟儀ニ候得共、民心至極相厭ひ候廉丈ハ御有恕之道相立候

ハ、人心相結候場ニも罷成、一涯人氣進立可申、左候へハ第一御所帯根源之御産物殖増候勢罷成、如何計之御益筋欵と奉存候付、左条之通取調申候間、尚又御吟味被仰付度儀と奉存候、

一 嶋代官を初詰役人柄細々御取調被仰付度、只今にてハ一同御心付と而已相心得居候て、自尽之取計いたし候付、詰役所置振之厚薄御吟味被為在度儀と奉存候、如何程心を尽し取扱候者も、何様私曲を構候とも、賞罰之御沙汰無之故、尚更怠惰罷成候間、見聞役丈ヶハ一年交代にて詰役中精粗之次第、御支配頭取申上候様有御座度儀と奉存候、尤代官之儀は御勝手方御用人江相付申出候様罷成候ハ、相互ニ励合、不正之手数有之間敷儀と奉存候、見聞役被下方等之儀は、別段相重候訳ニも罷成不申、三年之割を以兩人江被成下度儀と奉存候、いつれ詰役之依善悪一嶋之人氣相拘候間、第一人柄御吟味之上、勤場之精粗御取しらへ被仰付候て、賞罰有御座度儀と奉存候、

一 御商法ニ付ては、御米之方第一御益相少、嶋中にてハ企望此一種ニ御座候処、砂糖一斤ニ付三合之代米被成下候へハ、決て御損失之訳ニ無御座、御品物よりハ御

益少しと申迄ニ御座候間、御注文之品々代砂糖差引、正余計之者江は、徳之島・沖永良部嶋之儀ハ、三合代米被成下候得共、大嶋ニ限り正余計ハ全不被成下御定式と申分、三合代米被下候間、外嶋同様被仰付度儀と奉存候、左候へハ出来砂糖弥増可申儀ニ御座候、全体大嶋之儀は出来高多く御座候故、殖増も過分之事ニ御座候、外小嶋之儀ハ何様相殖候ても程之相知れ候事ニ候へハ、大嶋殖増候処肝要之事ニ候間、外嶋同様三合代米正余計之者江被成下候ハ、一同競立尚又出精仕可申儀と奉存候、

一 御品物之儀は、格外之御利益罷成候上、依嶋々茶・煙草・木綿類之品々出斤と相唱へ、最初より一斤之目方相抜候て、又々為申受候間、二重之代砂糖差出候事ニ御座候、茶一斤式百五拾目之ものを式百目にて相払、五拾目丈引残相渡候ニ付、一同之氣受不宜、右様之手数を以人心を疑迷為致候ては、御商法之筋相立不申、嶋人共ニハ纒之間違さへ刑ヲ当て候間、右抜斤之手数は屹と被差止度儀と奉存候、茶壹俵之前小掛にて相渡候得は、必欠斤相立候事ニ御座候得共、右ハ作人之得心も宜敷可有御座候間、頭より目方引抜相渡候ては、人

心不安賦ニ御座候、

一 木綿之儀は、百六拾目ニ付代砂糖三拾斤ニテ御座候処、  
是以斤目引抜候故、全体困窮之嶋人共申受不相調、暖  
地とハ乍申も、寒中ニも芭蕉衣裳等ニテ凍居候者多く、  
実ニ不便之為体ニ御座候間、代砂糖拾斤丈ハ相減候て、  
式拾斤ニ被成下候ハ、如何程軟難有かり可申儀と奉  
存候、正余計ニ三合代米被成下、且木綿代被相減候得  
は、先飢寒之苦を御救被下候場ニ相当、一同奉雀踊候  
儀ニ御座候、嶋人之常食迎ハ、都て唐芋ニテ御座候得  
共、老幼或ハ病者ニいたりてハ、保養之儀不相調不被  
忍次第御座候付、何卒御仁恕被為在候儀ト奉存候、  
一 砂糖車金輪之儀は、過当之直成ニ御座候処、作人共申  
受不相調候て、金輪不相用者多く御座候間、是丈ハ輕  
目之代砂糖被成下度儀ニ御座候、木車ニテ過分之正味  
徒ニ相捨り、作人之迷惑ハ勿論、御国益空敷捨候場ニ  
相成候間、一同金輪相用ひ候ハ、却て御益筋ニも罷  
成、乍双方可宜敷儀と奉存候付、何卒直成被相下度儀  
ニ御座候、

一 砂糖樽之儀ハ、掛目拾六斤と被相定候処、少し重目ニ  
候得は、直様取替させ余計之隙を費候上、至極難儀仕

候事ニ御座候、輕目のものハ矢張拾六斤ニテ相通し候  
得共、右ハ作人之損失計ニテ、御払口ニも全御益不相  
成、只買手之利得相成候事ニ御座候間、拾六斤を本ニ  
いたし、輕キハ拾三斤より、重キハ拾八斤迄、御用捨  
被成下度、風袋何斤、正味何斤と相記候付、決て間違  
ハ無之事ニ御座候間、其通被仰付度儀と奉存候、左候  
ハ、作人共格別難有可奉存候、尤樽仕調ニ付てハ、余計  
之手数相掛、難渋仕候付、御有恕被為在度儀と奉存候、  
右之通嶋人共苦情之廉々被為相省、人氣進立候様被仰  
付度奉存候、以上、

子三月

大嶋吉之助

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

## 二六二 折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰

大久保一蔵殿

折田要蔵

尚々上封殿文字之義御寛免可被下、奉願上候、  
安行丸滯船ニ就、御供目附談合之上、夜白之警衛、且  
又乗頭下坂迄は、当安治川口江碇泊罷在候趣、乗附士  
官態々召寄相達置申候処、今朝早天兵庫江廻船之由ニ  
御座候、尤御供目附方江引合候処、是以て何分之届  
不承旨致承知、旁以不都合之次第、仍之内分御届ケ

申上置候、以上、

子三月十五日

大久保一蔵様

折田要蔵

〔別紙〕

其後御堅勝被成御座、大慶至極奉賀候、随て私ニも無

異精務御安慮被下度奉願上候、先達てより爰許形行粗

奉申上候通り、此度ハ幕議も随分決断神速ニ罷成候哉

ニ奉存候、三島上京ニ付、御聞取被下置筈と奉存候、

一大島も上京誠ニ以て難有次第、爰許にて寛々出會、久

々振ニ胸懐ヲ潔ク仕申候、天下之大幸此事と奉存候、

何分ニも時情細々被仰聞置度奉願上候、大略之始末は

申入置候得共、猶又可然様偏ニ奉願上候、

一近々御下国之由、嚙御取込之段奉推察候、何れ此地ニ

て奉拜顔度奉待上候、右様之御都合ニも可宜と奉存候、

安行丸召留置候處、何とも氣之毒千萬ニ奉存候、乍去当

朝猶又引返之様申参り候間、今日中ニハ到着可仕も難

計奉存候得共、何分不行届千萬ニ御座候、御推憐可被

下奉願上候、士官纒式人乗附罷在申候間、何とも致方

無御座候次第、幸彦助上京之事ニ御座候間、兎角士官

五六人は乗附候様、御直達被下度奉願上候、元来当人

事士官多人數乗附候事ヲ好ミ不申訳にて、斯之通り之

次第二御座候間、分けて被仰渡度奉願上候、右は極内

分を以私より奉願上候、士官小人数にて八万々一之折、

頓と致方無之義ニ奉存候、尤御供目附とも熟談之後、

内々奉願上候、以上、

一右安行丸船中御規律之義も、平連丸同様御達シ被下度、

左様無之候てハ、彼是人心偏倚仕可申と奉存候、元来

船中御規律相定り不申候故、船中一同妄ニ上陸仕、旁

相達し候事も取聞不申次第、誠ニ困入申候、何分於其

御地乘頭江御達し罷成候様、偏ニ奉願上候、

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

### 二六三 道嶋正亮建言

此節於京都、御書取並帶刀殿ヨリ被仰渡候當時天下

国家ノ大計急務、被 聞召度候間、存慮之趣銘々封書

ヲ以差上候趣、被仰出候由、愚考之次第恐入忌諱ニ

触レ候儀モ可有之候得共、不敬不遜ノ罪ハ御用捨被

仰下、御見合ノ端モ相成候ハ、別テ難有奉存候、

當時天下国家ノ大計急務ニ御座候得ハ、醜夷攘斥之御

儀ニテ可有御座候、此事ハ一昨年来訳テ

御献白モ被為在、又仰出モ度々御座候、今更諸士一統

ヨリ可被 聞召程之事有御座マシク、倍攘夷ノ任可被

為尽儀、御当然ノ儀ト奉存候得共、防禦ノ御手当而已、殊ニ御領國中ニオイテ、交易御禁制ノ命令無之、左候得ハ攘夷ノ 勅命突立カタク、下々ニテモ狐疑ヲ生スルモノ多ク御座候、願クハ彼ヲ攘服可被遊程ノ御深計被施度候、一昨年来諸色高料ノ儀モ、稍彼カ術中ニ陥リ候儀ト深ク歎息仕候、攘夷ノ道迄モ和戦ノ際ニテモ有之マシク、御廟算被為在候テ、攘夷ノ道ハ相立可申候、又此節ノ御書取ニ、攝海ノ要湊守備嚴重相調候儀、方今第一ノ急務ニヨリ、幕府へ御建言被成置候儀、是ハ御尤ノ儀ニ御座候、此事ハ疾クニ先年ヨリ幕府ノ命令有之儀伝承仕候得共、于今至リ守備嚴重不相調仕候、幕府モ日本皇國ノタメ、真実信義ヲ建ル事不能、昇平ノ化ニ浴シ、明日ノ危急ヲ不慮、一時偷安ノ易キニ身ヲ浴没シ、等閑ニ打過シ過チニ御座候間、此節勉強シテ被命候ハ、暫時ニ相調可申候、中古秀吉・家康等ノ時代ヲ御覽可被遊、我居城タリトイヘトモ、天下ヲ征スル王地ニ御座候得ハ、イツレモ國役ト名付、諸侯へ命シ城築イタシ候儀、其時分ハ數百年來兵火ニ苦シミシ時ニサへ、誰カ肯テ間然スルモノモ無之、夫程將軍ノ命令重ク無御座候ハ、天下ヲ統御スル事ハ不能

モノニ可有御座候、攝海ノ要港ハ京師守護第一ノ場所ニ御座候間、國役ヲ以賦付モ、十分ノ守備暫時ニ相調可申候、海岸計ニテハ別テ危ク可有御座候間、京都迄ノ要地へ大砲等御備付可被遊儀、第一ト奉存候、殊ニ御書取ノ内ニ、一昨年来御持論被仰出候通、十萬ノ御武備ヲ御設ケ、万古不易ノ征夷ヲ御行ヒ、神州ノ安危ニ致關係候御大事ノ時ニ当リ、數年ノ叡慮ニ奉基、大策御見居候テ、天下後世迄モ致貫徹候処ハ、幾重ニモ御趣意相替儀無之トノ仰出、実ニ御尤ニ奉存候、最早一兩年モ相過候間、大方武備モ相備候儀ニ可有御座候、得ト御糾問可被遊、海岸御手当計ニテモ無之、第一武備ノ根本ハ金銀・米穀ニテ可有御座候、諸御藏々へ何程金銀・米穀御蓄積御座候哉、論語ニ食ヲ足シ兵ヲ足ス、民是ヲ信スト御座候得ハ、今日ノ大計急務ハ、食ヲ足シ兵ヲ足スヨリ大ナルハ無御座儀ト奉存候、今大兵五六千一萬位モ攝州・伏見ノ辺へ御召出相成候テ、如何計ノ御見賦ニ可有御座候哉、兵ヲ用ルノ法千里ニ糧ヲ饋ル、内外ノ費日ニ千金ヲ費スト御座候、司馬法ニモ國大ナリトイヘトモ、戦ヲ好バ必ス其國亡ブ、孫子ニモ深ク是ヲ禁メ、兵ハ國ノ大事、死

生ノ地存亡ノ道ト御座候、仮ニモ戦ヲ御好可被遊儀ニテハ無御座候、兎角根ヲ堅クシテ御勤幸不被遊ハ、国家維持ノ任ハ難被尽、万一国家衰微イタシ、其節ニ臨大兵ヲ動シ玉フニ至リテハ、迎モ御出馬等被為在候儀モ相調申間敷、夫故兵ハ国ノ大事、死生ノ地存亡ノ道ト禁メタルニテ可有御座候、能々御思推可被遊儀專要ト奉存候、

甲子三月十五日草稿

二六四 久光公ヨリ伊達宗城公へ書翰

春暖聊相催候処、先以弥御清安可被成御座奉大賀候、然は今日は

大樹公御参 内、御都合能被為濟候御事と恐悦御儀奉存候、扱昨日御相談之二條御集会、愈明日相整候哉、刻限はいつ比よりよろしく御座候哉御伺申上候、尤明日惣出仕有之趣も承申候得共、貴君ニは定て表通之義ニは御出無之筈と奉存候、乍併為念此段奉得貴意候、頓首、

孟春廿一

再白、僕ニも供奉相願置候得共、夜前より腰脚痛弥

甚ク、迎も相勤り候丈ニ無御座、乍残念御断申上候、定て貴君ニは御供奉之筈御苦勞千万奉存候、禁中ノ御都合何分奉承知度奉希候、以上、

弄鎌賢良

三島拜久光公

要用

(伊達家字和島事務所蔵本にて校訂)

二六五 全上

尚々早速御答可申上候処、少々内用取込遅延罷成候、毎度乱筆御推読奉願候、以上、

貴翰拝読仕候、如來論適宜之候弥御清安奉大賀候、扱幕政参予御免願之儀ハ、先日帯刀ヲ以テ一橋へ申込候処、尚又評議可有之トノ事、其後何之返答モ無之候、貴君ニハ御登城ニテ御願候処、矢張是迄通トノ由、僕ニハ右次第故願達カト存居候得共、未安心難致御座候、一一橋素願通被 仰出候由、且守護モ兩人ニ相成、併大老ニハ容易ニ難被出候儀ハ、当然之事御座候、人心ヲ屈縮云々実ニ至当之御論御座候、右様京地御警衛段々被命候ニ付テハ、余計之者滞京直ニ無益ト申者ニ御座候間、弥御暇申上候含ニ御座候、未日限等相極メ候事

二ハ無御座候、

一介石一条尚明日モ誰ソ差出候テ委細可申上候、  
一御端書有馬京着云々、未何之形勢モ承不申候、  
右御答迄如此御座候、頓首、

暮春念六

双松拜

對翠明公

貴報

## 二六六 銅錢式文通融云々藩令

今般銅錢式文通融申渡候処、当日ヨリ確ト銅錢無多事罷成、諸人別テ令難渋候由、当分各国物価沸騰成立候世体ニハ候得共、御当国之儀ハ殊更ニ高直相成、諸色安売相成候様トノ趣ハ、從

御先代様モ分テ被仰出、畢竟人民生計致シ安候様ニトノ御仁恵ニテ、難有次第ニ候条、其段ハ度々申渡諸人モ承知之通ニ候、然ハ是迄之通四文通融候テハ、第一沸騰沙汰ニ拘候訳有之、御物御蔵々ハ勿論、諸人損失ニ差見得候得共大小不為厭、断然シテ式文通融之御所置相成候処、姦商共利慾ニ迷ヒ銅錢過ニ買円、密ニ

地方ニ差出シ、又ハ囲置候聞得モ在之、自然御領国中銅錢及私底、諸人致難儀ハ必然之事ニ候処、右次第一統之苦難ヲモ不弁、人情有間敷心底姦曲之至ニ候、依之向後銅錢囲置、他邦へ拔出候儀、屹ト差留候、尤金銀直成相替候杯ト色々造言ヲ起シ、市中取引混雜致候儀モ追々相聞得、是以御国政ヲ紊候謀ニテ、別テ不屈之至候条、此上造言起シ候者ハ勿論、銅錢囲置又ハ拔出候者於有之ハ、見聞ヲモ掛置候付、夫々糾方之可迷惑候、左候テ拔銭見当形行申出候者、都テ其者へ可被成下候、此旨町中へ分テ可申渡旨、町奉行ニ申渡、家来末々迄モ主人等ヨリ可申聞旨、奥表御勝手方へ致通達、諸郷・私領へモ不洩様早々可申渡候、

子三月廿七日

丹波  
摂津

## 二六七 三月晦日ヲ以テ重野厚之丞安長防事情

探訪報告

長藩

一益田山口県彈正、当分私領須佐石州境一時々差越シ、福原越尾道後山口ヨリ三田尻刃用向專權之由、

但彈正并長府家老三好内藏病氣申立、引入候様去月



末方ヨリ風説有之候得共、右ハ虚説之由ニ候、

一三好内蔵長府家老之執柄ニテ、益田弾正一味之者之由、

尤モ右内蔵本藩(歌ヲ云フ)ヨリ養子ニ来リ候モノニテ、年輩

貳拾三四歳之由、

一兵士隊名目種々取立、先相知レ候分左之通、

大組隊(朱)下關江相詰

騎馬隊(朱)自見以上ノ士ヲ云フ

大城隊

奇兵隊(朱)自分アイラ并下関江相詰

先鋒隊

先德隊

八幡隊

狙撃隊

撃劍隊(朱)宮市本藩宮内ニ屯ス

神威隊(朱)百人計同上

力士隊(朱)八拾人計同上

遊撃隊(朱)五拾人計

金剛隊(朱)三百人計

市勇隊(朱)宮市町人百人計

郷勇隊(朱)五拾人計

膺懲隊(朱)百五拾人計

萩野隊(朱)宮市国分寺ニ罷在、守水弥右衛門師範又、凡千人討義團兵ト唱フ

報国団(朱)百五拾人数ノ義ハ随方ヨリ相滅有之

右様之名目ニテ、所々江標札掛ケ置致修練候由、右之内報国団ト申スハ、町人富家之輩無給金ニテ相勤メ候故、格位ハ士分之取扱ニ候由、

一先德隊ノ内五十人程先日致亡命候由、仔細不相分候、此節京師ヨリ吉川并家老等御召ニ付、諸大身分ノ者悉ク辞退申出、罷登度ト申者無之義ヲ憤リ、致亡命候トノ風聞ニ候、

一神槍隊(朱)神威隊トハ社人、金剛隊トハ僧侶并修験道其内一

向宗多シ、義勇隊ハ上關詰頭取城亀之介ト申者ノ由ヲ

長安寺カ話(朱)長安寺トハ熊本ノ、僧後ニ詳ナリ

一三田尻百間堤固メ 毛利内匠(朱)二万三千石余長州藩八家ノ内ナリ

一同所堀内固メ 村上源五右衛門(朱)四千五百石余船奉行職

一当時下關詰メ 六戸美濃(朱)人数千五百人計リ

一中山侍従ハ、益田弾正私領地へ潜居、表向ハ死去ノ吹

聴、尤同人儀大和乱逃帰候後、頭成不宜故トノ取沙汰

ニ候、

一大和一揆ニ致落命候人数、長州人数ニテ五拾人位ト申

ス事ニ候、

一兵士ノ数確トハ不相分候得共、大凡三万ヨリ四万モ可有之トノ風聞ニ候、尤諸浪士輩并農商兵等ニ惣テ相混シ、当分隊伍ニ取仕立相成居候分ヲ致臆算候、大数ニ候半ト存候、

此度戦争後下關ニテノ風聞ニハ、凡疋万人ト申事ニ候得共、其後農商兵等追々仕立相成り候ニ付、殖居候半ト存候、

一兵卒ノ給分、奇兵隊ナトハ一ヶ月壹兩三分位ニ候処、

近日減少壹兩一步ニ相成候由、賄方ハ以前之通ニ候由、

一長藩ハ、譜第ノ諸士株ハ格別余計ニハ無之候得共、大

身分ノ者他藩ヨリ数多ク候故、手人数ハ多ク有之由倉小

藩士某力話、○手人数トハ、大身家ノ家来ヲ云フナラン、

一女兵取仕立ト唱へ、所々ニ於テ婦人共長刀ノ稽古致シ

居候ヲ見及候ト申者モ有之候、此等ノ事件ハ畢竟虚声

ヲ張候仕方ナラントノ風評ニ候、

一農兵仕立方之儀ハ、年齢拾四五歳以上依望武術ノ稽古

為致、兵隊ハ召入レ給分ヲ与へ候由、年貢ハ精力限り

耕作イタシ、作得ニ応シ心次第二年貢為差出、定数不

相立仕向之由田島ハ当分迄ハ未タ荒撫之様子トテハ無、隨分無相委耕作出来候由ニ相見得候、

一国中所々ニ借シ付銀ノ会所有之、先々ヨリノ仕来之通

今以借付相成、下關・室積・上關三箇所ニ右会所取立、四

朱位ノ利息ニテ全ク商売致繁昌候様トノ主意ニ候由、

先々ハ室積・上關両所ニ大会所有之候処、昨夏戦争後

下關市中金錢(銀力)不通融可有之トテ、新ニ会所取立、其折

十萬金ヲ差分候由ナリ、

但豪商共へ献金申付候風分有之候得共、本文一条ヲ

以推シ謀ルニ、可為虚説カ、尤下關ハ富家多ク罷

居候場所ニ候処、右様之事ハ当所是迄不相聞候ニ

付テハ、国中モ同様ニ可有之欵ト被察候、

一大島郡六万石、全島塩ノ利莫大ノ場所ニテ、小松ト申

所ニ、矢田部豪商ノ名ナラント云者、一人ニテ千町余ノ塩浜致

所持居候由、長州ニテ豪富三人ノ内ニ候由國中一統塩ノ利推テ可知、

一山口之地形、横一里半或ハ弍里、流ハ五里モ可有之、

平坦ニテ、三面要害險固ニテ、此度新ニ城郭築造ニ取

掛、当分地形拵丈ケ相濟候由、毎日人夫多人数造作最

中ニテ好キ見物之由、

一右新城ハ、台場広大ナル構ニテ、最早成就相成、大砲

十六挺程据へ付ニ相成候由、

一大砲鑄造場、小郡ノ内三丁一ヶ所水車仕掛ニテ、頗ル

広大ノ構、今一ヶ所ハ三田尻ノ内ケイコウ町ト云フ所ニアリ、

一是迄ハ寺鐘之類ニハ手ヲ不掛候処、近日初テ大小鐘ヲモ鑄崩、大砲致製造候由、

一山口ハ入口ノ關門小郡口ニ一ヶ所、此方ハ下關往来筋ニテ格別嚴重ニ無之、宮市口ノ関門ニヶ所、外門ハ石

州津和野往来筋ニテ、随分通行差許候得共、内門一ヶ所ハ至極嚴重ニテ、旅人出入決テ不相許由、

一小郡ノ医師某、同所一手ノ防禦ハ一人ニテ可引受旨申出、同勢三百人程モ可有之トノ風聞、

但ケ様ノ風説ハ、長州人下評ニ候、兎角ニ虚声ヲ張候様子ニ被相窺候得共、承得候假記シ置申候、

一國中旅人往来別テ六ヶ敷、行脚僧体ノモノマテモ不入付、慥ナル切手致所持候出家ハ、宰領人差添、用済次第送り出シ候由、

但當国ノ商人ハ關門ニテ改メ、住所切手無相違候得

ハ、山口迄モ往来商用差免シ、自由ニ罷通候由、

一右通往来ヲ致嚴重候義ハ、入り込ヲ防クノミナラス、脱走人ヲ禦之主意モ有之、昨年澤主水正脱走ノ<sup>(官憲、七瀬の一人)</sup>砌<sup>野暴動</sup>ハ<sup>ノ為メ、平野次郎等ト長州ヲ脱走シ、敗走ノ後又長州ニ走レリ</sup>ヨリ嚴令触出シ相成候由、

一諸国へ問者差出シ、尤モ出身体ノ者ヲ以、諸所へ入レ込候哉ノ聞へニ候、萩府ノ菩提寺黄蘗宗兼テ三拾人余

モ僧徒罷居候処、当分ハ僅三人ニ相減シ、其内ニハ他

一 國産ノ者ハ差返シ候者モ為有之筈候得共、国生ノ僧ハ間諜ニ出候者モ多ク有之候半、尤右問者差出候事ハ、

一 昨年頃ヨリ相始候由、

一 長州人ハ小倉城下ヲ往来致候モノ毎日五拾人程不断罷通候、其内帯刀ノ者多クハ長崎用向ト申断、凡下体ノモノハ宰府又ハ清正廟<sup>熊本清正公ヲ云フ</sup>參詣ナト、唱へ、婦人召列候者多ク有之、惣テ国元切手致所持候由也、

但本文通婦人召連候凡下体ノモノ、別テ疑ハ敷ト小倉寺社奉行上條八兵衛カ話ナリ、尤凡下体ノ者一

刀帯候モノ尤モ疑フヘキ事ニテ、此輩ニ限り必ス婦人召列候由、

一 昨年於萩浪士五人ニテ、長藩人二人ヲ殺害イタシ、右事ノ起リハ、藩士兩人ノモノ國中暴論ニ組シ候儀ヲ、

不可然ト心付、追々諸人へモ説諭致候処、浪士共洩レ聞キ議論ノ席ニ於テ切掛候処、兩人モ抜キ合セ双方不

一 残死亡ノ由、姓名不承得候得共、実説ト申ス事ニ候、

一 岩國一藩ハ本家ト異論タル事無疑ト取沙汰候、尤兼テ

本藩ヨリノ会釈振リ無礼ヲ極メ、吉川本藩へ差越候節、本門ヨリ出入ノ処ヲ、イツモ門普請ト相断リ、クヰリ門ヨリ為致出入候等ノ類ニテモ、不熟ノ情態被察候ト申事二候、

但当分ノ吉川ハ器量ヨロシトノ評判ナリ、

一長府藩主毛利淡路守ハ、本藩愛遇無ノ様ニテ、尤年内ヨリ頗ル悔心有之哉ニテ、内実ハ本家ト不致合体哉ノ向候得共、前条相記候通、三好内蔵執柄ニテ、本藩へ混ト引合居候ニ付、不得止時宜ト相見得候、

一清末藩毛利謙岐守ハ騎馬ノ達人ニテ、悍馬ヲ能ク乘リ廻シ候由、肥後ノ伯楽甚右衛門ト申者ノ話ナリ、讃岐守ハ本家ノ氣ニ入ニテ任用ヲ得候由、

一山口城ハ末々築城中ニテ候得共、大身分ノ者共追々萩ヨリ曳移リ、尤大膳大夫御父子モ木屋掛ケ様ノ御住居ニ候由、

但三條卿ハ日上ト申所、壬生卿(基修)・四條卿(隆請)・五條卿(三條西季知カ)・

錦小路卿ハ湯田町ト申ス処ニ寓居、イツレモ山口

郭内ニテ、日上ハ宮市ノ方湯田町ヨリ一里半モ相隔居候由、

一薩州ヨリ何方へ兵ヲ指向ケ候半モ難計トテ、全国上下

昼夜戒心罷在候由ナリ蒸氣船燒キ打ニ付テ事ナリ(原註)

一田之浦へ時々長州人押渡リ、上陸自由ニ致徘徊候、右(北九州市小倉区)

ハ薩州人数同所へ到着、小倉番兵之内ニ紛レ居候トノ説有之候由、

一小倉城下海岸ニケ所へ台場新築ニ取掛居候処、コレモ

薩州ト申合セ造築相成事ト長州人致取沙汰候也本藩小倉ト俱ニスル等ノ事尤モアルコトナシ、然ルニ如斯ノ風説アルハ、防長ノ事情探訪ノ為メ小倉ニ出張シ、自然彼藩吏ニ親ミタルモアリ、又彼ノ藩目前長州ノ大敵ヲ置キ、後ニハ福岡・久留米等ノ如キ長州左袒ノ藩々アルカ故、恐懼ノ余リ本藩ヲ後稱トシタルノ情アリ、從テ種々ノ訛言モ起リタルモノナリ、

一奇兵隊ノ者共大里へ押渡リ、同所台場詰ノ久留米番兵ト一手ニ相成、三百人余モ人数有之候ハ、小倉城ハ容易ク攻禿スヘシト申合候由、尤久留米番兵ハ凡百五拾人モ詰居候由久留米藩モ強チニ長州ト談合セシニ非ラサルヘシ、元米大里ニ船困地アリテ警備兵ヲ出シタリト云、

一奇兵隊ノ議論ハ惣テ暴発ヲ主トシ、動々モスレハ事ヲ急クノ様子ニ候得共、本藩人ハ先ツ守備ヲ嚴ニシ、妄発ヲ禁シ、内外ノ敵防禦ノ用意最中ト被伺候、

一三田尻ハ諸方ノ浪士雜居、肥・薩井土州熊本・高知ノモ

ノ余多入込、彦山修験道ノ輩モ多人数罷居候由、先達テ京師ノ人七瀬供者間者ト相疑ヒ、右浪士ノ手ニテ致殺害候由也、

一下關辺ニ罷居候奇兵隊モ、近頃ハ暴行妄殺等先ツ相止

ミ候由癸亥ノ冬頃マテハ上・中・下關ノ三所其外ニテモ他國、人入リ来ルトキハ、男女老若ヲ問ハス暴殺セシト云フ

一 先日下ノ關へ土州藩人ノ荷札付ノ明キ荷物、四拾許モ船ヨリ運ヒ候由、

一 当分京師へ潜居候長州人四百人程モ可有之トノ趣、日下元瑞久坂ノ誤・高杉新作晋作ノ誤ナトモ差越居候由、

一 長崎へ差出候探索人ハ、専夷船渡来ノ様子探索致候由、  
當時米・英・仏・蘭ノ軍、艦來侵ノ説アルカ故ナリ

一 對州トハ親ミ厚ク、尤御問柄ノ事ニテ、夷船通行之事共時々内通有之候由、

一 当月十一日京師ノ飛脚到着、決シテ御用召一条ノ事ナラントノ下評、右ニ就テ、清末ノ毛利并右田山口入領主リ口領主毛利内匠、当廿四日發程之賦ニ候処、廿日頃水戸人十七人ツ、二隊山口へ到来ニテ、遽ニ取止メ相成、右水藩人ハ山口へ罷居候由、

一 京師ヨリ吉川御召ノ処、吉川ハ病氣申立、上京ヲ辞シ候ニ付、清末罷出候事ニ相成候由、

一 御召之飛脚到来後、罷登度ト申者無之、数日吟味混雜致シ、漸ク内匠罷登ルニ致決定候由、

一 五卿方昨廿七日下關到着、今日同所龜山宮參詣、明日引島台場見廻リノ由元來引島ト云フ唱不祥呼ナリ、トテ彦ノ字ニ替ヘタリト云フ

一 下關近辺ノ台場訓練發砲ハ、是迄一ヶ月ニ六齋式日相立居候処、此節ヨリ十五日ノ一日ト取究候段、先日触出相成候彈藥之シキカ故、ナリト相聞得候

一 綿井油下關積出シ屹ト差留相成候段、今日触出シ之由、右ハ諸方商人同所へ蔵入イタシ置候品柄ニテ、諸人大ニ迷惑ノ由、

一 先月長・防二國、農商惣体ヨリ冥加金ト唱、此節山口城築城ニ付献金致候由、尤上ヨリ命令ハ無之、人々分限ニ応シ志次第致献金、家内中ニテ夫・妻子別々ニ差出候モノモ為有之由、余程ノ金高二及候由内実ハ手ヲ懸シ、内實ハ手ヲ懸シ、献金致スベク旨

一 財用ハ未タ不之向ニ被伺、其証拠ハ、國中通融札巻割ヨリ引キ上リ致通用候ヲ以テ考合候得ハ、金銀錢不之儀ト被察候トノ話、

一 藝州廣島ノ佛護寺ハ、一向宗ノ大地ニテ、長藩トハ間柄ニ候処、山口築城ニ付金一万兩寄附イタシ候由、

一 萩ノ一向宗清光寺ハ長侯ト一門ニテ、兩國隨一ノ大地、右ノ外長・防ニハ一向宗ノ大地余多有之由、

一 山口城外堀ハ大島郡ヨリ受持ニテ、近々取付ノ筈候由、  
(前カ)

一 國中一統、天下ハ毛利家ノモノト心得居候向ニテ、頓

一 由相論シ候、(原註)

一 由相論シ候、(原註)

トノボセ切り候様子、乍然表向ハドコマテモ攘夷ヲ

主張シ、交易ヲ拒ムノ主意ニテ、国内ヲ致鼓動居候由

國中未々ノ輩遠カラス數據持軍宣  
下アルト実等數相唱候由原誌

一岩國一藩ハ本家ト異論ニ見へ、先日下關固ヲ本家ヨリ

命候処、吉川病氣ト申立相断、昨年来度々萩ヨリ直使

岩國へ差越候トモ、病氣勝ニテ不致面会、近日ハ吉川

家中ノ何某、兼テ狂乱ノモノ候処、或寺へ押入り、住

持僧ニ切掛リ逃去候処、本家奇兵隊ノ所為ナラント岩

國中大騒動ニ及ヒ、召捕方ニ手配致候由、右旁ヲ以テ

モ異論ナラント長安寺話、

一先頃長州ノ間者出家体ノモノ、廣島城内水門ヨリ忍入

リ候ヲ、芸人見咎メ候ヘトモ取逃シ候由、

一毛利藏人(元謀)領主(吉敷)当分引入居候、此者毛利出雲兩人、先達

ヨリ上京之筈候処、曳入相成上京モ取止メ、長府侯并

國司主計(主計ハ信濃カ旗カ)・貴島又兵衛(貴島来島ノ誤)上京ニ相決シ候由、

但上京人数ハ前文ニ記候通ニ相違有之間敷候得共、

孰レヲ実トモ未難定、

一兩國浦々当分船留相成居候、右ハ上京ノ手当ト相聞候、

此説ハ実説ナルヘシ、

一永井雅樂(時譜)昨年死去之時辞世

君か為すつる命は惜まねと猶おもわるゝ国の行末

一藝州宮島へ浪士多人數入込居候ヲ現在見当候由、四拾

人許モ可有之トノ事広島人話、

一廣島へハ長人并浪士ハ決テ不入付様嚴令相成候由、

一小郡口ハ平坦ト相見得候ニ付、(本山崎、山口眞小野田也)元山岬ヲ打廻リ上陸イ

タシ、小郡へ攻入可然歟、宮市口・萩口・津和野口ハ

イツレモ險路難入場所ト相見得候トノ話、

一唯今迄ハ、長藩内備未整向ニテ、山口築城ハ勿論、台

場等モソコノ之事ト相見得候得共、時日ヲ経守備嚴

重成立候上ハ、中々六ヶ敷キ要害ト見受候ト長安寺僧

話、

但内備完成ノ上ハ、彼ヨリ打テ出ルノ用意モ候半ト

ノ説モアリ、尤ノ事ト存候、

一長州下關・三田尻辺ニテ流行大枝(杖カ)ブシ、

おういゝ毛唐人、そのふねこちらへ渡しやかれ、

船のやつこはひくり仰天し、いえゝ唐人ぢやござ

りません、交易の積廻し、とふそ通してくださんせ、

やれゝうるさい不忠もの、大筒て何の苦もなく一

打に油と綿とて、とんどこ燃へ上り(旧臘十二月燒沈メラレタル汽船ニ綿ヲ積ミ、

又浜崎カ船ニハ綿・油ノ二、品ヲ積ミタルヲ云フナラン)

又よいしょこおし

やけば名か立つやかねはならぬ やるてよいのハさ  
つまいも

いもや砂糖はなくてもすむが なくてならぬは米と

塩 長・防二州ノ物産第一ナルハ、米・塩・紙  
ノ三品ナリ、故ニ三白ノ産物ト通唱セリ、

此外薩摩誹謗ノ歌多シ、記スニ違アラス、僉長人又ハ  
浮浪ノナス所ナリト云フ、

右熊本産ノ僧長安寺ノ僧ヨリ三月朔日承ル、

以上三月廿八日迄ノ記聞ナリ、

同シク重野探訪

小倉藩之事情

一当藩諸士人数五拾石以上三百家部、其余ヲ組外ト唱へ、

徒士ノ株三百、都合六百、輕卒ハ此外ナリ、

一当分大里番兵一隊、廿日交替ニテ相詰ル、城下客屋へ

モ一隊相詰居候、一隊人数上下式百人位ノ由、

一昨年下關戰爭後於当藩モ砲造ニ手ヲ付、寺院ノ鐘類ハ

勿論、城下其外領内暗燈ノ下皿迄モ、銅器ハ惣テ買上

ケ相成、郭外南手ニ水車仕掛之鑄製場取建、大小砲鑄

造最中ニ御座候、

一城下浜辺ニ二ヶ所ノ台場築立、追付成就之体ニ相見得、

随分能キ構ト相見得、大砲ハ式拾四ノ字封度以下居付、

挺數ハ未不究由、

一当藩ニ於テハ全ク退守ノ方ニ專ニシ、進取ノ略ハ毛頭

無之、万一長州ヨリ攻寄候ハ、十月十五日之籠城ハ

可相叶、其内ニハ薩・肥ノ応援モ可有之トノ軍議ノ由、

要路ノ者直話、

一長・防辺探索モ、格別手ヲ付候儀無之、漸ク近日少シ

ツ、聞合ニ、心ヲ用候体ナリ、

一京師御模様幕議兎角因循ニ趣キ候ヲ汲受、諸事手管間

後レ、怠惰ニ陥候向ニ被察候、

一先達テ当路ノ者向人秋月住左衛門 茂昌三郎平熊本へ差越、彼藩手当向

其外ノ事情聞合候由、小倉ハ小藩弱國故、迎モ長藩ニ

難敵、薩・肥ニ倚頼ノ心底ニテ、其儀ハ家中ノモノノ共

追々口頭ニ相顯シ候得共、信実ハ肥後ニ手寄ノ方重ク、

御國ハ外ニ親ミ、内ニ疎キ様子トモ見受候、

一門司浦ト田之浦ノ間ニ芽刈明神ノ鼻ト申ス所ハ、長州

壇ノ浦へ差向ヒ、差渡七八町モ可有之、前田ハ少シ筋

違ニテ、是モ十町内外ノ隔ニ候処、此山腹ニ小キ台場

二ヶ所築立有之、右ハ元來異船攘撃ノ用意ト相見得候

得共、此台場ヨリ壇ノ浦・前田ヲ見下シ致砲發候ハ、

両地之台場ハ可粉碎、屈竟ノ地形ト見受申候、尤壇浦台場ノ火薬庫モ目前ニ相見得申候、

一 大里ニ久留米ヨリ台場築立、番兵上下式百人余モ詰居候、右ハ昨夏下關戰爭後、彼藩牧和泉真木ノ誤カ党ヨリ致建

言候哉、台場ヲ築キ番兵ヲ置候事ト相成リ、当分モ其俣ニテ右台場詰ノ者共、下關辺長州人浪士輩ト、于今

致往来候哉ニ相聞得、別テ当藩人嫌ヒ悪ム様子ニテ、追出シ度所存ト相見得候得共、力不及無是非体ニ被察

候  
久留米藩如斯他領ニ砲台ヲ築クハ、  
真木力策ニ出タルヤ疑ナシ(倉註)

一 当藩ヨリモ大里へ番兵一隊差出シ置候得共、台場迎ハ無之、仮小屋様ノ所ニ野戦砲式三挺コロバシ相詰居候、

ケ様ノ事態故久留米番兵モ頗ル凌蔑ノ体ヲ現ハシ、時々同所市中ナト、致横行候事トモ為有之由、依之当藩

ハ弥久留米人ヲ嫌フ事情ト相見得候、

一 先々ヨリ中津藩ト不和ノ由、中津城下海手ニ、当藩領飛地少々有之、其所海防屈竟之場所ニ候故、昨年彼藩

ヨリ右之地ヲ借用シ台場致造築度、又ハ替地ニテモイタシ呉候様及相談候処、種々ノ異論ヲ立不致承引、ト

ウ〜台場築方取止候由、

一 国中上下茶湯等大流行、或植木鉢ヲ玩ヒ、婦女ニ戯レ、

散々之風俗ト被相候、要路執柄ノ者ニハ左ノ通り、

家老 小宮四郎左衛門

用人 秋山庄左衛門小宮カ妻兄ナリトソ

神社奉行 上條八兵衛町奉行兼役

元占奉行 茂呂三郎兵衛前ニハ三郎平ト記ス何レカ是ナリヤ

右ノ數輩ト相聞得候、茂呂杯ハ時々面会、其中上條ハ稍骨幹有之モノト相見得候、

一 城之東手半里許ノ所ニ、妙見山ト申所少シ引上リタル地形ニテ、前面ハ平田海ニ続キ、後ニ山アリ、山上ヨ

リ大里・田浦辺并長州地一面ニ見渡シ、形勝之地ニテ其辺ヲ足立村ト唱へ、大地之寺院脇坊并民家モ烟立、

兵士屯所ニ宜シキ場所ト見受申候、

熊本藩

一 先月廿四日、沼田勘解由大目 從京師帰国、十余藩密命ヲ奉シ罷下リ候由、則日於君公御前執政両三輩并溝口

藏人等会合ニテ、終日密議有之、其節列席ノ外ハ執政ト雖モ毛頭洩聞サル由、極々機密ノ向ニ相聞得申候、

一 此節手当人数ハ、左ノ通ノ由長藩征討ノ内命下、  
レルニ就テナリ

備頭 溝口藏人五十余歳ノ由

大目附役 沼田勘解由



右溝口ハ、衆人称美スル人物ノ由、此以前引込  
リ居候モノ、由、

備人数貳千人以上三千人位ノ間、

大砲四拾挺（連丁五  
人付）

此人数貳百人余

小銃隊三百人

但步卒

騎馬隊二組（番方トモ唱フ、  
一組ノ人数五十人）

此人数百人

弓隊凡百人

右ノ外ニ着座衆ト唱候大身分ノ者手人召列レ、一備ニ

幾頭ト相付居候由、此人数不相知候、

右ノ一備用意相成候由、尤機密ニイタシ候由ニテ、細

事ハ相知不申、君侯名代等ノ名モ未タ相分リ不申候、

一当月十四日、山鹿ノ海ニアル小代山ト申所ニ浪士立入

候トテ一ト騒動有之、右ハ水戸浪士三拾人余入り来候

テ、召捕ニ取掛候処、尽ク亡失、薦僧体ノ者一二人召

捕候由、

（熊本県  
熊本島）但高瀬町ノ医師松元大清ト申ス者、（富鹿）轟武兵衛・山田

（信濃）十郎ナト一味ノモノニテ、兩人被召捕候砌ヨリ逼

塞被申付候ヘトモ、他国出生輩不断相通ヒ居候由、

右高瀬町小代山ノ麓ニ当リ候地形故、決テ右大瀧

連累之浪士ニ候半ト、熊本長安寺カ嘶ニテ候、

一前文ノ一件ニ付、国人旅人取締別テ六ヶ敷相成リ、他

所ヨリ在付居候婢僕輩迄モ、生国ヘ為差返候様ノ仕向

ニ候由、

一長安寺ノ僧嘶ニ、国許ヨリ長藩ヘ内通ノモノ有之ハ必

定ニテ、国事相洩レ候事共多ク、尤轟武兵衛ナト被召

捕候始末、細々於彼地聞得候ニ付テハ内通無疑松元大

清モ疑ハシトノ嘶ナリ、

但長安寺ハ当月二日国元ヨリ内命ヲ受発足、藝州ヨ

リ防州岩國・宮市辺ヘ差越、今卅日当所ヘ帰ル、

筑前藩

一昨冬当藩ヨリ長州ヘ金壹万兩被借遣候由、筑前ノ蔵役

人某カ直話、

一当月廿四日晝、当藩要路ノ役人、牧一内ト申モノヲ致

刺殺候由、右刺客ハ兩人ニテ行衛不相知、翌廿五日ニ

牢屋ヘ多人数押入り、致入牢居某等ヲ救ヒ出シ逃去リ

候由、大騒動ノ由、

中津藩

一昨年夏下關戰爭ノ前、長門侯ヨリ御直書ノ往復有之、  
当藩ヨリモ御墨附被遣<sup>子細ハ不相分候ヘドモ、攘夷變</sup>、戰爭後右  
御墨付取返度ト中津ヨリ致心配居候由、其後如何相成  
候哉ト、小倉藩士ノ話、

一近日当藩ヨリ長州へ金子借用ノ相談相成候由、長安寺  
カ話ナリ、就右此僧モ内実ハ長州へ組シ居候半ト疑惑  
ノ廉モ有之候由、

一小倉トハ兼テ不和ナル上、昨夏以来ノ事件ニ付、弥嫌  
疑ヲ生シ、長州徒党ノ由ニ小倉人ハ申居候、

久留米藩 土佐藩

一右両藩モ疑ハシキト小倉人ノ説ニ候、此両藩ヨリ浪士  
多人數長州ニ入込居候ニ付、右旁ヲ以テ懸念致候義ト  
相見得候、

右之通承得候事件条記仕候、何分諸説紛紜実否相分  
リ兼、殊ニ長藩ハ旅人取締方追々六ヶ敷相成、仮令  
ヒ首尾能入込候トモ、土地ノモノ細事旅人へ嘶不致  
由、唯外表ノ見聞ノミニテ機密ハ相洩レ不申候間、

旁御推計被下御取捨被為在候様奉存候、

子三月晦日

重野厚之丞<sup>(安傳)</sup>

附啓

長州全国絵図ハ、先日松方助左衛門<sup>正藏</sup>トノへ  
相渡シ差上候間、御入掌相成候半ト奉存候、

## 二六八 薩州御屋敷内へ廻文之写

少将様御事、去廿二日依召ニ一條御城へ被遊御登城候処、  
於牡丹之間ニ御用番水野和泉守様ヨリ御演達、壹年来  
御国家之御為御励精御尽力、当節之御場合ニ至候段、  
御満足被 思召候、依之御鞍置馬御拝領可被成、御精  
勤旨御書付被遊御拝領、左候テ御居揃之上、於御座之  
間御目見、御乗ニ被為蒙 上意、御刀被遊御拝領候、  
且又太守様御事御用之儀被為在候間、去ル廿二日御名  
代御一類之内、二條御城へ被成 御登城候様、御老中  
水野和泉守様ヨリ被 仰渡候ニ付、御名代トシテ松平  
甲斐守様被成御登城候処、近来御国家之御為、藩屏之  
任ヲ御尽シ被遊候段、御満足被 思召、依之御差之御  
刀・御脇差御拝領、御励勤可被成御勤御書付被遊御頂  
戴候段被 仰渡候、此段御達申入候、

子三月